



紅葉野日記／田所稻造

設定

■設定

(室山県立敷島女子高等学校のみなさん)

高槻 沙織 (たかつき・さおり) ※JR京都線 高槻駅から苗字を拝借。

香枚井駅近く、春名坂の洋菓子屋の娘。英語と体育のみ成績優秀で、県下有数の進学校「県立敷島女子高等学校」を目指す。勉強も遊びも平等に両方するタイプで、ゆるーい性格。香枚井中学校区。紅電香枚井駅係員、霜田拓也さんラブな、恋に恋するタイプ。愛称は「さおりん」。どちらかと言えば文系。特に外国語系が強い。一方、理数系はからきしダメ。甘い紅茶と、洋風スイーツを愛する。夢は子どもが喜ぶみんなのお菓子屋さん。嫌いな食べ物は、あずきで出来た餡と、いちご大福(大豆など豆系にアレルギーあり)。いちご大福は邪道だとして特に嫌う。時折、電車で眠りながらノスタルジックな夢を見ながら涙するような、快活だけどシャイな少女。

服部 美月 (はっとり・みづき) ※阪急宝塚線 服部天神駅から苗字を拝借。

春名坂上(榛名天神駅前)の老舗和菓子店の娘。「県立敷島女子高等学校」を目指す。負けん気根性があり、男勝りでリーダータイプ。梨音、桃花と同じ、春名中学校区。既に、国公立の大学(室山大学)を射程圏内におさめようと頑張っている。愛称は「はっとり」。たまに愛称で呼ばれると「馴れ馴れしい!」と怒ることも。嫌いな食べ物はチーズ。ピザからチーズケーキまでダメ。

立花 梨音 (たちばな・りおん) ※JR神戸線 立花駅から苗字を拝借。

香枚井駅近く、春名坂の電器屋の娘。たちばなデンキの跡取り.....になる予定が女子。理工系が得意。美月と同じグループ。「県立敷島女子高等学校」の情報処理科を目指す。人なつっこく、さむーいジョークを飛ばす。人生イコールウケ狙い。人生全て商売商売。愛称はそのまんま「梨音」。言われるのが「お前、よく敷女に受かったな」。どちらかと言えば理系。なぜ工業高校にしなかったのか。それは「敷女の制服がかっこかわいいから」。事実、服装をアレンジすることが好きで、制服のスカートを折ったり、私服を全部自分で作ったりできる。そのくせ家政科ではない。なお、実家は電器店で、Nasapanic(ナサパニック)のお店。

柏原 桃花 (かいばら・ももか) ※JR福知山線 柏原駅から苗字を拝借。

香枚井駅近く、春名台団地の至って普通なサラリーマン家庭に育つ、折り目正しい女の子。美月と同じグループ。中学一年の時に、東京都から、市立春名坂中学校に転校してきた。「県立敷島女子高等学校」を余裕で目指す。愛称は特になく「桃花」。後輩からは「ももっち先輩」と呼ばれることになる。どちらかと言えばコツコツ努力するほう。比較的成績はいいのに、時々、

ぼーっと空を眺めていることがある。敬語キャラ。災害などの臨時ニュース等で民放ラジオ局へ向かう父親の帰りが心配なお年頃。



高槻 紫織（たかつき・しおり）

ヒロイン沙織の、ふたつ年上のお姉さん。室山県立敷島女子高等学校、普通科在学中。妹とは違い、背も高く、やることなすこと凜々しい。妹いじりが大好きで、演劇部所属。生まれつきガチ百合属性があり、よく同級生を家に泊めては、百合雑誌を読んだり、百合話に花が咲いたり、妹いわく「ゆりんゆりん族」と蔑まれている。彼氏いない歴イコール年齢。作ろうとも思わないし、まるで異性に興味を持たない主義。

田辺 啓子（たなべ・けいこ） ※大阪市営地下鉄谷町線 田辺駅から苗字を拝借。

刈羽台に実家がある、田辺青果店の長女。シエスタ香枚井（複合ビル）に店舗を構えている。家庭科部員の一年生。見た目素直でおとなしそうなのに、商売の話になると、セールスのマシンガントーク（フルーツの営業）を繰り出す、おろそかに出来ない女の子。

長瀬 千秋（ながせ・ちあき） ※JRおおさか東線 JR長瀬駅より苗字を拝借。

新長坂と香枚井駅の間に住み、お金を節約するためにわざわざ香枚井駅まで自転車で通学するスポーツウーマン。中学よりチア部に在籍しており、高1で全国大会制覇。チアリーディング部の副部長。室山県立敷島女子高等学校、家政科。室山県チアリーディング大会で優勝した経験がある。地元服飾短大へ向けて進学勉強中。高校野球の友情応援では、室山工業ベンチで熱血応援をする。

私市かなえ（きさいち・かなえ） ※京阪電気鉄道 交野線 私市駅より苗字を拝借。

敷島駅や香枚井駅よりうんと遠い、北部室山県（室山県麦野郡）の高原地帯、麦野原市の紅電麦野原駅より通学する、沙織たちの学級委員長。香枚井登下校組とは全然通学のレベルが違う（特急メイプルライナーで通学）が、グループ同士仲が良い。特に、美月とかなえは仲が良い（優等生同士の連帯感というか何というか）

板宿 美香（いたやど・みか） ※山陽電気鉄道・神戸市営地下鉄 板宿駅より苗字を拝借。

榛名天神よりももうひと駅北にある急行停車駅、吾野本陣駅在住。敷島女子高校志望の普通の家庭の女の子。家庭科部に入ってのんびりまったりしたい。特に進学はいまのところ考えていない。典型的な妹キャラ。沙織たち2学年の時に、1学年に入学する。

（教職員のみなさん）

松井 和俊（まつい・かずとし）

室山県立敷島女子高等学校、第48代学校長。文化祭では、ステージで照れくさそうに「マイ・ウェイ／フランク・シナトラ」を原語で朗々と歌う。元英語科教諭。なので、担任・相川杏子に多少同情的。

相川 杏子（あいかわ・きょうこ） ※阪急京都線 相川駅から苗字を拝借。

普段はおしとやかで、柔和で、女性の理想像を体現する、クラス担任。室山大学教育学部卒。敷女OG（普通科卒）で、英語科担当教諭。だが、それは世を忍ぶ仮の姿。たまーにキレるが、一度キレたら、もう誰にも手が付けられないし、誰にも止められない。暴走生徒とパワハラ上司とPTAに囲まれて、過去に十二指腸潰瘍を患ったこともある。現在、自律神経失調中。婚期を逃し、出会いもない、幸薄き女性。

柴島 祥恵（くにじま・さちえ） ※阪急千里線 柴島駅から苗字を拝借。

家庭科部顧問の先生。敷女OG（家政科卒）。家政科担当教諭。既婚者であり、サバサバした性格。根に持たない。すっかりワーキングマザーが板に付いた年齢である。家庭科部では、みんなのお母さんの存在。

藤井奈緒子（ふじい・なおこ） ※近鉄南大阪線 藤井寺駅から苗字を拝借。

保健室担当教諭。敷女OG（普通科卒）。どちらかと言えば、みんなの上級生といった感じで、大人の女性ではあるものの、大人びて見えないところから、学校の生徒に慕われる。

マイク・ゴズウェル（Mike Gozwell）

英語の臨時男性教諭。イングランド、リバプール出身。フットボール（サッカー）とハンバーガーが大好き。ハハハーハ、ハハッと豪放磊落に笑う。体格は大柄。ジャパニーズガールズが、下ネタに反応して「きゃー」と言うのを、とても愉快がっている。なお、日本語は堪能だが、発言が滅茶苦茶である。

（香枚井駅駅員のみなさん）

霜田 拓也（しもた・たくや）

地元私鉄「紅葉野電鉄」香枚井駅に勤務する駅員。霜田家の長男。最初に沙織が彼に好意を抱く。責任感が強く、実直で、誠実な人柄。今度、車掌昇進試験なら受けてもいいかなと思っている。石橋を叩いて渡る性格。何事も几帳面。一応、父親の勧めで自動車二種免許は持っている。本気を出せば代行バスも動かします。最近、美月や沙織に「むっつりスケベ属性」をつけられていて、激しい誤解を招いているが、単に女性に対して淡泊なだけ。

霜田 翔（しもた・かける）

「葱北本線」香枚井駅に勤務する駅員。霜田家の次男。美月や沙織に「おっぱい星人属性」をつけられて、激しい誤解を招いている。事実、思い切ったセクハラな言動をすることがあるが、単にまだ子どものような好奇心があるだけ。サキソフーン奏者でもある。動力車免許を取り、運転士昇進試験なら受けてもいいかなと思っている。（車掌昇進試験なら既に受けている）その名の通り、バイクで風になるのが好き。本気を出せばハーレーダビットソンも運転できます。



■室山県立敷島女子高等学校

過去の名称 室山県立敷島高等女学校

国公立の別 公立高校

設置者 室山県

設立年月日 1900年4月

共学・別学 男女別学（女子のみ）

課程 全日制

単位制・学年制 学年制

設置学科

普通科・家政科・情報処理科

学期 3学期制

所在地 室山県敷島市梅香2丁目1番1号

沿革

- ・1900年（明治33年）4月 - 室山県初の女学校として、神崎郡敷島町大字梅香に創設、室山県立敷島高等女学校と称す。
- ・1944年（昭和19年）6月 - 室山南部空襲にて、教員・生徒に死傷者が出る。
- ・1948年（昭和23年）4月 - 学制改革で、室山県立敷島女子高等学校と改称、現在に至る。

アクセス

- ・JR葱北本線、紅葉野電鉄本線 敷島駅徒歩5分。
- ・神崎海浜バス JR山陽本線磯口駅北口からバス20分。

■室山県立室山工業高等学校

過去の名称 室山市立室山工業学校

国公立の別 公立高校

設置者 室山県

設立年月日 1933年4月

共学・別学 男女共学

課程 全日制

単位制・学年制 学年制

設置学科

機械科・工業化学科・電気科・情報技術科

学期 3学期制

所在地 室山県室山市背楯3丁目11番1号

沿革

・1933（昭和8年）4月 - 室山県初の工業学校として、室山市大字志賀原（現在の県庁近く）に創設、室山市立室山工業学校と称す。

・1948（昭和23年）4月 - 学制改革で、室山県立室山工業高等学校と改称、所在地を室山郡背楯町大字背楯に新築移設。

アクセス

- ・JR 葱北本線 葱州長坂駅 徒歩10分。
- ・JR 葱北新線 背楯駅 徒歩5分。

- ・紅電バス 31系統 紅電香枚井駅からバス20分。

沙織ちゃん、敷女を目指す、かも？

■沙織ちゃん、敷女を目指す、かも？

ここは、室山市香枚井。県庁所在地の北の玄関口に当たる。ここ、香枚井中学校校区にある、小洒落た洋菓子店、パティスリー・高槻洋菓堂というお店に、中学三年生になる、高槻沙織という少女がいる。九〇歳になろうとする元祖、パティシエの祖父・祖母をはじめ、店を切り盛りする父母と、現在、高校二年生の姉・紫織と、沙織の六人暮らし。つまり、沙織は末っ子で、天然ボケの母や姉のツッコミ役として、普段から何かと頑張っている。

母の恵美は、室山県立敷島女子高等学校のOG。姉の紫織は、同じく敷女の二年生。なので、両親から……いや、母や姉からは「あんたも敷女行きなさいよ」と普段から、ほんわりと、しかし、真綿で首を絞めるように、徐々にプレッシャーをかけ続けられていたのだった。事実、香枚井中学校では、三者面談の時にも、将来の進路を、母親が勝手に「娘を、敷島女子に絶対に入れたいと思います」……などと言うものだから、親と姉に敷かれたレールを、黙々と歩まざるを得なかった。

だが、沙織は英語と体育以外はからきしダメで、とても偏差値六〇の敷女へ通うなんて、無理に決まっている。そう思い込んでいた。非常に悩んでいた。「わたしなんか、敷女なんかに受かりっこない……」と、日に日に悩みは深くなって行くのだった。ある晴れた昼下がりの日曜日、高槻家のリビングにて。沙織は母と紫織とで、ソファに座りながら、手足バタバタ、涙ポロポロで、反抗期むき出しで、何故だか怒っていた。

「やだやだやだやだー！ 敷女なんて行きたくなーい！ 絶対無理！ 一〇〇%無理！ 無理無理無理無理ー！」

「あら沙織。地団駄踏んでも無駄よー。だって、もう、家庭教師たのんじやったんだもの。ふふふ」

「ママ！ 余計なことしないでっ！ わたしは近所の県立香枚井高校で、三年間、共学で過ごしたいの！ いきなり家庭教師って！ きっと、ガリ勉おたく連れてくるに決まってる！ やだ、やだやだ！ 絶対に嫌！」

「沙織、敷女って結構過ごしやすいよー。男子の目を気にすることもなく、フリーダムな世界！ 絶対に後悔させないってば、おいで！」

「お姉ちゃんは、ただ単に性格が百合なだけでしょ！ 一緒にしないで！ ああっ、もう！ 女子高と言えば、同性愛……げっ、想像しただけで気持ち悪い……」

「沙織？ 家庭教師を、あなたの大好きな、霜田拓也さんに頼んでおいたから、よろしくしてあげてね？」

沙織は泣き止んだ。霜田拓也。彼は、今でこそ地元私鉄「紅葉野電鉄」略して「紅電」の香枚井駅係員だが、幼い頃は、近所の児童公園で遊んでいた仲だ。本当のところ、沙織にとっては初恋の人。幼心に「おおきくなったら、たくやお兄ちゃんのお嫁さんになるの！」とまで言い切ったことがあった。霜田拓也。彼は、葱州長坂駅が最寄りの県立室山工業高等学校機械科卒。学校推薦で地元私鉄に入社した、比較的クレバーな男だった。

「え？ 拓もお兄ちゃんが、カテキョ？」

紫織や恵美が、さらにたたみかける。

「そうだよ。霜田さんなら、あなたも抵抗ないでしょ。だったらそうしなよー。ほら、わたしのお下がりのセーラー服あげるから、ほーら！」

「ぐえ！ そんな汗臭いポロポロのなんか、いりません！ でも、拓もお兄ちゃんかあー。ちょっとかんがえておく」

「あらまあ、やる気になってくれたのね！ お母さん安心！」

「安心させた覚えはなーい！ あくまでも、絶対に、県立香枚井高校で、健全な青春を過ごすんだもん！ レズで百合なお姉ちゃんとは、絶対に合わない！ タイプが違う！ わたし、共学がいいんだもん！」

「どこまでも意固地ねえ……あ、もうじき、霜田さんが朝番の勤務を終えて、うちに来る頃ね！

ケーキとお茶で出迎えなきゃ！ お母さん、ちょっと支度してくるから、霜田さんに、『わたし、ちゃんとお敷女に行きます！』って言わないと、お小遣い抜きですからね」

「ちょっと！ お母さん！ ひどいー！」

「まあまあ沙織、おねえさまの後、ついといで！ 先輩としてみっちり指導するから！ よろしく！」

「よろしく！ じゃなーい！ 勝手に決めないでー！ それから……」

ping... pong...

「噂をすれば、ほら来た！ 沙織！ 玄関まで行っといで！ わたしも行くから！」

「なんで一緒にー？ お姉ちゃんのバカ！ この、裏切り者！」

「はーい、どちら様？ 霜田さんですか？ 今から開けますねー！」

「……」

玄関ドアを開けると、そこにはネクタイにカッターシャツ、制服のオリーブ色のズボンを履いた、イケメン……という程整ってはいないが、容姿そこそこ格好いい、7等身男子がそこにいた。

彼こそが、沙織の初恋の人、霜田拓也だった。紫織が彼を招き入れる。

「どうぞー、いらっしゃーい！ お待ちしてました！」

「どうも、こんにちは。僕が家庭教師で良かったのかなぁ」

「大変助かりますー！ この子にお勉強教えてあげてください！ さあさ、二階へどうぞ！ 沙織の部屋へGO！」

「もう、お姉ちゃんったら！」

「沙織ちゃん、今日は何でぶんすかしてるんだい？」

「あのね、聞いてよ！ 百合族のお姉ちゃんが、敷女にわたしを入れたがって……むがっ！」

紫織の手が、沙織の口を塞いで、沙織は何か不平不満をモゴモゴ何か言いたそうだったが、紫織は無言を言わず階段を引きずって、沙織を無理矢理勉強部屋へ連れて行くのだった。

家庭教師は霜田さん！

■家庭教師は霜田さん！

ここは、高槻家の沙織の部屋。拓也は、沙織の身に何が起きてるんだ！　と言わんばかりに、オロオロ、オタオタしているが、そんなことはお構いなしに、紫織に口を塞がれ、首を絞められている沙織は、また泣きじゃくりながら、口をモゴモゴさせ、両手両脚で紫織を殴る蹴るしていたのだが、全然効果がないようで、黙って引きずられ、勉強机に無理矢理座らされようとしているのだった。

「ちょ、紫織ちゃん、余り沙織ちゃんに暴力は、ちょっと、さすがに……」

「霜田さん、これは、うちでは日常茶飯事な出来事なので、心配なさらないで、ねっ！」

そう言い放つと、ドサッと、沙織を勉強机に無理矢理座らせるのだった。

「ぷはー！　もうっ！　お姉ちゃん最低！」

「いいこと？　絶対に敷島女子に入って、私の後輩になりなさい！　さあさ、霜田さん、この子にお勉強教えてあげてくださいね！　あ、このメモ、私の携帯の番号ですから、何か反抗期が始まったら、わたしの部屋まで電話してくださいね。それじゃあ、後はよろしくおねがいしますね！」

ドアがバタム、と閉じられた。困惑する拓也。何かをこらえていそうな、涙爆発寸前の沙織。非常に気まずい。

このように、性格的に、常に一方的な姉・紫織であった。そんなことはともかく、目の前で涙ながらにゴホゴホむせて、ゲホゲホ言っている沙織を見るに見かねて、拓也が、たまらずに沙織に声をかけた。

「沙織ちゃん、大丈夫か？　なんか、ドタバタして、無理矢理そうなんだけど……」

沙織が、真っ赤な顔をして、大粒の涙を浮かべて、上を向いて、しばらく鼻をすすったかと思えば、突然、隣席の拓也の太腿に顔を突っ込んで、大声で泣き始めるのだった。ますます、手に負えなくなり、ひたすらうろたえる拓也！

「ぐしゅ、ぐしゅ、うわあああーん！　助けて、お兄ちゃああん！　う、うえええん」

「助けろって、一体、何が何だか分からない……じゃ、じゃあ、まずは落ち着いて、一旦、顔を上げて、ゆっくりと深呼吸してみようか、ね、沙織ちゃん！」

「無理ー！　うわああああん！　わたし、わたしになんか、敷女は無理.....受かりっこないよ
おおお！　わ、わああああん！」

（これは時間がかかりそうだな.....泣き止むのを待とう）

沙織は、拓也の膝元で、かれこれ十数分、ぎんぎんと泣き続けた結果、ようやく気が済んだらしく、目許をこすりながら、ようやく起き上がって、鼻をすすすん、すすすんしていた。

■霜田拓也のレクチャー

拓也は、泣き止んだ沙織を何とか机に向かわせて、今日の目的であるお勉強を教えにかかるとは、……。こんなメソメソさめざめ泣いている沙織の勉強が手に着くはずもなく、とりあえず、拓也の出身校の室山工業高校と、近所の香枚井高校と、沙織が絶対嫌がるはずの、敷島女子高校のホームページを見せながら、お茶とケーキをたしなみつつ、世間話をすることに決めた。

https://pref.muroyama.lg.jp/school/muroyama_th

「あ、室山工業高校のホームページ！ 霜田さんの母校！」

「まあ、制服は……詰め襟と作業着だけどね、女子はブレザーだったっけ」

「え！ 女子もちょびっとだけだけど、いるの？ やだ、ものすごい逆ハーレム！」

「沙織ちゃん。案外、そういうロマンスのたぐいは、君が思っている以上に生まれないものなんだよ」

「え、そうなの？」

「例えば、夏の6限目のプールの授業。先輩方の整髪料で、プールの水は整髪料くさくって、なおかつ、整髪料だけでプール全体が白濁液状態。なので女子はプールサイドでジャージで見学な。そんな香ばしい汚染された水の中で、バタフライを泳いだ後の口の中たるや……思い出だけで気持ちが悪い……」

「ひいっ！ ひどい！」

「それに加えて、防具臭い剣道の授業。男の汗臭い柔道の授業。黙々と男同士でやる器械体操や新体操などなど」

「げええええっ！」

「だろう？ だから、余程タフな女子でないと、つとまらない。沙織ちゃんなら三日で逃げ出すと思うよ」

「うん、なんだか納得！」

「次は、香枚井高校のホームページだな！」

<https://pref.muroyama.lg.jp/school/kahirai>

「普通科だねー。ここのブレザー、超可愛い！ 絶対行きたい！」

「でもご覧、進路先。大学行くのには、ちょっと馬力が足りないかな。進学実績とか、進路・就職実績とか見ると、室山工業よりもひどかったりする」

「わたし、お嫁さんになるつもりなので問題ないです！」

「でもなー、大学出て、一旦世間へ出て、就職してからでも、お嫁さんは遅くないぞー。ちょっと言い過ぎかも知れないけど、急いで結婚する必要なんかないぞー。僕の実家は、タクシー業界なんだけど、進学するのに、実家にあんまり、お金がなかったから、即、就職できる工業高校を選んだんだけど」

「ふうん、そういうもんですかねー。きょうび、大学出てなきゃダメなのかー」

「ダメって訳じゃないけどね、将来、年収とか、結婚とかで、大きな差が出て来る。気をつけた方がいいよ」

「ふえー、勉強めんどくさーい！」

「まあ、勉強なら、一応理工系だし、三角関数とか、微積分まで教えられるぞ！」

「霜田さん、すごおおい！」

「ちなみに、機械製図、機械設計、旋盤加工、CAD、CAMまで知っている！」

「わたし、そんなスキルいらない。勘弁して」

https://pref.muroyama.lg.jp/school/shikishima_gh

「わかった。それを踏まえて、問題の敷島女子高校だな」

「もう、ホームページ見なくても、紫織の背中見て育ってるし、毎日がゆりんゆりんだし、カノジョ連れて帰ってくるし、百合のカノジョとうちでお泊まりだし、バレンタインなんか、同級生の女の子から大量のチョコレートもらってくるし！　なんだか、女刑務所みたいでいや！　絶対いや！」

「まあまあ、怒らないで、落ち着いて。おっ！　やっぱりあった！　吹奏楽部の友情応援！」

「.....それって、何？」

「昭和初期から続く、室山工業と敷島の伝統だよ。敷島女子のスポーツには、室山工業の応援団が友情応援で駆け付けるし、室山工業の.....野球とかサッカーかな、その試合には、敷島女子の吹奏楽部や、チアリーディング部が友情応援に駆け付ける。そんな伝統があってね、昔から」

「ふうん」

「あんまり興味なさそうだね。今日の所はこれくらいにして、オレ、そろそろ帰ろうか？」

「いや、もう少し待って.....ここんところ、もう少し詳しく知りたい.....」

拓也は内心、ほくそ笑みはしなかったが、確かな手応えをつかみつつあった。沙織を、徐々にではあるが、室山県立敷島女子高等学校に誘導できつつある！　と、思っていた。実は、これも、高槻親子によって仕組まれた、巧妙なワナだったのだ！　前日、沙織の母から「あなたから敷島行きを根気強く、悟られないように、沙織に説得してあげてね。ほら、私たちが言うと、沙織ったら、すぐご機嫌損ねちゃうし」などという相談を持ちかけられていたのだった。なので.....。

(ごめんね沙織ちゃん！　オレは君のお母さんに買収されてました。ごめん！　本当ごめん！)

ホームページ見たので、一晩眠って、よく考えます

■ホームページ見たので、一晩眠って、よく考えます

霜田拓也は、ビターなチョコレートケーキに、無糖のアイスコーヒー。高槻沙織は、いちごのショートケーキに、ミルクティーを、それぞれ口にし始めた。随分冷めかけている。時と共に、沙織も冷静になってきたようだった。そして、沙織のパソコンに映された、室山県立敷島女子高等学校のホームページ。そこには「生徒が作った学校紹介ページ」なるリンクが添えられていて、沙織は思わずそこをポチッとしてしまった。新しい開眼の瞬間と言うべきか。

即席ホームページ作成ソフトで作られたと覚しきそれは、学校公式ページより、幾分、いや、随分とソフトなイメージだった。そこに書かれているものは、学校のリアル、を表現していると言っても過言ではなかった。まずは、敷島女子高等学校の、入学前の印象と、入学後三年生になった時の感想とが、アンケート形式で綴られていた。

●敷島女子高等学校の入学前の第一印象

- 1位 真面目
- 2位 お嬢様
- 3位 怖そう
- 4位 おとなしい
- 5位 おしとやか

●三年生になっての我が校の印象

- 1位 明るい
- 2位 楽しい
- 3位 個性的
- 4位 元気
- 5位 爽やか

「……ねえ、霜田さん、中の方は、随分楽しんでいるみたいだね」

「まあ、自然とそうなるだろうね。ほぼ男子校な室山工業なんて、僕の中学時代、ヤンキーがウロチョロして、怖そうなイメージがあったけど、実際入ってみると、楽しかったり、個性的だったりしたよ」

「ふうーん。そういうもんですかねえー。紫織を見ていると、確かに別な意味で楽しそう。バックに百合の花が書いてあるような、そんな学校だと思う」

「またまたー。沙織ちゃん、きつともっと、いろんな性格の子がいると思うよ」

続いて、ホームページには「好きなお菓子」というリンクがあり、沙織はそれに興味を抱き、ポチッとしてしまうのだった。

●敷女生が大好きなお菓子ランキング

- 1位 チョコレート
- 2位 ケーキ
- 3位 グミ
- 4位 アイス
- 5位 クッキー

「……霜田さん。ケーキとクッキーがランクインしてるよー。うちの主力商品じゃありませんか！」

「確かに確かに」

「じゃあ、早速、お父さんに頼んで、県立敷島女子高校に営業をかけよう！」

「待て！」

●敷女生の早弁事情

HR終了後 3%

1 限目終了後 3%

2 限目終了後 27%

3 限目終了後 28%

お昼にちゃんと食べる 39%

「これ見てー。ケツサク！ お昼が待てない子がこんなに！ ぷっ！ くくく！ はー、可笑しい。わたし、紅茶吹きそうになった」

「何だかんだ言って盛り上がってんじゃねえかよ！」

「えっと、次は……」

●赴任してきた先生から見た、敷島女子高等学校の印象

- ・敷地に入った途端、落ち着いた雰囲気が出ている
- ・制服を着崩さない
- ・礼儀正しい
- ・まるでお花畑のようなところ
- ・高山植物の群生地帯
- ・女子だけしかいないことのデメリットを感じないところ

「やっぱ紫織は、ゆりんゆりん族だったんだ。ああいう姉を持つと苦労するよ」

「でも、最後。デメリットを感じさせないってところ。もしかしたらいけるかも」

「ちょっとやめてよお兄ちゃん！ まだ決めたわけじゃないんだからねっ！」

「はいはい、わかってますとも」

「もうー！」

●敷島女子に入って良かったと思うところ

- 1位 ともだちが増えたこと
- 2位 部活と勉強の両立が図れるところ
- 3位 ここでしか出来ない体験ができたこと
- 4位 進学に有利だと実感したこと
- 5位 夢に向かって前進できたと実感出来たこと

「こうして、同性のともだちばかりが増えるんですね、お兄ちゃん」

「もしも、今から僕が、敷女卒のカノジョを作ろうとすると、結構、敷居が高いかも知れないなあ……」

「高嶺の花的な意味で？ 紫織が？ 冗談ポイですよお兄ちゃん！」

「まあ、初日は、ホームページ観察という訳で、気が済んだかな？ よーく考えて、お父さんとも相談して、じっくり決めよう。じゃあ、オレ帰るから、一晚眠って、よく考えなよ！ 沙織ちゃん！」

「はい！ そうしますー！ 今日はお忙しい中、ありがとうございました」

「んじゃな、しっかり頼むぜ！ じゃあまた今度」

「はーい！ じゃねー！」

霜田拓也は、階段を降りると、母親に一礼して玄関ドアから帰って行った。

沙織のお勉強タイム！

■沙織のお勉強タイム！

わたしは高槻沙織。中学三年生になりました。市立香枚井中学校に通っています。とても賑やかな、香枚井駅前からバスで少し東へバス道を自転車で走ると、おじいさんと両親がやっている洋菓子屋さんがあります。「パティスリー 高槻洋菓堂」という、古風なネーミングセンスは、おじいさんが考えました。わたしは、そこの娘です。ひどい百合属性を持つ、姉とふたり姉妹です。

まだ、世の中の広さも、大人の事情も、何にも知りません。ただ、いまは漠然と、両親に従って、将来は、洋菓子屋さんを継ぐのかな、と思っています。

得意教科は、体育と英語です。それ以外は、とてもついていけなくて不安です。お母さんが、敷島女子高校の卒業生で、同窓会があると、いつもおめかしして出かけます。とても楽しそうに酔っ払って帰って来ます。なので、お母さんは、わたしを、その敷島女子高校に入学させたがるのです。「あなた、わたしの子なんだから、敷女ぐらいいは出ておきなさいよ」と、口酸っぱく言います。そんながいい高校なのかな。わたし、勉強ついて行けるかな。そう思います。

見るに見かねた両親が、わたしに家庭教師をつけることにしました。それは、小さい頃からの幼なじみで、二十四歳になる、霜田拓也さんです。紅電の香枚井駅で、駅員さんの見習いをしています。おつとめは、朝からいないと思ったら、もう昼には帰って来ている。そんなこともあれば、昼から真夜中まで、駅員さんをしている時があります。お休みは滅多にもらえないらしく、とてもしんどそうです。

そんな多忙な霜田さんが、夜勤のないときに、わたしの勉強を見てくれます。工業高校卒業と聞いて、最初は、えっ、と思ったのですが、よく考えれば理工系で、理科や数学とかはめっちゃ詳しいです。もっと詳しいのは、メカらしいのですが、わたしにメカを教えられても困っちゃうなあ……。かといって、高校二年生の霜田 翔さんに聞くわけにもいかず……。

うわあ、もうじき霜田さんが、家庭教師をしにこちらへ向かってきます。内心、ドキドキです。歳が十個も違う男の人です。幼馴染みとはいえ、緊張しないはずがないじゃないですか。

「こんばんは、霜田です」という声が、一階の勝手口の方からして、お母さんが出迎える。「あらまあ、ご苦労様」という声が聞こえる。飲み物とお菓子を持って来たお母さんと、霜田拓也さんが、ドアを開けて入って来た。

「沙織、霜田さんが来られたわよー」

「こんばんは」

「沙織ちゃん、こんばんは。今日の宿題は何？」

「数学の、連立方程式です」

「あ、そんじゃ、オレ、わかるよ、心配ない」

◇ ◇ ◇

「えーっと、これを移項して……イコールを挟んで移項すると、プラスマイナスの符号が入れ替わるよね。そうやって、移項できるものは移項して、足せるものは同類どうし足して、簡潔に式を整理してから、Yに値を代入すれば、ほら、Xの値が求まった。これを、上の式に代入して、Yの値を求めると、ほら。解けた」

「ね、ねえ、霜田さん……？」

「何かな、沙織ちゃん……」

「近いっ！ 顔が近いっ！」

「ああ、ごめんごめん、き、緊張させちゃったかな」

「緊張どころじゃありませんよー」

「ごめんごめん、つい計算に夢中になって……」

「けほんこほん。じゃあ、霜田さん、きりのいいところで、お茶しましょう」

「そうだね、冷めちゃうし」

少し冷めた紅茶で、一息入れたわたし。そういえば、前をお願いしてあったことがあった。霜田さんの、制服姿のきちっとした写真だ。

「あの一、覚えてます？ 写真の件」

「あー、そういやあ、ポッケに。はい、沙織ちゃん」

「うわあー、働く男！ って感じですね！ いただきちゃっていいんですか？」

「もちろん」

紅電の電車を先頭にして、白手袋で敬礼している、制服姿の霜田さんだ……。うわー、どうしよう、どうしよう！

「ありがとうございます！ お礼に、ケーキどうぞ！ 好きなもの一個どうぞ」

「じゃあ、モンブランにするよ」

こうして、わたし、高槻沙織は、今日何の勉強をしたのか、すっかり忘れてしまっていたので

した。本末転倒ですね。は一、敷女に受かるかなあ.....。

■服部美月のぶんすか状態

わたし、服部美月。14歳。和菓子屋の娘。いま、イラッと来ていることがある。それが、進学のことだ。親が、敷女へ行け、敷女へ行けってうるせえんだ。母親が敷女卒で、あそこにしなさいよ、って言うけど、わたしは女に生まれたくて生まれたんじゃないんだからね。親に頼んだ覚えもねえよ。あーあ、いっそのこと、兄貴の弟に生まれて来ればよかった。でも、こればかりはしょうがない……。

運命を悔いるよ。あー、やだやだ。女やってるってだけで、めんどくせえ。いろいろあるしさ。負けず嫌いなところがあって、傍目には喧嘩売ってるように聞こえるらしい。クラスで孤立したこともある。でも、誰にも負けたくないじゃんか。負けたら悔しいじゃんか。だから、親に言われなくても、勉強はするし、スポーツもする。負けたら、なめられるから。

でもまあ、今は、アホ2名がいるし……梨音と桃花のことね。何だか憎めないんだ、あいつら。何かと面倒だけど、ほっとけないんだよね。梨音は、電気屋の跡取り。「将来どうすんだ」って訊いても「先のことなんか、分かるわけないだろ」とか言うし。桃花は、東京生まれの江戸っ子で、普段おとなしいんだけど、たまに、わたしに意見してくるからね。こんな筋の通った奴は初めてだ。

春名坂中学校の同じクラス。梨音も桃花も、「敷女目指そう？」って言うけれど、オープンスクールどうすっかなあ……。男子いねえじゃん、って感じなんだけど、まあ、行くだけ行ってみるか……。どんな女共の集団か、この目で見極めてみせる。何が県下一の進学校だ。わたしを誰だと思って？ こんなもん、楽勝じゃねえかよ。



春名坂中学校の三年一組。進路希望表には、第一志望に「県立敷島女子・普通科」と書いておいた。気になるので、桃花と梨音を呼んだ。

「ねえねえ、美月い、わたしと同じだね、第一志望」

「ああ、まあな……で、梨音は何て書いたんだ？」

「同じ学校の、情報処理科と、同じ学校の、家政科」

「アホか！ 県立高校は、一個しか選べないの！ やり直し！」

「えー、じゃあ、敷女の情報処理科にするよー。あとは滑り止めだね」

「ふーん、なるほどね。でも、情報処理科は定員少ないからな」

「む、難しいってこと？」

「いや、仮に合格出来たとしても、定員オーバーで、普通科に回される」

「そんなもんですかね、美月さん」

「よし、オープンスクールとやらに出てやろうじゃないの！」

「おおー、気合い入ってるねえ……」

かくして、わたしたち三名は、敷女で決まった。夏休みのオープンスクールや、学校説明会などを見学する予定だ。

「さあ、わたしが夏期講習から持って来たテキストで、勉強だ勉強！」

「えー、遊びに行こうよー」

「そうだそうだ」

「たわけい！ 市営春名坂プールは、これが終わってから！」

「この分量だと、一週間はかかるぞ、美月……」

「えー、遊びたいー」

「黙れ、黙れ！ 一緒に敷女に受かるんだろ？ 気合いが足りんちとろうが！」

「はいはい、付き合いますとも、美月さん……」

「梨音ちゃん、がんばろうね！」

こうして、わたしと、アホ二名の夏休みは始まった……。

立花梨音のつぶやき

■立花梨音のつぶやき

わたしは、立花梨音。14歳。みんなね、わたしのこと、「梨音は悩みがなくていいね」って言う。確かに、明るく振る舞ったり、笑いを取りに行ったりする。そんなわたしを見て「梨音は無邪気だね」って言う。そんなことないよ。確かに、見た感じ、少女というよりは、少年に近いし、声だってハスキーだし、神様が性別間違えたと思えない。だったら、女という立場を利用して、精一杯お洒落したり、きれいなもの、可愛いものを追い求めるよ。特権だもの。

美月って友達がいるんだ。しょっちゅう、わたしのこと、どつくけど、仲いいんだ。男気にあふれているところが、唯一の共通項かな。あの子にはかなわない。勉強、スポーツ、学級委員長。才能がある奴っていいよなー。ちょっとはわたしにも分けて欲しいよ、才能をねー。

桃花って、転校生の友達がいる。普段はおとなしいんだけど、怒ると滅茶苦茶怖い。時に、とてもおっかない。東京生まれだからかな。どこか、洗練されたところがある。わたしにはない、スマートさがある。ファッションセンスを追い求めているのが、唯一の共通項かな。あの子にもかなわない。もちろん、おくびにも出さないけどね。

うちは、電器屋だから、生まれた時から電器屋の親父の背中を見て育ってる。商売繁盛が我が家のモットーだから。親父は一匹狼だから、自営業だから、親父がつぶれると、何もかもがだめになる。なので、将来は漠然と、親父を助けることのできる人間になりたい、ぐらいしか考えていない。毎晩遅くまで電気工事をしている親父を助きたい。

逆ハーレムな、工業高校も考えたんだけど、たまたま桃花から、敷女のオープンスクールのパンフレットを分けてもらって、わあ、このお姉さん格好いい！ 制服が可愛い！ って単純な理由で、わたしは桃花についていくことに決めたよ。情報処理科もあるんなら、わたしの得意分野じゃなか。……でも、美月が言っていた。「情報処理科は定員が少ないから、普通科に回されることが多い」って。そんなもんですかねえ……。

桃花が、オープンスクール行こう、って言い始めた。美月も、どうやら、その気になって来たらしい。こいつはうかうかしてらんないぞ！ 電話だ、電話！ 美月に電話！

「もしもし、立花ですが……」

『梨音か？ ちょうどいい、いま、わたしん家で受験勉強中だ、来るなら来てみ？』

「あっ、ずるーい！ わたしも混ざるー！」

『なんだ、勉強する気になったのか。じゃあ、中学校の教科書とノート、五教科持ってわたしん家に来なよ。急げよー！』

「はいはい、わかりました美月さん……じゃねー」

バス停で、室山三四系統を待つわたし。正直、難関校目指して勉強するなんて、想像もしてなかったもんなー。漠然と、店を継ぐ、ぐらいで……。

柏原桃花のひとりごと

■柏原桃花のひとりごと

わたしは、柏原桃花、14歳。ちゃきちゃきの江戸っ子です。でも、お父さんが地方へ転勤することが多くて、小学校の時だって、東京、仙台、佐賀、と来て、現在室山県。中学二年生から転校してきた。最初は、この室山ののんびりペースについて行けなくて、でも、どうしても友達欲しくて、今では、学級委員長の美月ちゃんと、電器屋の梨音ちゃんと仲良し。

共通点……そうだね、三人とも、性格がさっぱりしているところかな。サバサバしてるよ。江戸っ子気質に似ている何かを感じる。女の子特有の陰湿さがなかった。なので、なかなかクラスに馴染めなかったわたしと友達になってくれた。なので、ふたりには、とても感謝しています。いじめられそうになった時にも、声を張り上げて助けてくれた。

梨音ちゃんに、敷島女子高校のパンフレットをあげたら、「うわー、この学校、制服がかっこ可愛い」って言ってた。美月ちゃんは、「えー、女子高かよ、マジでー」とか引かれたけど、まんざらでもないみたい。何せ負けず嫌いだから、「難関校でも受かってみせるよ」と啖呵を切ってくれた。私たちが貨物なら、美月ちゃんは機関車か何かだよ。ぐいぐい引っ張ってくれる。

ずっと、友達でいようね、って誓い合った仲間だから、問題ないよね。って、あれ？ 美月ちゃんから携帯が……。

「もしもしー？」

『桃花か。夏期講習の教材、一緒に見ないか？』

「うんうん、行く、行くー」

『問題は、梨音なんだが……』

「なんか、お遊びになっちゃいそうだよ」

『言えてるー』

「まあ、梨音ちゃんには、それとはなくメール入れておくよ」

『来るものは拒まず、だな、いちおう友達だし』

「そうだね」

『じゃあ、わたしん家で待ってるから、急げよー。五教科の教科書とノート持って、集合だ！』

「うん、わかった、今から行くー」

美月のスパルタ学習！

■美月のスパルタ学習！

わたしの部屋で集う、春名坂中学校の梨音と桃花。わたしは、ペンをふりまわし、腕組みをして、持論を展開していた。

「なあみんな、人間の脳みそは、最初の二十分間で集中するらしい。なので、二十分過ぎた後は、インターバルを取って五分休憩。これを五教科繰り返したら、二十分の休憩。この百四十分でワンセット。みんな、ついて来れるかな？」

「そんな、体育会系のノリで……」

「インターバルとか、ワンセットとか……」

「陸上競技じゃないんだからあ……」

「ぶつくさ言わない！ さあ、これから数学をはじめよう！」

「うええ、数学かよ、マジでめんどい、証明とかが」

「皆の者、甘いものは摂ったかー！」

二人「イエッサー！」

「敷女へ行きたいかー！」

二人「オー！」

「じゃあ、一問目から行くよ！」

さて、わたしたちは、一体どういう顛末になるのでしょうか。わたしたちはまだ知らない。高槻沙織のことも、紅電香枚井駅、駅係員の霜田拓也のことも……。

そして4人は出会った！

■そして4人は出会った！

中学三年の夏休み。室山県立敷島女子高等学校の、オープンスクール。わたし、服部美月は、お母さんと一緒に、紅電に乗って、行くことになりました。もちろん、梨音も、桃花も来ています。春名坂中学校で、敷女を目指すのは、知ってる限り、私たちぐらい。みんなは大体が学区内の高校を目指している中、わたしたち三人は、全県区の公立女子高を目指している。

ここは紅電敷島駅西口。梅香交差点近くに、例の学校がある。オープンスクール目当てに参加する女子たちが、列をなして歩いている。それはそうだ。わたしらみたいなことを考えている子がたくさんいるのだから。

「じゃあ、梨音、桃花、普通科の模擬授業に付き合って」

「えー、わたしは情報処理科に行きたいなあ」

「わたしは、普通科でいいよ」

「ならば、2対1で普通科の勝ち！ さあ、行くよ！」

「しょぼーん……」

「梨音ちゃん、しっかり！」

「おばさんはね、ここのOGなの。同窓会にも行くわねえ」

ほーら、始まった、お母さんの敷女自慢……だから、女に生んでくれって頼んでない！ あーあ、女子高行き決定か？ すると、交差点の信号待ちで、うちのお母さんが、見知らぬ親子を呼び止めて、こう言うのだった。

「あーら、高槻さんちの奥さん！ ……ってというか、久美子、お久しぶり！」

「あれ？ 服部さんちの奥さん！ ……ってというか、恵美、お久しぶり！」

「奇遇だわー」

「あなたの娘さんも敷女へ？」

「そうね、そのつもりで頑張っって！」

「あら、何年ぶりかしらー。高槻洋菓堂は順調？」

「ええ、シエスタ香枚井に今度出店……って、服部宝珠庵のお餅は？」

「今度、道の駅香枚井に出させてもらいますの」

「この間のOG会、盛り上がったわよね」

二人「うふふふふふ」

ちょ！ ちょっと、どういう関係なの？ お母さん同士が、知り合い……ってというか、元同

級生ー？ まさかまさか。そんな話は初耳だわ。

「お母さん、この人だあれ？」

「めぐちゃんは、わたしの同級生だったのー」

「あら、服部さんちのお嬢さん？ 随分利発そうね」

「こ、こんにちは.....服部美月です。ど、どうも.....」

「くみちゃんのお嬢さんも、元気そうでなにより」

「こ、こんにちは.....高槻沙織です。よろしくね！」

軽い握手を交わしながら、わたしは道ばたで呆然とした。親同士が、和菓子と洋菓子だなんて.....。しかも、マブダチって一体.....。そんな中、梨音と桃花が私を引っ張って、こう言った。

「ちょ、ちょっと美月！ あの子、あなたの関係者？」

「美月ちゃん、あの子誰？ 知り合い？」

「知らん、わからん！ どうやら、親同士が、元同級生らしい.....」

◇ ◇ ◇

あっちー、脇汗パッドを着けてくれればよかったかな。それにしても、この高校生、セーラーでよく平気でいられるなー。ここは、敷島女子高校、二年生の普通科教室。もし、わたしらが入学すれば、この人たちは三年生になるのだろう。

え？ 交流タイム？ 先輩に何でも訊け？ 訊けて、何を訊けば.....えっと.....スカーフの色でも訊いてみるか。

「あ、あの.....私たちが入学するとして、私たちのスカーフの色は何色になるのでしょうか」

「え、えーっと、私たちがいま二年生だから、青色よね。だから、あなたがたは緑色になるわ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いいのよ、遠慮せずに、どんどん訊いちゃって」

「いえ、そういう訊にも.....ありがとうございました」

梨音は何を訊いていることやら.....。

「あの一、学食はどんなレシピがオススメですかー？」

「そ、そうね、メンチカツ定食か何かが、キャベツもたっぷりでお腹一杯になるよ」

「ありがとうございます、先輩！」

「済みません、このバカがお手数をおかけしました」

「み、美月い？ ちょっと、引っ張らないで！」

（ば、馬鹿者、もう少し真面目な質問をしろよ！）

（だって一、食生活も大事な問題だろー？）

（はああ、お前ったら、何でも胃袋直結だ……頭使え、アタマ！）

そういう桃花は何を訊いてるのかな？

「あの一、部活動は、楽しいですか？」

「ああ、わたしは弓道部だけどね、文化祭で盛り上がるのは、やはり家庭科部かと思うな」

「そうですか。勉強頑張ります！」

「うん、うん、その意気、その意気！」

（真面目そうな質問だな……お前も見習え！）

わたしの肘鉄が、梨音の脇腹にヒットした。

（ぐえっ……二の句が継げない……）

そういやあ、さっきの高槻沙織って子、どこへ……。

「あの一、勉強、難しくないですか？」

「そうね、大学目指してる子は、今から戦々恐々かなあ」

「普段、勉強関係で、何かされていることは？」

「まあ、大学の赤本はあるんだけどね、わたしじゃ国公立は無理かなって」

「じゃ、じゃあ、頑張ってくださいね」

す、すげえ真面目な質問！ やるわね、高槻沙織！

◇ ◇ ◇

オープンスクールも終わり、帰る時間になった。印象……。案外普通の女子が集っているんだな、という感想。暑くても冬服で耐える根性。さて、アホ二名はどうなんだろう。

「おい、梨音、何か身についたか？」

「うん、学食とパン売り場と、購買の場所！」

「……ま、まあいいや。桃花は何を訊いたんだ？」

「部活と勉強のあれこれ……」

高槻のおばさんが、口を開いた。

「じゃあ、お腹も空いたことでしょうか、喫茶店でエビピラフでも、カレーでも、スイーツでも何でもいいわ。お食べなさい」

四人「はい」

わたしは、まだ知らない。高槻沙織が、ライバルになることを。そして、マブダチになることも、何にも分からない。

◇ ◇ ◇

親とみんなで入った喫茶店。ありきたりな店だが、メニューは豊富そうだった。席は、母親がテーブルを占拠してしまったため、そのすぐ隣のテーブルを四人で座ることになった。「何でも頼んでいいのよ」……問題はそこじゃない。この、高槻沙織という、見かけない女子に気が散ってしまい、なんとなくみんな、かちんこちんになっていたのだ。だけど、静寂を破ったのは、梨音だった。

「それじゃ、わたしは宇治金時かな、はい、沙織ちゃん」「え、はい？ わたし？ そうねえ……じゃあ、ハワイアンフラッペ。あなたは？」「服部美月です。じゃあ、ミルク金時にしようかな、はい、桃花」「わたしー？ ええ、どうしよう……あんみつにしようかな」「じゃあ、決まりだな」

なんとなく、埒外というか、疎外感があった高槻沙織が、徐々に馴染んで行こうと努力してゆく様が、容易に見て取れた。そんな空気はまずいと思い、わたしが、高槻沙織に声をかけた。

「沙織さんとやら。あなたも敷女受けるの？」

「美月さんで良かったのかな……うーん、本当は共学がいいんだけどね、お母さんが、敷女のOGだから、受けなさい、ってパターンかな」

「うちとおんなじだ。見ての通り、うちの母親も敷女OG。だから、それを踏襲して、というか、お婆さんも敷女OGだからね。女系一家というわけで……」

次々に、宇治金時や、ミルク金時、あんみつが届く中、沙織のハワイアンフラッペだけが、なぜだか来ない。沙織がたまらずに店員を呼び止めた。

「どうされましたか、お客様」

「あの一、わたしのフラッペだけ来ないんですが」

「ああ、あれですね、あれは、現在作り中です」

「作り中？」

「見て驚かないでくださいね」

わたしが、食べながらくっちゃべってる間に、沙織のフラッペができあがった！ 普通のかき氷じゃなかった。グラスも含むと、高さはゆうに四十センチはあっただろうか。そこに、ブルーのシロップがかけられていて、バナナ、マンゴー、りんご、みかんなどが散りばめられていた。巨大！ としか言いようがなかった。

「ぐわー、なんじゃこりゃー」「軽く三人前はあるよね」「もはやかき氷ではなかつたりする……」「沙織さん、手伝おうか？」「え、ええ……美月さんのお好きな部分を食べてやってください」「これ全部ひとりで食べたら、お腹急降下だねー」

一通り、フラッペをみんなで手分けして片付けると、世間話になった。

「さて沙織さん、わたしらの自己紹介、はじめるね」

「あ、はい」

「わたしが榛名天神駅前の和菓子店、服部宝珠庵の一人娘、服部美月。よろしく！」

「あ、よろしく！」

「わたしは、春名台団地に住む、ふつうのサラリーマンの娘、柏原桃花。よろしくね！」

「よろしくー」

「わたしん家は、ナサパニックのお店、春名坂小学校近くに住む、立花梨音だ！」

「よろしくー」

沙織に向かって一通り自己紹介をした後、沙織はしばらく考えていたらしくって、やがて、自分の事をしゃべり始めた。

「わたしは、香枚井中学校の、高槻沙織です。よろしくね。香枚井三丁目で、高槻洋菓堂というお店の末っ子です。服部さんたちが、春名坂中学校としたら、隣の学区になります。いま、家庭教師として、紅電の駅員さんに、休みの時に来てもらっています！ 幼馴染みです」

「おおーっ」

「家庭教師と教え子というシチュエーションが、何だかやらしーですね美月さん」

「梨音、うるっさい！ ……あ、どうぞどうぞ、続けてー」

「でも、駅員さんなので、勤務がまちまちで、疲れているところを来てもらうのも、気が引けたりするんです」

わたしは相づちを打った。確かに駅員は、シフト勤務で、夜勤明けの日には、ぼろぼろに疲れているだろう。そうだ、この子を、勉強会に巻き込もう！

「高槻さん、何なら、わたしらの勉強会へおいでよ！」

「うーん、榛名天神駅前かあ……行く、行きます！ わたしも混ぜてください！」

「いいともさ！ おいで、おいで！」

こうして、母親の友人の次女さんを、勉強会に招くことになった……。

たまには遊んで来なさい！

■たまには遊んで来なさい！

まあ、なんというか、いつもの流れで、室山三四系統のバスに乗るんだが……おや？ あの子、駅事務所に何の用事だろう……。さては、例の駅員さん？

「紹介します、家庭教師の、霜田拓也さんで一す」

「ど、どうも……駅係員の、霜田です」

「はじめまして！」

(へえー、これが、沙織さんの彼氏ねえ……。確かに温厚そうではあるんだけど、なんかいまひとつパツとしないわね……)

「あの一、沙織ちゃん、この子たちは？」

「春名坂に住んでいる、お母さんの元同級生のお嬢さんと、そのお友達です！」

「へえー、そうなんだ。君たち、学校、受かるといいね！」

三人 「そうですねー」

「では何だ……？ ということは、みんな、敷女目指すことにしたんだー？」

四人 「はい！」

「じゃ、霜田さん、また今度！」

「お邪魔しましたー」

香枚井駅東口の紅電バスロータリー。室山三四系統、室山春名坂線だ。香枚井三丁目で屈曲して、旧国道六〇号線、葱州街道に行くバスだ。一方、曲がらずに真東に行くバス、室山三五系統というのは、は、室山東香枚井線という。その他、香枚井駅東口からは、いろいろなバスが出ている。

沙織さんとやらが、私の家に来るといふ。もちろん、アホ二名も一緒に。は一、やれやれ、夏ばてが悪化するわ……。

香枚井三丁目というバス停は、香枚井駅から二停留所。どうやら、沙織さんのお母さんが、ここで降りるらしい。

「じゃあ、久美子ちゃん、美月ちゃん、みんな、おばさんはこれで帰ります」

「恵美ちゃん、またね！」

四人 「お疲れ様でしたー」

「さて、と……」

お母さんが、何かを取り出した。本？ 参考書？ いや違う、県立敷島女子高校と書かれている。何のサプライズだろう……。

「じゃあ、これ、おばさんからみんなにプレゼント！ 敷女の受験対策本よ！」

「もしかして、くれるんですか？」

早速、梨音が訊いた。

「あ、あの一、お金は……」

続いて、桃花が訊いた。

「あの一、おばさま、自分で買えますから……」

そして、沙織さんとやらが訊いた。お母さんはこう言った。

「何をおっしゃいますやら。保護者たるもの、これぐらいはしなきゃね。なんせ、全員敷女に入ってもらわなきゃ困りますもの……好きにして、持って帰って。必ず勉強してね！」

「うひゃー、い、いいんですか？ 何か、千二百五十円とか書いてあるんですけどー！」

梨音がうれしそう。あいつは、タダでもらえるものなら、何でもOKだからな。

「はい、美月も。あなたが引っ張って行かずに、誰が引っ張るといふの。はい、受験対策本」

「あ、は、はあ……」

本……って、わたしもかよ！ この親は……。

そうこうしているうちに、バスは春名坂の頂上、紅電榛名天神駅に到着した。はああ、弟子がまたひとり増えた感じだな……。



わたしとお母さん「ただいまー」

三人「お邪魔しまーす」

ここは、築四百年はあろうかという木造家屋、服部宝珠庵という和菓子屋。わたし、服部美月とその家族が住んでいる。一階が店舗になっていて、二階が住居部分。兄貴の明良が店番をしていた。兄貴は室山大学経済学部に通っていて、今日はたまたま休講。似合わない割烹着姿で来客に向かって、名物「香枚井餅」ほか、和菓子類を販売していた。もちろん、バイト料という名のお小遣いは発生するのだが……。何だか兄貴とお母さんが言い争いになっている。

「お袋、オレは忙しいんだから。ゆくゆくは、MBA取るんだから、勉強の邪魔すんなよな！ もう店は手伝わねえからな！ わかったか！」

「何よ、半日つぶれたぐらいで、ぷんすかしちゃって」

「とは言ってもなあ……あ、あれ、お袋？ あの子たちは？」

「春名坂中学校のお友達と、今度新しく、OGの高槻洋菓堂さんちのお嬢さん、勉強しに来たの。来年の敷女合格に向けて、二階で勉強会などをしようと……」

「ああ、そうなのか……。たぶん、ガールズトークみたいで集中できないだろうから、図書館の自習室行って来る！」

「まあ、せいぜい頑張んなさい……」

服部明良（兄貴）が割烹着をポイッとそのへんにうっちゃるなり、勉強道具を持って、駅の方へ駆け出して行った……。

沙織が、わたしに質問した。

「あの方、服部さんのお兄さん？ 眼鏡かけててインテリそう……」

「あいつが店継がないから、あたしんところに回って来るのよね、まったく！」

「わたしも、次にお店は誰がやるんだろう、という心配はあるよ」

「本当ー？ 和菓子も洋菓子も、後継者問題勃発だー。さあさ、沙織さんとやら、二階に上がるよ。おーい、梨音と桃花もだ」

「へーい」「はいはい」



梨音が切り出した。

「へえー、後継者問題ねえ……うちの電器屋もそうだよ。親父が『できれば工業高校に行け！』って言うんだけど、お母さんが『いいえ、敷女を目指しなさい！』って言うんで、敷女卒業したら、電子系の専門学校行って、それから店を手伝うよ」

わたしが応える。

「でもな梨音。最終的に嫁に行かなきゃだぞー。お前に婿を取れる自信はあるのかー？」

「ない。つーか、今のところ、わかんない……」

「だよなー、先のことは誰にもわかんないか！」

沙織さんとやらが、わたしに言った。

「服部さん、うちは、お婿さんを迎えるよ！」

「ま、マジでえー？ 随分自信あんのねー！」

「服部さんも、お婿さんを迎えることにしておけば？」

「うーん、婿養子なあ……ちょっと考えとく」

おずおずと、桃花が続ける……。

「あ、あの一。わたしは幼稚園の先生になるつもりだから、普通だよ」

わたしが応える。

「そうなのか、桃花……結婚については問題なさそうだなー。って、いつまでこんな事くっち

やべってんだ！ みんな、参考書読んで勉強しよう！」



お母さんが、一階から「香枚井餅」の訳あり品を持って来た。冷えたグリーンティーと一緒に。そーっと扉を開けると、わたしを含めて、みんな机やちゃぶ台の上で、すーすーと眠っている。すうっと深呼吸したかと思うと、やおら大声を出した。

「美味しいお茶と、美味しいお菓子ですよー！」

「ひゃ！」「……あん？」「うー」「ふみゅー」

みんなは、わたしを含めて全員眠っていて、一瞬、何が起きたのか分からず、母の大声で、いきなり微睡眠から目覚めた。

「な、なんだ、お母さんか……びっくりした！」

「あんまり無理しないで、夏休みなんだし、たまには遊べばどうかしら……」

「もう、それどころじゃない！」「お、おばさんですか、いやー、びっくりしたー」「驚きますよ」「わたしもです！」

わたしは、腕組みして考えた。

「いや、待てよ、確か今日と明日、榛名天神社の夏祭りがあるんじゃないかと……」

「服部さん、それ本当？」

「なら、高槻さん……中座して、夏祭り行くか！ 行くぞ皆の者！」

高槻さんと、梨音や桃花が尋ねる。

「でも、こういう時は、ゆかただよね」「ゆかた取りに帰りたい」「わたしも……」

午後四時過ぎ。一旦、みんなは家に帰って、ゆかたを持って来ることにした。



室山三四系統のバスが、榛名天神駅前に到着したのが午後五時前。もう、露店は出てるし、参詣道は既に、人でごった返している。今日は榛名天神社の夏祭り。わたしは勿論、高槻さん、梨音、桃花も、うちの二階で着替えを済ませていた。

「よし、出かけるぞ！」

私が言うと、みんな生き返ったようになって、口々にこう言うのだった。

「ラジャー！」

「桃花ちゃん、金魚すくいなんかどう？」

「わー、面白そう！ 沙織ちゃん！」

「わたしは、おでんと、焼きトウモロコシと、フランクフルトソーセージと……」

「はあ……梨音。お前のは全部胃袋直結だなあ……」

「そういう美月は何をするのさ」

「あーね、私は、きちんとお詣りするよ。合格祈願」

「堅い、堅いねー、この和菓子屋娘が」

「黙れ……黙れ、この胃袋直結娘が！」

そういうわけで、かしましくも賑やかな夏祭りに、ひととき過ごそうと思う、わたしなのであります。勉強ばっかだと、肩がこるもんね。さあ、遊ぶぞー！

◇ ◇ ◇

高槻沙織です。今日は、みんな揃ってプールにおでかけです。香枚井中学校の仲間と遊んでいるうちに、そろそろ、春名坂中学校の生徒、服部さんたちが来ます。あ、あのグループでしょうか。試しに大声で呼んでみよう。

「おおい、服部さんたちー！」

「おっす、高槻さん！」と服部さん、「はわー、ねみい」と立花さん、「おはようございます」と柏原さん。見慣れない三人の登場に、クラスメイトが私に質問責め。

「え？ 高槻さん、春名坂中学校にも知り合いがいるの？」

「まあね、親同士が、服部さんと仲良しというわけで……」

「おはよう！ あれー？ その子たち、あんたの知り合い？」服部さんが訊く。

「うん、香枚井中学校のおともだちだよ！」

「そっかー。みんなよろしく！」

「よろしく」と、おずおずと服部さんにごあいさつ。

「しかし、みんな同じ、なすび色のスクール水着なのな」と、服部さんが言う。確かに、一列に並べたら、みんななすびに見えるかも。

「胸元の名前が恥ずかしいよねー」と、立花さんが言う。そういう私もはずかしい。みんな一緒の感想と見えて、「本当だ、恥ずかしー」などと、きゃいきゃい笑い合っています。

「市販の水着って高いもんな」と、服部さん。

◇ ◇ ◇

さて、監視員が「プールから上がってくださーい」というので、一旦水から上がることにしました。みんながわたしのクーラーボックスから飲み物（もちろんソフトドリンク）を取り出して飲んでいました。

「さあさあ、わたしのおごりだよー！」

「ちょうだい、ちょうだい！」「くれ、くれ！」「わたしもー！」「こら梨音！ 独り占めするな！」「わたしはこれでいいかな」

一通り、スポーツドリンクが行き渡ったようで、みんなフェンスにもたれてのんびりしていた、そんな中……服部さんが立ち上がって「ちょっと泳いでくる」と言って、真四角なプールでざっぱざっぱ泳ぎ始めました。うわあ、何往復するんだろう……25、50、75、100……服部さんってすごい。確かにアスリートみたいです。

入学式前夜.....

■入学式前夜.....

ここは、室山市香枚井の、パティスリー高槻洋菓堂。紅葉野電鉄香枚井駅から、徒歩でも充分歩ける距離にあり、閑静な住宅街の一等地にある、少し古風な洋菓子店。しかし、その深夜、妹・高槻沙織が、鏡台の前でスカートをひらひらとさせている。くるくると踊っているようにも傍目には見える。室山県立敷島女子高等学校、略して「敷女」に入学を決めたのだった。

「さて、と。明日からは高校だー。敷女の1年生かー。正直嬉しいな。中学まではブレザーだったので、セーラー服って女の子の憧れだよなー。うひゃー、きゃは！」

その隣で、壁一枚を隔てた隣室から、突如、あってはならない声が聴こえた。

「あーん、あ、あ、あ、あ、いやん！」

何事かと思い、壁に耳をそばだてて、姉・紫織の部屋の様子を探知する沙織.....だったが、確か、今日のお客さんは、紫織の同級生、つまりお友達だったはず.....。一体隣の部屋で何が行われているのか！ 乞うご期待.....違う！ 非常事態だ！

「ちょっと！ 紫織お姉ちゃん！ 一体何！？」

「あー、妹ちゃん、こんばんはー」

「やあ、沙織、敷女の制服姿決まってるねえ、おはよう！」

「おはよう、じゃない！ とっくに、こんばんはの時間だよ！ なに今の声！ って、ええっ！？」

「あーね、驚いた？ ははは、後学のために、AV鑑賞会をやってたんだよ、しかも、濃厚なガチ百合系のね♡」

「がくっ」

「あーあ、妹ちゃん、うなだれちゃった。ダメよ紫織ったら、あの子まだ中坊よ」

「いっけない、ヘッドホン推奨だった♡」

「もうっ！ ハートじゃない！ わけがわからないよ！ なにそれ！ なんなのその映像で繰り広げられている.....う、うわああ！」

「沙織、これぐらいで挫けてちゃ、敷女に通えないよ？」

「そんなことは、学校で起こらないってば！」

「妹ちゃんには、少し刺激が強すぎたかな♡」

「お姉さま方、少しは静かにしてください！ 以上ですっ！ おやすみっ！」

「はいはいー」「また明日学校でねー」

「まったく！」

そう、姉の紫織は敷女の2年生で、明日、3年生に上がるのだったが、容姿端麗、長身、スレンダーボディー、成績優秀者と非の打ち所がない姉だったが、唯一の欠点はガチ百合属性がついており、これは30歳代ぐらいにならないと、あだやおろそかに外れそうになかった。妹は自室にこもるなり落胆し、とっととパジャマに着かえて眠りに就くのだった。が、しかし。

「うーん、なんかモヤモヤするー。ひどいもの見ちゃったから。明日高校だつーのに、入学式だつーのに、はああ。ああいう大人にだけは、わたしはなりたくない。ダメ、ぜったい！」

そう自分自身に言い聞かせつつ、微かに漏れ聞こえる、同性同士の変な声をさえぎるように、お布団を深く頭からかぶって、必死に邪念を払おうとする沙織だった。

◇ ◇ ◇

紅葉野電鉄・香枚井駅から北へ各駅停車でひと駅。紅葉野電鉄・榛名天神駅前に、古風な和菓子店がある。その名も、服部宝珠庵。いかにも！ というような土地の銘菓が置いてあり、江戸時代から続く和菓子屋の家系、服部家。そこに、長髪ロングの真面目そうな女の子が、鏡台に向かって、明日の準備をするのだった。

「試しに、明日着ていく服を、もう一度着てみようかな？」

「リハーサルは入念に、だねえ！」

そんな独り言を言いながら、着替えをしていた。キャミソール姿から、上半身ブラになって、インナーを着ようとしたとたん、いきなり自分自身の部屋のドアが開いた。開けたのは大学生の兄、明良だった。

「おーい美月、外付けハードディスク貸してくれって……ええっ！！」

「ノックぐらいしなさいよ！！ 変態！！」

美月が放った外付けハードディスクは、ドストライクに明良の顔面にヒットして、眼鏡が床に落ちた。ふいによるめいたところに、美月の足蹴での攻撃が加わる。

「こ、この……バカ！！ 最低！！ どエロ野郎が！！ 失せろ！！」

アタマを蹴飛ばされ、叩きだされ、締めだされた明良は、何が起こったのか解らないうちに、部屋の外へと転がり出た。一方、兄を締め出した美月は、せいぜい息を切らしていた。仮にも女性

の通常兵器や、最終兵器が布一枚で隠れている状態は、彼女にとっては、とてもやばかった。

「……とりあえず、スカート履いてて正解だった、パンツ見られなくてよかった！」

気を取り直して、着替えを済ませた服部美月。彼女は、学校長推薦で難関の室山県立敷島女子高等学校に入学を決めたばかり。紺色のセーラー服。白色のスカーフ。緑色の徽章。徽章には普通科を示すGという文字が七宝焼で作られていた。

「ふーん、ふふーん、らーら、らーん」

彼女なりの喜びの表現らしい。ボーイッシュで生真面目な彼女には「きゃは♡」とか「うふっ♡」という単語はまったくの無縁だった。

「よし、完璧じゃんか！ 決まってる！ へっ、何が全県学区の進学校だよ！ どんないじめの群れか、わたしが見てきてやんよ！」

◇ ◇ ◇

室山県立敷島女子高等学校、合格！

わたし、服部美月。親の期待に応えてやりましたよ。この春、室山県立敷島女子高等学校、普通科に合格しました！ おめでとう自分。やらなくても出来るけど、やれば出来るじゃない！

さて、学習におけるインターバルだの、勉強前の糖分だの、敷女専用参考書などで、牽引し続けて来たわたし。家でアホ三名を呼んでみっちり学習したから、もう大丈夫……なはず。

紅葉野電鉄（紅電）で、香枚井駅から、急行に揺られること二十分程度。紅電敷島駅で降りて、西口改札を出て、梅香（ばいこう）交差点の角に、本命の室山県立敷島女子高等学校がある。わたしとアホ三名は、一緒に出かけた。春名坂中学と隣接する学区の、香枚井中学の子も、沙織と一緒に合格発表に来ていた。

まずは、お気楽恋愛女子、高槻沙織さんが、真っ先に私のところへやって来た。

「服部さん！ 受かったよ！ わたし、受かったよ！ 服部さんは？」

「勿論、受かったとも！ 高校一緒だね！ おめでとう！」

「ありがとう～」

「うわあ！ 抱きついて、頬ずりするな、気持ち悪い！」

次いで、アナウンサーを父親に持つ、学力的にはまずは心配要らない女子、柏原桃花が、私のところへやって来た。

「美月ちゃん！ 番号あったよ！ 美月ちゃん！ 美月ちゃんは？」

「おうよ、合格したともさ！ おめでとう、桃花！」

「学校一緒に良かった！ あれ、高槻さんは？」

沙織が、うれしそうに答える。

「わたしも、普通科に受かったよ！ 桃花ちゃん、おめでとう！」

「あれ？ ところで、梨音はどうした？」

「さっきから見ないねえ……」

「あ、こっち来た……何かうなだれてる」

そして、史上最悪のアホ、立花梨音がやってきた。受験票を手に……。それから、わたしたちに気付いて、こちらに振り返る。今にも泣き出しそうな顔だ。

「美月いー、情報処理科は補欠合格だったー」

「土壇場で進路変更するからだろ？ 定員オーバーで、普通科に回されているかもしれないから、みんなで一緒に、普通科の番号を確認しよう。いいな！ 泣くんじゃない！」

「うん、わかった……」

わたしたちは、梨音の「2092番」の受験番号を探しに、あちこち掲示板を見るのだが、普通科の掲示板には番号がなかった。そこで、沙織さんが、向こうのほうの隅っこの、小さな掲示板を指さして、言った。

「あ、梨音ちゃん、あれじゃないかな。あのちっこい掲示板……」

「も、もしかして……本当に落ちたんじゃ……」

「泣くな梨音！ 冷静に、見に行こう！」

「梨音ちゃん、気確かに！ しっかり！」

「あー、もうダメだ、わたしに敷女なんか無理に決まってる……」

ふと、わたしたちが見ると、芝生のところに、おまけ程度の小さな立て札が立っていて、何やら受験番号が書いてある。「情報処理科→普通科移行合格者一覧」とある。十名程度の受験番号が書いてあって、そこを探す。「あっ！」まず、梨音が声をあげた。次いで、みんなが「おーっ！」と言った。わたしは、2092番を見つけると、梨音に言った。

「おめでとう梨音！ あったぞ！ あった、あった！」

「え……わたし、普通科なんだ……ということは……点数足りてたんだ！」

「わたしたちと一緒にだよ！ おめでとう、梨音ちゃん！」

「受かった！ すげー！ やった！ やったー！」

「……やれやれ、最後まで油断ならん女だ」

「？」

「どうした、高槻さん？」

「いや、あの……ちょっと催して来ちゃったりなんかして……」

「そういやあそうだな」

「服部さんも行くの？」

「ちゃんと断ってから使うのだぞ！」

「うん、わかった」

「わたしらも行くー」

◇ ◇ ◇

玄関から、スリッパを借りて、この「催し」をさっさと片付けるべく、女子トイレを探した。ぱたぱたと学校の中を走っているうちに、沙織さんが、不意に階段を降りてきたチアリーディング部の集団にぶつかってしまった……。

「うわ！」

「きゃあ！」

どっしーん。

「だ、大丈夫ですか？ お怪我は……」

「て、てめえ、どこの中学だ？ お仕置きしてやる！」

「ごごごご、ごめん、ごめんなさい」

「あれ？」

「長瀬千秋さん！ こんなところで！ 今日は授業はない日だと思うんですけど……」

「沙織ちゃんこそ……。なあに、受かったの？」

「はい、普通科です！ よろしくお願いします」

「副部長、この子、知り合い？」

「もともと、中学が一緒だね、今年、敷女を受けに来たんだ、この子たち」

「へー」

「は、はい！ で、ちょーっと催して来ちゃったりなんかして……」

「あ、お手洗いなら、そっちだよ」

「ありがとうございました！」

「済みません、お手数おかけしました」

「とんでもない……。あら、春名坂中学の制服ね」

「ええ、まあ……」

「あなた、誰？」

「えーっと、榛名天神駅前の和菓子屋の娘で服部美月です。命ばかりはお助けをー」

「命って……くすっ、私は、彼女とお友達の、長瀬千秋。チアリーディング部、副部長ね」

「わかりました！ それじゃ、先を急ぎますので……。梨音、桃花、沙織に続けー！」

「お、おーっ！」

「早く早く……」

目の前を駆け抜けてゆく、後輩たちに溜息をつきながら、チアリーディング部の集団は、彼女たちの方を向いて、遠い目で見ると、

「わたしも、家が香枚井なんだ……。なので、あのへんの事情は良く知ってる」

「千秋一、あの子たち、どんな子たちなのー？」

「あれ、知らないー？ シエスタ香枚井に、高槻洋菓堂っていうパティスリー」

「うん……何となく知ってる」

「そこのお嬢様なんだなー。彼女、紅電の駅員さんとも仲良くってさ、何だか交際範囲が広いよね、彼女」

「そうだったのか……」

「あ、戻って来た……」

高槻沙織、服部美月、立花梨音、柏原桃花の四名が、「ふう……」と言いながら、トイレから出て来る。

「やあ、君たち！ 待っていたよ」

「え、な、何を……？」

「新入生歓迎の胴上げだ！ 先ずは沙織ちゃんから！」

「え、ええーっ？」

「そーれ、わっしょい、わっしょい、入学おめでとうー」

「さて、次は服部さん……だっけか。よいしょっと！」

「え、えええー？」

「そーれ、わっしょい、わっしょい、ようこそ敷島女子へ！」

こうして、わたしたち全員の胴上げが終わったところ。もう、高槻さんの所為で、無茶苦茶。もう、笑えてくる。胴上げされるのも、気分がいいものだな……。

◇ ◇ ◇

合格発表を受けて、高槻沙織、服部美月、立花梨音、柏原桃花が、急行電車に乗って、香枚井駅まで一緒に帰ることにした。現在、紅電敷島駅を出発したばかりの電車。服装は中学の服装で… …そこへ、敷女一年生、チアリーディング部の長瀬千秋が現れた。

「あ、長瀬先輩！ 偶然！」

「よっ、沙織ちゃん和其他大勢！」

「こんばんは〜」

「其他大勢って！」

「あんまりだー」

「服部美月ですっ！」

「あー、ロングヘアー、美月っちは覚えてるよ！ 冗談冗談、ははは」

「はいはいはい、その他2号です！ 立花梨音です！ その、敷女のセーラー服！」

「え？」

「その服が憧れだったんすよー。ちょっと触ってもいいですか？」

「うん、いいよ！」

と言いつつ、長瀬千秋のスカートから襟から胴体まであれこれ隅々まで抱き抱き触るものだから

、千秋はちょっと焦った。

「あ、あれ？ どこまで……ちょ、ちょっと、お前触りすぎ！」

「梨音、気持ちは分かるけど、少しは遠慮しろ！」

「くんかくんか」

「やだ……お、お前、匂うなよ！ どこまで触るんだ……お前！ そこは乳の位置だよ！ 離れろってば、こら！」

「青春の匂いがした……酸っぱい……」

「梨音ちゃん、何かのフェチ？ それともなんかのスイッチ入った？」

「長瀬さん、梨音の奴がどうやら壊れてしまったようです。今からひっぺがします」

「ど、どうやって？」

「こら梨音！ 後で便所集合な！」

「ズキッ……殺気！ すすすすす……お邪魔しましたー」

「はははは、服部さん最高！」

「先輩、わたし、柏原桃花と言います。よろしくお願ひします。この度は、うちの梨音ちゃんが失礼いたしました」ぺこり。

「おー、ツインテール、礼儀正しいじゃんか！ よろしくな！」

「後で、春名坂のバスの中で、みっちりブツ殺しておきますから、どうぞご勘弁を……」

「ツインテール、お前、にこやかに怖いこと言うなよ！ 怖ええなあ……」

「春名坂中学校で、怖いのは、実はマジギレした時の桃花が一番怖いんです！」

「こう見えて、江戸っ子なんですよ、桃花ちゃんは！」

「ツインテール、すげえ性格してんなー。よくそんなのまとめられるよな、美月っち！」

「まあ、パワーバランスでは、わたしの方が優位ですから」

「そんな、さらりと言うなよ……」

車掌が、車内アナウンスをし始めた。

『次は、室山、紅電室山です。室山空港線、真願寺、室山空港方面、室山市電、県庁前方面は次でお乗換えです、次は、紅電室山です』

「ねーねー沙織ちゃん、紅電デパート寄ろうぜい！ 途中下車してスイーツ食おうぜい！」

「こーら、梨音とかいう馬鹿猿！ 敷女に入ったら、制服での買い物買い食い一切禁止！ もしみかったら、地元の住民から学校へ通報されるぞ！」

「ば、馬鹿猿って……そうなんですか？ 先輩！」

「ああ、親呼び出し食らうことだってあるんだから、注意して通学しろよな！」

「梨音、お前フリーダム過ぎるんだよ。ちょっとは自重しろ！」

「だってー、だってさー」

「長瀬先輩、私も知りませんでした……」

「沙織ちゃんまでもかー。はー」

電車はやがて、咲花台（さっかだい）駅に停まり、次の香枚井（かひらい）駅に向かうところだ。美月が千秋に訊いた。

「長瀬先輩、お家はどのへんにあるのですか？」

「家ねえ……西香枚井。ほとんど新長坂駅だなあ……」

「じゃあ、何でわざわざ紅電に？」

「私鉄の方が安いから！」

「なるほどー」

「駅の西口駐輪場にチャリを置いて、だいたい片道5キロぐらいこぐかなー」

「運動になりますねー」

ドアが閉まる。今度は桃花が千秋に訊いた。

「一年生でありながら、チアリーディング部の副部長さんって、すごいですよね！」

「ああ、まあ、香枚井中学校の頃に、全国大会で準優勝したんだ」

「すごい！ 格好いいです、先輩！」

千秋は、少しそばかすの残る顔をポリポリ指でかきながら、斜め上を見上げて少し赤面した。

「うわー、照れてるー、照れてるー」

「こら梨音、仮にも先輩だぞ！ 少しは発言に注意しろ！」

「そうよ、梨音ちゃん、わたしの大切な先輩なんだから」

「沙織ちゃん、よくぞ言ってくれた！ 偉いぞー」

「えへへ」

高槻沙織は、照れ笑いしながら、後頭部をぽりぽりかいていた。そして、ふとアナウンスに耳をそばだてた。

『毎度、紅葉野電鉄をご利用頂き、誠にありがとうございます。次は、香枚井、香枚井、3番線の到着、お出口代わりまして左側です。向かいのホーム、4番線には、次発、各駅停車楠葉行き、16時23分発。お乗り換えの際には足許にご注意下さい。次は、香枚井、紅電香枚井です』

「長瀬先輩、もう駅に着きますね」

「そうだな沙織ちゃん。あんたら東口からバスだったよね。まあ、真新しい制服姿になったら、

また挨拶に来なよ、待ってるぜ」

「はあい」

「宜しくお願いします、先輩！」

「以下同文！」

「よろしくですー」

「うん、うん！」

香枚井駅のコンコースで、長瀬さんは西口改札の向こう側へ消えた。さて、残るゆかいな四人組だが……。

「沙織さん、次どうするよ」

「えっ？ 次？」

「これからどうするって話！」

「ええ、まあね。とりあえず、うちのカフェ集合かな」

「安くしておくれよー」

「余計なことを言うな梨音！ ……と言う訳で、みんな手持ちが少ないのだ」

「あ、心配いらない。みんなにショートケーキと紅茶を振る舞うぐらいのことはできるから」

「おおー、さすが金持ち！」

「服部さんったらまたー。すぐそう言ってー」

「じゃあ決まりだ！ 香枚井3丁目だね！」

「おー！」

駅東口から歩いて7分。「パティスリー 高槻洋菓堂」という古風な看板の、白い壁に、茶色い煉瓦造りの屋根のロマンチックな外観の店だ。焼き菓子を焼くこんがりとした匂いが辺りに立ち込める。パティシエールと言っても、女性のパティシエがいる訳ではなく、洋菓子店、という意味の女性名詞だった。働いているのは、高槻沙織のお父さんと、御年90歳になろうかというお爺さん。カフェ担当は、沙織のお母さんだった。

「ただいまー！ お母さん、敷女に受かったよー！」

「あらあら！ まあまあ！ よかったわねー！ で、春名中のこの子たちも？」

「そうでーす」「今日合格発表だったんです」「受かりましたっす！」

「あら大変。あなた！ あなたー、沙織がねえー」

……と、一旦は店の奥へ消えて行った。やがて、コック帽をかぶった沙織のお父さんと、お母さんが出て来て、皆を座席に招いた。

「みんな、敷女合格おめでとう！ 今日はホールケーキを用意する。ドリンクバーも用意して

ある。みんな、たーんと召し上がれ！」

一同「はい、ありがとうございますー」

一人当たり、いちごのショートケーキ2切れ。沙織はジンジャーエール。美月はコーラ。梨音はオレンジジュース。桃花はアイ스티ー。飲み物一つ取っても、性格が出て来る。

◇ ◇ ◇

高槻沙織です。パティスリー 高槻洋菓堂のティールームの、美月ちゃん、梨音ちゃん、桃花ちゃん。まだ中学校の制服を着ていた。私はツーピースに着替えて、ケーキをみんなで食べているところ。県立敷島女子高校に通い始めたら、制服で買い食いなんて世間が許さないんだろうな、と思いながら。

あれ、なんか美月ちゃんって呼びにくいな。何が良いだろう。親しみが出る呼び方。そうだ、いっその事「はっとり！」と呼んでみることにしよう。

「ねえ、はっとり？」

服部さんは一瞬ぎょっとした顔をしながら、コーラを吹いた。ゆかいゆかい。そうして、なんだか不服そうな顔でこっちを見ていた。すると……。

「服部なあ？ 馴れ馴れしいぞ、高槻さん」

「馴れ馴れしかったー？ あのね、私のことは、好きに呼んでくれていいよ。うーん、何がいいかなあ」

「何がいいって……お前なあ……お前、じゃまずいか。じゃあ、沙織、馴れ馴れしい」

「うん、それでいいよ！」

服部さん……いや、はっとりは、少し笑みを浮かべて、握手を求めた。これって！ お近づきの印かしら！ 下の名前で呼ばれるのも、心地いいものだよね。続いて、柏原さんが、握手を求めて来た。

「じゃあ、高槻さんって言いにくいから、わたしは、あなたのこと、沙織ちゃんか、いっそ、さおりんって呼ぶよ。わたしの事は、呼び捨てで、ももっちか、桃香でいいよ！ よろしくー！」

「柏原さん……いや、桃香ちゃん最高！ その調子！」

沙織さんちのお姉さん

■沙織さんちのお姉さん

ここは、室山県立敷島女子高等学校、学生食堂。つまり、お昼休みなのです。もう、あらかじめお弁当を平らげてしまった子とかが来るのですが、わたしたち香枚井登下校組の女子4名は、特にそういった早弁とかもせず……案外真面目なほうなんですよ、こう見えて。

「久しぶりに、学食でも行くか、沙織！」

「え、ええ、はっとりたちに付き合うよ」

「沙織、いったい何に怯えてるんだ？」

「えっと、ちょっとね……学食って、いろいろと、ね……」

「意味が解らない」

「わたしは一、カツカレーと、A定食と、プリンと、メロンパン！」

「梨音ちゃん、相変わらずたくましい胃袋だね！」

「えっへん！」

「威張るな！ それにしても、そんなに食べて、スタイルキープしてるってのが、ある意味奇跡だなー」

「だいじょうぶ。家に帰ってから毎日腹筋五〇〇回やってるから！」

「わたしが言うのもなんだけど、梨音ちゃんって、不思議な生き物だねえー」

「同じく！」

「わたしはもう慣れた」

「おいおい、みんなー」

すると、廊下の向こう側から、昼間っから女同士ラブラブしている、妖しげな上級生集団がやって来た。高槻紫織は長身のスレンダーボディで、長めのスカート。両腕に、誰だか分からない女子生徒を何名かぶら下げて歩いてきた。何だか、紫色の煙が立ち込めていそう。

「はあーい、マイ、スイート・シスター沙織！」

「ゲッ！ 紫織！」

「ああ、あのお姉さんね」

「あの先輩、相変わらずだねえ」

「沙織とそこの地味なみんなー、学食なんて珍しいね！ どう？ お姉さま方と一緒に食事でも如何かしら」

「は、はあ……光栄です」

「ちょっと、沙織、どこ行くんだ、沙織！」

「だ、だってえ！」

「それにしても、先輩と沙織ちゃんは全然雰囲気違うねー」

「これでも姉妹？」

「もう、うるさいなあ……分かりました、付き合いますとも！ 付き合えばいいんでしょ？」

「さすがはマイ・シスター、話が早い、さあさ、お姉さまと一緒においで！」

「やだってば！ 腕引っ張らないで！」

「ちょっと、そこの地味な1年！ あの紫織さまと、近くでご同席出来るのよ！ 光栄に思いなさい！」

紫織の「親衛隊」たちが言い放った。ごく平凡な1年生4名は、その「親衛隊」の迫力に気圧されそうだった。

「そ、そうですね！ ありがとうございます……」

(はっ通りの所為だかんね！ 学食連れて来たの！)

(ああ、悪い悪い、あの人の存在、すっかり忘れてた)

(わたしは、もう、メロンパン1個でいいです)

(梨音ちゃん、しっかり！)

■沙織のゆめ

「ここ、どこ？」

高槻沙織が、敷島女子高校のセーラー服を着て歩いている。緑色のスカーフが風に揺れていた。見渡す限りの一面に、芝生が生えたお花畑のようなところを歩いている。視界の遠くに、一棟ぽつと、瀟洒（しょうしゃ）な建物の、香枚井中学校がある。ゆっくりとした足取りで近寄ってみた。でも、様子が少し変だ。1階部分が赤茶色のレンガ塀でできている、幼稚園になっていた。ばらぐみ、ももぐみ、たんぽぽぐみ……。

（そういえば、わたし、年長さんの頃は、ばらぐみだったっけ）

好奇心からか、1階の花壇に植えられた赤いチューリップの茎を根元から1本だけ折り取って、嬉しそうに手に取り、顔に近づけて、匂いをかいでみた。なぜだか、どことなく懐かしい匂いがした。そして、くるくると回してみても、腕を遠く近くに動かして、その折り取ったチューリップを飽きるともなく眺めていた。すると、ばらぐみの教室の中から、聞き覚えのある声が出た。

「たかつきさおりさん」

「はい！」

（あ、わたしだ。わたしがいる）

「あなたの将来のゆめは？ 先生に聞かせて？」

「先生あのね、近所のたくやおにいちゃんのおよめさんになりたいです！」

「あらそう、夢があっていいわね！ 先生、それはとても素敵なことだと思います」

「えへへ、ほめられちゃった……」

一部始終を窓の外から立ち聞きしていた沙織のほほに、つーっと一筋の涙が伝う。なぜだろう。なんでいま、悲しくもないのに、涙が出るんだろう。

（なんでだろ、わけがわからないよ）

机には、黄色い通園帽がフックにかけられている。お弁当袋と一緒に。幼稚園の教室には、見知った子、それから、香枚井を去って行った子……いろいろな子が、懐かしい顔が並んで座っていた。



「……客……お客さん、お客さん！」

「ふ、ふわー？」

「敷女の学生さん！ 終点ですよ！」

「え？ あれ、ここはどこ？」

「終点の楠葉（くすのは）ですよ！ 紅電楠葉駅です！ この電車、今から車庫に入るから、こうして起こしているんです！」

「沙織が熟睡して、寝過ぎすから、起こすタイミングが全然つかめなかったぞ！」

「は、はっとり！？」

「沙織ちゃん、なんで泣いてるの？」

「泣いてるって、桃花ちゃんまで？ で、梨音ちゃんは？」

「ああ、あいつなら、お前に飽きて、先に香枚井で下車した。なんでも、電器屋の手伝いがあるからって、急いで帰って行った」

「沙織ちゃん、起きた？ 目が覚めた？ なにか、悲しいことあった？ すごい涙。わたしのポケットティッシュ貸そうか？」

「ううん、自分のがあるから、大丈夫。ありがとう。ただ、すごく懐かしい夢を見ちゃったかな」

「うーん、泣いてるところ、おじさんが起こして悪いんだけど、ダイヤ通りにこの電車、車庫に入れないと、後ろがつかえているから……敷女のお嬢さんたち！」

一同「は、はいっ！ どうもすみませんでした！」

急いで、紅電楠葉駅のプラットホームに降り立つ沙織、美月、桃花の三人。

「それにしても、うちら、よく終点まで付き合ったよな」

「沙織ちゃん、もう午後五時回ってるよ。香枚井まで早く帰りましょう！」

「そだね、ごめんごめん、なんだか迷惑かけちゃって」

「ま、たまにはそういう日もあるさ！ 気にすんな、沙織！」

「わたしが沙織ちゃんの肩を、揺さぶっても、叩いても起きなくて、沙織ちゃん爆睡しちゃってて、ちっとも起こせなかったよ」

「で、しまいには泣き始めるし、まったく、今日はとんだ遠足だよ！」

「ごめんごめん、この埋め合わせは必ずするから、また今度」

「わたしが沙織に、連日、勉強の猛特訓をさせすぎたからかなあ……」

「美月ちゃん、沙織ちゃんを、あんまりこき使ったらだめよ！」

「ははは、悪い悪い！ 一緒に帰るか、皆の衆！」

二人「おーっ！」

『停車中の1番線の電車は、17時33分発、当駅始発、急行・海浜神崎行きです。停車駅は、紅電吾野までの各駅と、紅葉野、吾野本陣、香枚井、咲花台、紅電室山、紅電岩崎、紅電敷島、牡鹿沢、紅電神崎、終点・海浜神崎の順に停まります。終点、海浜神崎へは、この電車が先に到着いたします』

「さあさ、乗った乗った！ こうなったら、今日はとことん付き合うぞ！」

「からすが泣くからかーえろ！」

「いや、わたし、マジ泣いちゃったから」

「それ、シャレになんねーし。ま、いっか！」

「さすがのわたしもびっくりだよ！ 山のふもとまで来ちゃったし！」

「あはは」

そんなこんなで日が暮れて、紅電楠葉駅は、次第に夜のとばりがおりてゆくのでありました。

美月のいちばん長い日

■美月のいちばん長い日

紅電榛名天神駅前に停車中のバスに乗ったまま、アナウンスを聴いているのが、服部美月。彼女が、これから紹介する四人組の中では一番早起きなのだった。

『室山三四系統、榛名天神駅発、春名台団地、春名坂小学校経由、紅電香枚井駅行きです。料金は降車時にお支払い願います。発車までしばらくお待ち下さい。室山三四系統……』

(ん、んがっ。ふああああ……。何だ、まだこんな時間かあ。あの子たち、まだ寝てんだろくなあ、きっと……)

背広組やスーツ組が、どんどん榛名天神駅に向かって先を急いでいる中、このバスは、まだガラガラだ。よほど春名坂の途中に用事がある人以外、始発から乗車するのは、彼女ぐらいなものだ。そもそも、各駅停車ひと駅で済むはずなのに、なぜわざわざバスに乗るのか。それには理由があった。同級生を拾って、急行停車駅の香枚井駅まで送迎するのが、彼女の役割。もっと言えば、美月はしっかり者で、みんなのタイムキーパー役でもあるのだ。みんなの保護者、とも言う。

(髪の毛、大丈夫かなあ。寝癖とかついたりしてないよねえ……)

後部扉を見渡す四角いバックミラーに向かって、必死に髪を直している美月。それを見た運転手さんが乗ってきて……。『スタイル決まってるよ、お嬢さん』と、苦笑いしながら言いつつ、バスの運転席に陣取るのだった。ちょっと赤面する美月。濃紺のセーラー服は、スカートも長め。赤いラインと緑色のスカーフ。白いハイソックスと革靴とカバン。これが正統派の、県立敷島女子高校生のあるべきスタイルなのだ。

『発車します』

ブザーが鳴ると同時に扉が閉まる。バスの停留所を一八〇度、南に向かって転回したバスは、一路、何キロにもわたる、なだらかな坂、春名坂を香枚井方面に向かって下って行く。乗客は、まだ彼女ひとりだった。新緑の季節、並木の緑、木漏れ日が瞳に優しい。

『室山三四系統、榛名天神駅発、春名台団地、春名坂小学校経由、紅電香枚井駅行きです。お降りの際はボタンでお知らせ下さい。料金は降車時にお支払い願います。次は、春名坂上、春名坂上です』

沈黙が流れる。少女は窓に頬杖をついて、緑と日差しのコントラストが織りなす陰と陽のなかを激しく駆け抜けている。崖下（がいか）に流れる鍵堀川（かぎぼりがわ）の水面（みなも）に映る、きらきらとした太陽を眺めながら……。

『次は、春名台団地、春名台団地です。お降りの際はボタンでお知らせ下さい』

（桃花のやつ、寝坊してないだろうなあ……。なんか昨日、徹夜で勉強するって言ってたけど、寝坊したら、置いてくぞっ）

「あ、美月ちゃん、おはよう」

「おはよう、桃花。今日は遅刻しなかったんだ」

「そう、七個目の目覚まし時計でやっと起きて……」

「七個かよ！ なんだよ、その数！ 目覚まし時計七個って、あんたどんだけ！」

「そう、それで、お母さんに制服に着替えさせてもらって……」

「着せ替え人形かよ！ マネキンか、あんたは！」

「でも、勉強したよ……」

「ほら、スカーフ曲がってるぞ！ やり直し！」

『次は、春名坂小学校、春名坂小学校です。お降りの際はボタンでお知らせ下さい。電器のことなら、たちばなデンキ。たちばなデンキへは、春名坂小学校でお降りが便利です』

（このアナウンス……。本当に商売っ気のカタマリなんだから、あの親子と来たら……）

「よー、諸君、おはよう！」

「梨音ちゃん、おはよう！」

「美月も、おはようー」

「あー、はいはい」

「なに、美月。その冷たい態度」

「いや、毎日毎日、たちばなデンキの宣伝聴いてると、飽き飽きして来てさー」

「商売上手って言ってよねー、これでもお金かかっているんだからさー」

「そうね、確かに商売……って、あんた、そのスカート丈！」

「いやー、ちょっと夏用ということで、ちょっとだけミニにしました。自分でミシン使って」

「でも、それ、校則違反だから」

「いいじゃんかー、堅てえこと言うなよ、ふたりともー」

「学校指定のスカート買うか、ジャージのままで帰きなさいよ、帰りは。まったくもう」

「風紀委員じゃあるまいし、ここは大目に見てよ」

「だーめ、わたしが許しても、学校じゃダメよ」

「けーち。校則反対！」

『次は、香枚井三丁目、香枚井三丁目です。お降りの際はボタンでお知らせ下さい』

「おはよう、みんな！」

「おはよう、沙織！」

「おっす、さおりん！」

「梨音ちゃん……なに、そのスカート！」

「いやあ、夏用にちょっとだけ改造しただけなんだけどねえー」

「ちょっとどころじゃないでしょー」

「校則違反だよねー」

「というわけで、全員揃ったようだね。ほっとしたよ、わたしは」

「わたしは、沙織が常識人であることにほっとしたよ……おい、そこのアホ二名」

「えー、まとめてバツサリだー」

「あんまりだー」

「桃花ったら、目覚まし時計七個目でようやく起きて、お母さんに着替えさせてもらって、スカートが曲がってたから、わたしが直して……ふう」

「はっとりも大変だよねえ……」

「ただ、坂のいちばん上に住んでるだけで、子守りさ、へっ。いっそ、バスやめて、電車にしようかな。アホ二名ほっといて。手短に済むからな」

「いやだ！ 置いて行かないで！」

「ともだちでしょ、わたしたち！」

『次は、終点、紅電香枚井駅前、紅電香枚井駅前です。どなた様も、お忘れ物無きよう、お支度下さい』

「さあ、行くよ、みんな！」

「おー！」

「うー……ね、ねむい」

「さすがは沙織といったところか……」

ところで最近、梨音が小耳に挟んだ噂がある。そんな、ある噂の真相を、直接、沙織にぶつけることに決めた。

「ねえねえ沙織ちゃん、あの一、紅電の駅員さんと、最近いい感じ？」

「べっ！ 別に、何にもないわよ」

「おお、何だそのリアクション！　ね、ね、本当は何があったの？」

「か、関係ないでしょ！」

「ほらー、顔、どんどん赤くなって来てるよー、熱いねー」

「ただ……」

「ただ？」

「わたしんちのお店のケーキを渡すだけなんだからっ！　じゃあね！　お先ッ！」

そう言い放つと、ずかずかと駅に向かって、ひとりで歩き始めた。

「おおー」

「美月さん、これはつまり、アレですかね」

「アレだよ」

「ここで観察しましょう」

「今度の急行を逃しても、次の通勤急行でも充分間に合う……一本遅らせるか」

「放置プレイだね」

「そう、放置プレイ……って、どこで覚えたのその言葉！」

「しーっ！」

「悪い、わたしとしたことが……つい興奮が抑えられず……」

降車用バス停の影に隠れる女子三名は、明らかに周囲の耳目を集めていた。隠れながらも、彼女たちは、高槻沙織の一挙手一投足を観察していた。バス停からは、東口改札が丸見えだった。何か、駅員と話をしているようだったが、しばらくすると、「バカッ！」という声が遠くから聞こえたかと思うと、沙織は涙をぬぐいながら、鍵堀川の橋を渡って、葱北本線の香枚井駅に向かって駆けて行った。

「うん。誰だ、泣かせたの！」

「それじゃあ、乙女の敵だよー」

「あ、携帯にメールが……」

『はっとりへ　いまから葱北本線（ぎほくほんせん）に乗ります　気にせず先に行っててね
沙織』

「おのれ、また、あの改札の駅員かー！」

「何があったんだろう……」

「乙女の敵はわたしの敵！　とにかく、ものども、行くぞっ！」

「おーっ！」



紅葉野電鉄、香枚井駅、東口改札を目指して駆け込む、美月、梨音、桃花。

「済みません、霜田拓也さんはいますかー」

「駅長の河上です。おはようございます。霜田なら、券売機の裏で落ち込んでるよ」

「なに？ 落ち込んでる！」

「本当だわ」

「なんか、がっくりと来てるね、こっちも」

「ええ、プレゼントを持って来られたお嬢さんがいたんですけど、会社の社内規定で、プレゼントを受け取ってはいけない決まりになっていることをお話しし、『気持ちだけは受け取っておくよ』と言ったら、どうやらお嬢さんを傷つけたらしくって……」

「ええ、傷つきますとも！」

「キテイもテイキもへったくれもないわー」

「それは余りにも可愛そう過ぎませんか」

「うーん、午後から霜田は休みだから、その時に、彼の自宅に行くといいよ。霜田タクシーって建物だから、すぐに分かると思うよ」

「しょうがないわね……じゃあ、沙織を説得します」

「ええ、勤務時間中は、建前としてプレゼントは受け取れないんだけども、ここが済んだら、別に構わないから……何だか、泣かせてしまったようで、上司としても、誠に申し訳ない」

「今度泣かせたら、学校じゅうに広めますからね！」

「学校じゅうで、紅電に乗らない運動を起こしてみせます！」

「女の子を泣かせないように、霜田さんによく言っておいてください」

「わかった。わかりました。霜田も確かに杓子定規なところがあったから、よく言っておきますよ」

「頼みますよ！」

一通り、気が済んだ模様の敷女三名。沙織にメールを打つ美月。

『沙織へ 駅長直々に謝罪があったので 勤務を終える午後に 春名坂下 霜田タクシー本社に みんなで一緒に行こう そこで、ケーキを改めて渡そう 彼は充分反省しているじゃない？ だから元気出して 美月』

「券売機の裏で落ち込んでいる写メも添付して、これでよし、送信っと」ピッ……

「沙織、元気出るといいねえ」

「機嫌、直ればいいと思うんだけどね」

『間もなく、二番線、通勤急行、海浜神崎行きが、八両で参ります。停車駅は刈羽台、咲花台、

紅電室山、塩瀬、紅電岩崎、岩崎台、紅電敷島、牡鹿沢、紅電神崎、終点、海浜神崎の順に停車します』

「これ、混むんだよねー」

「皆の衆、痴漢がいたら声を出そう、声を」

「つか、あんたが一番スカートの丈が短いんだけど」

「じゃ、じゃあ、行きますか」

「話をそらすなー」

『香枚井、香枚井です 二番線、通勤急行、海浜神崎行きです。終点までこの電車が先に到着します。次は、刈羽台、刈羽台です。間もなく発車します、お急ぎ下さい』

.....電車が塩瀬駅を出て、鍵堀台駅を通過したあたりで、梨音は太腿に奇妙な感触を覚えた。もぞもぞと、何かをまさぐっているような、そんな感じだった。

「やっ.....」

「どうした？ 梨音.....」

「きゃああああ痴漢ー！」

「どうしたどうした」

「何だ何だ」

「痴漢だって？」

「取り押さえろ！」

「非常通報ボタン使え、誰か！」

「美月ちゃん、こいつのアゴをアッパーカットだ！」

「了解！」

「ぶほわああー」

既に、その場に居合わせた背広組が、痴漢の犯人を羽交い締めにしていた。服部美月の、強烈なアッパーカットを食らった男は、その場でただちに悶絶した。

『間もなく、紅電岩崎です、お出口左側です』

「あの一、先生？ 服部美月です。おはようございます。いま、立花さんが岩崎駅に向かう通勤急行の車内で痴漢に遭いまして.....み、みんなで取り押さえました。通勤客の方にも手伝ってもらって.....はい、遅刻というところで.....今から警察に向かうかも知れませんが.....はい、わたしと、柏原さんも一緒に、三人で.....はい、以後気をつけます、では」美月は、電話を切った。

悪い予感は的中した。早速、メールを打つ美月。

『沙織へ 案の定、梨音が痴漢に遭った もうすぐ紅電岩崎駅 先生には遅刻の電話入れた 心配しないで 犯人はノックアウトしたから』メールは送信された。

美月は、助けてくれたサラリーマン数名の皆様に、ぺこりと頭を下げた。

「皆さん、どうもありがとうございました」

「いやいや、当然のことをしたまでだよ」

「そうそう、俺らのことは気にしないで」

「さ、警察に連れて行くぞ！ シャキッと歩けコラ！」

「わたしたちも行くよ」

「み、美月……うええええええ」

「どうした、梨音らしくないぞ！ しっかりしろ！」

『紅電岩崎、岩崎です。一番線の電車は、通勤急行、海浜神崎行きです。停車駅は、岩崎台、紅電敷島、牡鹿沢、紅電神崎、終点、海浜神崎の順に停車します』

そこに、ホームに駅員と警察官が現れた。

「痴漢はこのドアで間違いないですか」

「ああ、こいつだ」

「被害に遭った子は……」

「この子です」

「ちょっと署まで来てもらおうか。あ、君たちはこの子の友達かい？ 君たちも一緒に来てもらおうかな」

「わたしたちもですか？」

「こりゃ長引きそうだね、美月ちゃん」

「そうだな、桃花……」

◇ ◇ ◇

室山県警、岩崎署。犯人とは別室で、婦人警官の前で、梨音たちはお説教を食らっていた。お説教と言っても、半ば呆れられたような感じだった。主に、梨音のスカートの丈について……。

「敷女って、わたしも憧れたお嬢様学校よ。それなのに、なに、その丈の短いスカート。なあに

、改造したの？ 自分で？」

「はい、しゅみません……その通りです……」

「泣くな、梨音」

「ここでジャージに着替えればいいじゃない」

「そうね。女子更衣室があるから、後でそこ使いなさい。あと、お父さんももうじきクルマで来るから」

「お、親父が来るんですか！」

「当たり前じゃない」

「怒られても、仕方がないよね」

「自業自得だよー」

やがて、ダダダダダと、階段を上がってくる音が聞こえたかと思うと、扉が開いた。

「こちらです」

「梨音は無事かああ！」

「親父……」

「このバカ、心配させやがって！ どうもすみません。梨音の父です」

「いいえ、子どもは別に……可愛そうなのはこの子です」

「だから、スカートの丈は詰めるなどあれほど！」

「ご、ごめんなさあああー」

「美月ちゃんと、桃花ちゃん。巻き添えにしてごめん。授業、遅れるだろ。ここは僕にまかせて、先に学校に行きなさい。単位落とすとまずいからな。梨音！ これ終わったらスカート買いに行くぞ！ 丈詰め禁止だ！ いいなっ！ 今日は欠席だ！」

「い、いいんですか、おじさん」

「話なら、僕が聞いてもいいそうだから、ふたりとも、学校に急ぎなさい」

「はーい」

室山県警岩崎署を出るふたり。服部美月と、柏原桃花。

「こ、ここからどうやって駅に戻るんだっけ」

「パトカーで来たから、よくわかんない。あ、バス停があるよ、こっちこっち」

「岩崎一六系統、岩崎東中学校経由、紅電岩崎駅行きだって」

「じゃあ、学校の三時限目に間に合うかも！」

「なら、わたし、ちょっと学校に電話する」

おそろおそろ、携帯電話をかける美月……。

「もしもし、相川先生はおられますか……はい。あ、先生ですか？ 一年二組の服部美月です。おはようございます。岩崎警察署は、梨音……じゃなかった、立花さんとお父さんが何とかするそうです。え、原因？ そ、そうですねえ……立花さんがスカートの丈を自分で詰めすぎたとか、いろいろです」

『★§@*#%◎◆△▽※~~~~!』

「ええ、はい、わたしも止めとけ、校則違反だから、って言ったんですけど、ついに詰めちゃって……。で、案の定痴漢に遭ったと、そういう理由です」

『~~~~~!』

「と、とにかく、大至急学校に戻ります。どうもお騒がせしました。では」

美月は電話を切った。そして、桃花に向かって振り向いた。

「うう、杏子先生、怖わー！」

「美月ちゃん、杏子先生、怒ってた〜？」

「それはもう、梨音に対してはね」

「停学かなあ」

「それは大丈夫。スカートが元通りに出来上がるまで自宅謹慎の予定」

「なるほど」

『岩崎一九系統 木庭団地 県立岩崎高校 岩崎東中学校経由 紅電岩崎駅行きです 整理券をお取り下さい 発車します』

「あ、このバスじゃなかった。これじゃあ遠回りになる」

「先に言えよ、桃花〜！」

◇ ◇ ◇

服部美月、柏原桃花の遅刻組二名が、おずおずと教室に入る……。抜き足、差し足、忍び足……。まだ授業の間の、休み時間のようなだった。

「よっ、はっとり！」

ポンと肩を叩かれる美月。

「う、うわあああ！お、脅かすなよ、何だ沙織かあ！」

「ごめんごめん……で、なあに？ 立花梨音が逮捕されたって？」

「違う違う。彼女は痴漢の被害者です……って、沙織、もう立ち直ったの？」

「うん、そうねえ。落ち込んでる拓也さんの写真見てたら、何だか可笑しくて」

「あのフォトが効きましたね、隊長」

「だから、ワタシは隊長じゃなーい！」

「ぶっ、くっ、あっはっはっはっは〜」

「もうっ、さっきからこの調子で、隊長、隊長って、いい加減に……」

「じゃあ、いい加減にします、隊長！」

「も、もうダメ、可笑しすぎる〜」

あー、やれやれ、泣いたカラスがもう笑った、と言わんばかりの表情。なんでえ、心配して損した、と言わんばかりの表情。

「あ、やばい、遅刻届出さなきゃ」

「いいところに気づきましたね、隊長」

「その隊長ネタ、いつまで引っ張る気だ、さ、行った行った」

「いざ、職員室へ！」

職員室は階下の一階にある。そこに、HR担任の相川杏子先生を訪ねることにした。

「失礼しまーす」

「相川先生、いらっしゃいますかー」

「あたしはここ！ んもう、探したわよ！」

「うわあ！ 後ろに！」

「脅かさないで下さい！」

「もう四時限目が始まるけど、事情を聞かせて。一体、何がどうなって……ああ……」

「先生！」

「先生が倒れちゃう……」

「……もう倒れる寸前よ……心労で、朝から気が気じゃなくって……がくっ」

「杏子先生！」

「椅子……に戻られた方が……いいと……」

「はいはい、そうさせてもらおうわ。あたし、マジで倒れそうで……」

「わたし、お水汲んで来ます！」

「あ……アタマも痛いわ……」

「保健室から、頭痛薬をもらってきます！」

「いいの、あたしのおくすりがあるから……」

ごきゅごきゅと頭痛薬を飲み干す先生を見て、二人がつぶやいた。

「何だか、心配かけちゃったねー」

「先生に心配をかけたことが、何だか心配で……」

「ぷっはー！ これ、医療用の頭痛薬よ。気付け薬みたいなものかしら」

「そ、そういうものなのですか？」

「そう、大人になると、いろいろとね。人間関係、上下関係エトセトラ……」

「で、ですね、これ、遅刻届なんですけど、あの一、理由は何て書きましょう」

「え？ 理由は……『私事につき、遅刻致しました』で、今回は勘弁してあげるわよ」

「す、済みません……」

「そのへんの、空いている椅子に座りなさい、立っていると、何だか落ち着かないから」

「はあい」

相川杏子先生は、失いかけた理性をようやく取り戻した様子で、服部美月、柏原桃花の方へ向き直った。

「それで、立花さんと一緒に通学してるんでしょ、いつも」

「はい、私が先導して、香枚井からバスと紅電で通学しています」

「だったら、何で友達だったら、スカートの丈を詰めるの、止めさせないの？」

「は、はい、も、申し訳ありません」

「警察沙汰よー。なんだ、敷女ってそんな程度か、ってみんなに思われちゃうの！」

「は、はあ……」

「まあ、あなたたちに怒ってもしようがない事で、むしろ、あなたたちは、被害者ですものね」

「今も、立花さんのお父さんが、代わりに婦警さんの話を聞いているみたいです」

「それで、君たちは学校へ急げ、話は僕が代わりに聞くから、って……」

「優しいお父様ね。感謝なさい」

「立花さんは、明日登校する予定だと、彼女のお父様が……」

「なんでも、今日にでもスカートを作り直して、出直せ！っておっしゃってました」

「正論ね。これ以上迷惑かけられちゃ、あたしも立つ瀬がなくて……」

「は、はあ……」

「これでもねえ、かなり、みんなをかばって来てるのよ。あなたたち、知らないでしょ」

「はい……」

「でも、どうしようかなー。これ以上、由緒正しき、この学校に泥塗られちゃ、かばおうにも、もう、かばいきれなくて」

「先生！ 梨音の退学だけはご勘弁を〜！」

「先生！ そこを何とか！ お願いします！」

「ふー。冗談よ。本気にしないでー。まったく、冗談も言えやしないわー」

「ぜー」

「はー」

「さて、と。立花さんの反省文、何枚にしようかなー。原稿用紙で五〇〇枚ぐらいかな」

「に……ご……じゅ、じゅうまん文字い〜！」

「そんな殺生な〜！」

「いいえ、例え、五〇〇万枚書かせても、まだ足りないぐらいよ！」

「まあ、五〇〇枚で、退学が許せちゃうなら、これぐらいで、いいかも知れませんね」

「そうそう、物は考えようです」

ダン！……と、机を叩いて、先生はこう続けるのでした。

「ふー。なになに、あたしのクラスの生徒が、勝手にスカート丈を詰めて、超ミニにした上で、電車で痴漢に遭いました……って、どのツラ下げて、上司に報告すんのよー！」

「先生、落ち着いて！」

「お水、お代わり持って来ました！さあ、どうぞ！」

「ふいー、あんがと。また理性のたがが外れるところで、危ない危ない……」

すると、また杏子先生は、ハンドバッグから頭痛薬を取り出すのでした。

「先生、そんなに呑んじゃ身体に毒です」

「無理、しないでくださいね……」

「そうねー。本人いないんじゃ、これ以上怒る気にもなれないし……前向きに考えることにするわね。あなたたち、本当におつかれさま……暴漢に、アッパーカット食らわせた、服部美月さん？」

「はい！」

「女子高生が、公衆の面前で、制服姿で、野郎を殴るなんざ、大きな間違いです！」

「ごめんなさい……」

「……ふっ、いいのよ、もう。済んだことだし。うっかり忘れたことにしておくわ。じゃあ、大至急クラスに戻って頂戴、いいこと？」

「わかりましたー！」

「では、失礼しましたー！」

……二人とも、脈拍ドキドキ、心臓バクバクだった。決して、ときめいたとか、そんなレベルの話ではなく、大人の恫喝ってーのは、とても怖いなあ、といった心境だった。

「女子高って、ある意味怖いなー」

「特に、あの柔和な先生がキレた時は、もう胃がおかしくなっちゃいそうで……」

「言えてるー」

「さあ、静かに戻りましょう、美月ちゃん……」



六限目も過ぎて、放課後。県立敷島女子高等学校、略称「敷女」には「家庭科部」というものが存在する。これは、主に和洋のスイーツと、お裁縫、茶道も含めた家庭科一般を指してまとめて「家庭科部」としたもののなのだった。お題は一週間毎に決められ、たとえば「今日は洋風スイーツの日」などと、顧問の柴島祥恵先生がお題を出すのだった。

場所は家庭科室。ここがメインの部室になる。三階東側の、大きなベランダがある部屋。よくある流し台のある部屋。家庭科準備室、裁縫室も部室に入る。裁縫室は飲食禁止。家庭科室と、家庭科準備室の東半分が飲食可能。冷蔵庫も完備。

「はい、皆さん、今日は、レアチーズケーキの仕上げですー。あとは、ブルーベリージャムを載せて完成です。うふふー♪」

服部美月はダラダラ汗をかきながら、一人でぶつぶつぶやいていた。

(チーズ！ チーズケーキ。しかも濃厚なレアチーズケーキ！ どうする美月！ わたしって、作ってはみたものの、チーズが大嫌い……。どうか神様、食わずに帰られる方法を教えて。食わずに、持って帰りたいです……)

「はっとり、何青ざめてるの？ 汗びっしょりよ」

「う、うわー、びっくりした、なんだ、沙織かあ……」

「なんで、おどおどしてるの？ はっつりのも美味しそう♪」

「あ……あの……」

「はい？」

「お願いがあるんだけども……こ、これ、いらないから、持って帰って……わわわ、わたし、チーズって大の苦手で……」

「何言ってるのー、ブルーベリージャムとのコンビネーションが合うんじゃない♪」

「い、いや、わたし、それ食べたら、た、たぶん間違いなく……」

「じゃあ、わたしのあげる。あーん♪」

「ご、ごめん、ど、どうしても食えん！」

「はい♪」

ぱく。ごきゅ。ごっくん。

「ね、美味しいでしょう、何ともないんだから」

「あ、食べちゃった。食べちゃったということは、わたし……口が！　口がくさいっ！」

「ええーっ、もう？」

「あー、くさい！　なんか嫌！　わたし、大のチーズ嫌いなんだからっ、もう！」

「ごめんごめん……」

「ちなみに、沙織は、何が大嫌いだっけ……」

「わたし？　えー、あずきかなあ……特に、いちごが水っぽくなる、いちご大福」

「ふっ、覚えておきなさい、今度、滅茶苦茶高級な、いちご大福を、たらふく食べさせてあげるから！」

「そ、それだけのご勘弁をー！」

「それとも、あずきがぎっしりの、きんつばか、ぜんざいはいかが？」

「そ、それも勘弁！」

放課後も終了間近、みんなで自分が作ったチーズケーキを試食する時間だった。

「うあ、和菓子屋のお嬢様にしてはなかなかね！」

「見栄えはね……」

「味見はして……ないか」

「じゃあ、わたしの作ったチーズケーキ、まるっと沙織にあげよう。味には自信がない」

「何はともあれ、ごつつあんです」

「本当は、チーズ見ただけで卒倒しそうになったけど、あの生臭いプロセスチーズよりかはマシだからね」

「しかし、美月のチーズ嫌いは、筋金入りだなあ……」

「さて、どうしたのかなー、沙織ちゃん、わたしのケーキ、プレゼント包装なんかして」

「本当だ、どうしたの、さおりん？」

「べっ、別に、何もないわよ。霜田さんにあげるだなんて一言も……」

「バレてるバレてる」

「あ、携帯のメールだ……梨音からだ……」

『沙織へ　あれから洋品店に行って、スカートをあつらえた。これから、わたしは真人間になるつもりです。なので、今から親父と学校へ行きます。帰りは一緒に帰ろう！　梨音』

「どれどれ～？」

「ぷっ、真人間だって♪」

「更正したな、梨音ちゃんも」

「ということは、学校に来ると」

「来るとすれば、職員室だよな」

「帰りがてら、寄るとしましょうか」

放課後の職員室前。相川杏子先生が、立花親子に、目くじらを立てて怒っている。

「いいですか？ 二度はありませんからね！ わかりましたか！」

「ごめんなさい……良くわかりました……」

「よろしい」

親子「失礼します！」

とぼとぼと職員室から出てきた親子ふたり。立花梨音の父、功武さんは、水色の作業服姿だった。いかにも「電気工事してます！」というような出で立ちだった。そんなお父さんが、拳を振りかざして娘に向かって怒鳴っている。

「いいか、大体、お前が無茶かますから！ 反省文は手伝わないからなっ！」

「はあい……」

「あ、君たちは！」

「こんばんは～！」

「梨音ちゃんは、反省文何枚になったんでしょうか、おじさん？」

「ああ、先生は、もう読むのも面倒くさいから、十枚にまけておくってさ……」

「助かったな、梨音！」

梨音は、涙声で絞り出すように謝った。

「はい、しゅびばせん……」

「じゃあ、僕は先に仕事に戻るから、梨音のこと、頼むよ！」

「わかりました！」

「集団下校します！」

敷女指定の、丈の長いスカートをイージーオーダーした梨音は、朝のセクハラといい、その後、身に降りかかって来た、ありとあらゆる種類のパワハラを受け、まるで別人のように、おしとやかになっていた。

◇ ◇ ◇

『香枚井、香枚井でございます。三番線の電車は、急行、楠葉（くすのは）行きです。停車駅は、吾野本陣、紅葉野、吾野以降の各駅に停まります……』

「ふあー、着いたー」

「お疲れさま、梨音ちゃん」

「疲れたあああ」

「帰りは、何事もなかったな、沙織」

「そうだね、はっとり……わたしも疲れた」

「午前中の授業、ノート借りて来た」

「さすがは美月さま！」

「おっと、露出狂には見せないからな、梨音、自力でやれ」

「えー、ちょっとぐらいいいじゃん、ぶーぶー」

「じゃあ、桃花には後で貸してあげよう、露出狂は放って置いて」

「……露出狂キャラが定着してしまった」

「あなたには反省文があるでしょ、だからそれから」

「……あ、ケーキ！」

「そうだ！ 霜田さんに渡すんだっけ、沙織？」

「電話してみなよー」

数字をそそくさとプッシュする沙織……。

「もしもし……はい、高槻沙織です。はい、みんな一緒です……うわ、いいんですか？ 本当に？ じゃあ、今から伺います」

「で、何だって、沙織？」

「霜田さんは帰ってるんだけど、う、うちのお爺さんも来てるって……」

「あの、元祖パティシエの？」

「まあ、安全といえば安全でしょう」

「ほら、霜田さんだけじゃ心配なんじゃない？ 万が一、危ない展開にならないとも限らないし！」

「まあ、ムードぶち壊しだけどねー」

香枚井三丁目、紅電無線グループ、霜田タクシー前。いそいそと、乗務員たちが、車内清掃を行ったり、休憩を取ったりしている。駐車場の二階の軽量鉄骨の部屋が、事務所兼家屋になっている。

「や、やあ、君たち……」

「おお、沙織、来たか！」

「お爺さん！」

「ど、どうも……」

「お邪魔しまーす」

「失礼しまーす」

高槻沙織の祖父、高槻康久と、霜田浩二郎社長、霜田家の長男、拓也が、食卓に陣取っていて、かに鍋がぐつぐつ煮えていて、今やビールで酒盛りが始まろうとしていた。

「うわあ、かにだー！」

「ちょっと梨音ちゃん、はしゃぎすぎ！」

「じゃあ、プレゼント贈呈と行きますか、沙織」

「う、うん……あの一、朝に渡し忘れたプレゼントです」

「ありがとうございます。中身は……チーズケーキかぁ！」

「は、はいっ！」

「勤務中は本当に申し訳なかった。今朝はごめんね。美味しくいただくから」

「ありがとうございます！」

高槻の爺さんが、口を挟んだ。

「みんなの家には、ワシが連絡を入れといたから、ゆっくりしたまえ」

「いやいやいや、わたしたち、制服にお酒の匂いがついちゃうし……」

「心配いらん、ビールぢゃから！ それに……」

「は？」

「沙織のボデーガードをせねばならんからな。変な虫がつかんように」

「お爺さん……ムードぶち壊し……」

霜田のお父さんが、口を挟んだ。

「さあ、冷凍とはいえ、季節外れのかにだよ。ちょっと食べて行きなさい」

「いえ、遠慮します……」

「ええ、さっそくいただきま……ぐはっ！」

美月の肘鉄が、梨音の脇腹にヒットした。

「梨音はちょっとは自重しろ！」

「だ、だってえ……」

「では、私達はこれで……」

「かに、食べて行かないのか？」

「ボデーガードもおるぞ！」

「この後、勉強もありますし……」

「それに、制服がお酒臭くなったら、明日学校で何言われるか……」

「んじゃあ、楽しんでくださいね！」

「霜田さん、飲みすぎないでね！」

「あ、お疲れさまでした〜！」

「失礼しました〜」

「お、おい、かにが煮えてるのに……折角買ったのに……」

「いやいや浩二郎くん、あれが青春ぢゃよ」

「年頃の娘さんって、そういうもんですかね」

「うむ！ 恥じらいこそが、伝統ある敷島女子の生徒ぢゃ！」

いそいそと、紅電無線・霜田タクシーを後にする、沙織、美月、梨音、桃花。

「うわー、助かったー」

「あのまま酒盛りにつきあう訳にはいかないよねー」

「お酒臭くなったら、着替える制服もないし……」

「とりあえず、バスに乗りましょう！」

「沙織、良かったな！ プレゼント渡せて」

「じゃあ、沙織、私たちはバスに乗って帰るよ」

「おやすみー」

「じゃあまた明日〜！」

「いい夢見ろよー」

香枚井三丁目バス停に陣取る、美月、梨音、桃花。

「ちえー、かに食べたかったのにー」

「お前は反省文があるだろう？」

「そうね、ちょっとあのミニスカートは……ね……」

「さて、反省文かあ……何書こうかな……」

「梨音。お前、自分の胸に手を当ててよーっく考えろ」

「え、Aカップだけど……」

「ちっがあああう！ 校則違反のスカートと、遅れた授業のノートのことだ」

「え、そうだったっけ？」

「もう、お前には絶対ノート見せない。自力でやれ」

「美月のけちー」

そこへ到着する紅電バス。

『室山三四系統、春名坂小学校、春名台団地方面、紅電榛名天神駅行きです 発車します』

こうして、美月のいちばん長い日は終わろうとしていた。

◇ ◇ ◇

翌日――

「はっとりー、霜田さんからメールだよ。ケーキでお腹こわしてお医者様に行ったって」

「どれどれ、何て書いてある、わたしにも見せろ！」

『沙織ちゃんへ 昨日もらったケーキで……腹痛起こして会社休んで医者に行ったんだけど、たいしたことないって、大丈夫。だ……あ痛っ、腹が、腹が痛い！ 今度から気をつけてください 拓也より』

「こらあ、はっとりー！ お前の所為だろー？」

「わあ、許せ、ごめん、ごめんったら！」

「お前のアタマをぼこぼこヘッドにしてやる！」

「怖い！ 沙織のその目が怖い！」

そういうわけで、沙織は、その日一日中、昨日、チーズケーキを味見せずに沙織にあげ、拳げ句の果てには霜田拓也を急性食中毒に追い込んだ美月を追い回し、執拗な攻撃を続けたのでありました。おしまい。

美月さんのおバスト始め

■美月さんのおバスト始め

ある夜中、美月は自室で、胸元に強烈な痛みが走ったのを覚えた。これって、心臓発作？ まるで、胸の上皮が左右に引きちぎられるような痛みを覚え、ひとり布団の中で、うずくまりながら悶えていた。

(な、なんだろ、これ……痛ってえ……)

痛みは次第に激しくなって来た。胸元が、例えるなら、まるでメリメリっと裂けるような気がして、不安でたまらなかった。

「痛いよー！ 胸が痛てえよー！ 誰か助けてー！！ あああ！！」

声……というよりは、絶叫に起こされた美月の親が部屋まで飛んできて、美月の悶絶ぶりに、まず驚いた。母親が、まず側に駆け付けた。普段、一切の弱音を吐かない美月が、懇願するようにうめく。

「痛いよー、痛いよー、おかーさーん、わあああん！！」

「美月、大丈夫？ 落ち着いて！ どうかしたの？」

「痛いよー、胸が！ 助けて、おかーさーん」

ひっく、ひっくと泣き続ける、普段ではあり得ない状態の取り乱した美月を前に、これはただ事ではない、と察した母。

「これは心臓発作かも知れないね。あなた！ あなたー！！」

「どうした久美子！ 美月に何があった？」

「美月、心臓発作かも知れないの。すぐに救急車を！」

「わかった！」

春名坂のふもとから、救急車のサイレンが遠く近くに聞こえて来る。美月の身体の痛みは増すばかりだった。救急車は、少し手前でサイレンを止め、夜も暮れ、日も落ちた、深夜の榛名天神駅前の服部宝珠庵前に停車した。ストレッチャーに乗せられた美月に、両親が付き添うことにした。

「いいな明良、鍵かけて留守番だ！ 俺たちは救急車で病院へ連れて行く！」

「妹の一大事、うん、わかった。そうする」

「じゃあ、俺たちは行くからな！ 後で電話する！」

「痛いよお……痛いよお……」

「それじゃ、お願いします」

救急隊員がドアを閉めて、とりあえず様子を見た。まずは、酸素計を美月の指にはめ、心電図計を美月の胸に取り付けようとしたところ……乳房が充血していることがわかった。心電図計を録るのを止めて、救急隊員が美月の両親に向き直った。

「あの一、服部さんのご両親。これは婦人科かもわからんですね」

「婦人科！？」

「ええ、娘さんの胸元に、心電図計を取り付けようとしたのですが、この子、胸元が非常に充血しているんですよ。心臓発作ならば、このような充血の仕方は普通しませんね、念のため、救急外来に行きますが」

夫婦は顔を見交わす。きょとんとしたふうに。美月は相変わらず泣きながら身をよじって痛がっていたのだが、とりあえず、室山市消防局の救急車は、県立室山病院の救急外来へと向かったのだった。

◇ ◇ ◇

ここは、紅電咲花台駅近くにある、室山県立室山病院、救急外来。当直医がたまたま女医さんで、こういうことには慣れていくらしく、冷静沈着だった。散々っばら調べた挙句、出て来た答えは「成長痛」だった。身長が伸びきって、次に女子が遭遇するのがこの「成長痛」だった。

「痛み止めを打ちますねー。はい、美月ちゃん、ちょっとちくっとしますよー」

「痛い、痛いのやだ！ うわあああーん！」

「ほうら、暴れないっ！ すぐ済むんだから」

「……っつー！！」

「はい、終わりです。服部さんちのご両親さま？」

二人「は、はあ……」

女医さんがデスクから離れて、両親の方へ向き直ると、このように言うのだった。

「娘さんのバストが、急激に成長したってことなんです。むしろ、喜ばしいではありませんか」

二人「そんな……まさか……」

両親は茫然自失としていたところへ、まさかの「おバストさまの急成長」を告げられて、ますま

す開いた口が塞がらないのだった。女医さんは続ける。

「明日にでも、Dカップのブラを買いに行ってください。では、何かありましたら、一般外来の婦人科に来られるといいと思います、それでは」
両親は、美月のベッドの方へ向き直った。

「美月、良かったわねー、明日、ブラ選びしましょうね」
「へ？」

泣き腫らした涙をぬぐうこともなく、美月は振り返った。

「胸が急に成長したんだってよ、この、世話かけやがって！」
「Dカップになるんですってよ！ 美月！ 良かった！」

痛み止めの注射の効果もあり、落ち着き、冷静さを取り戻した美月が、ぐったりしながらつぶやいた。

「なーんだ、胸の急成長だったんだ、あたしの。てっきり、心臓かと思ったよ……」

◇ ◇ ◇

ここは、敷島女子高等学校のとある教室。美月、梨音、桃花がお昼休みを過ごしていた。沙織は、今日は風邪でお休みだった。

「……っつ一事が、中三の夏に起こってさ、結局、牛乳の飲み過ぎだって」

いまのところ、発展途上なバストの持ち主である、梨音、桃花が感心していた。

「なるほどねー。巨乳には巨乳なりの悩みがあるんだねー」
「メリメリって来たの？ 美月ちゃん？」
「そう！ もうちぎれるかと思った！」
「ちっ、あたいもちぎれるぐらい、胸元に変化が来て欲しいものだ」
「梨音、お前の胸がもし、ポーんってなったら、それこそアンバランスだよ」
「そういうもんですかね、美月さん……」

桃花が続ける。

「いなー。わたしも牛乳飲もうかしら！ 一日六リットルぐらい！」

「ばーか。そんなことしたら、お前の胃がもたれるつーの。真似すんじゃないよ。いなー、ふたりは身が軽くて、小回りが利いて、肩も凝らないし、何かと楽だし」

「そういうことらしい」

「でも、いなあ、巨乳とまでは行かなくても、少しぐらいの成長はして欲しいよ、がんばれ、おっばい！」

「あ～あ、桃花は桃花で自分のを励ましてるし……は～あ。貧乳がうらやましい」

「貧乳言うな！」 「そうだそうだ！」

「ごめんごめん。ただなー、わたしって、想定外だったんだよ。そういうキャラじゃないし、グラドルなんかなるより、むしろ高校の先生になりたいし」

梨音が続ける。

「美月さん、グラドルは儲かりませー。『みづき16歳』とか、写真集出したりなんか、しちゃったりしてー！」

「ないない。これは見せもんじゃなくて、もともと赤ちゃんのもの。男のものなんかじゃ、ないんだからっ」

「おお、堅物きたー！」

「美月ちゃんって、真面目なのねー」

ring... dong... ring... dong...

「ささ、おっばいよりも、五時限目の授業だ授業。飯は残さず食べよー！」

二人「がつがつ、むしゃむしゃ……」

「まだ食ってるしー。おかしい。ははっ！」

「うるひゃい、きよにゆうのくせしてもったいにゃい……」

「そうら、そうら、むしゃむしゃ……」

室山県立敷島女子高等学校、普通科の午後が始まってゆく……。

■沙織と美月と狼たちと

ある土曜日。榛名天神駅前の和菓子店、服部宝珠庵。服部美月の実家だ。名菓「香枚井餅」という羽二重餅が、まるで飛ぶようにはけてゆく。榛名天神社の参詣道の入り口というロケーションから、おみやげに買っていこう、という人たちが、朝早くから列を成していた。美月も例外ではなく、お店を手伝わされていた。白い頭巾に、白い割烹着という出で立ち。

「六個入りが三箱で、一八〇〇円になります。ありがとうございます。丁度お預かりします。ありがとうございました……あれ、携帯が……」

『はっとりへ 折り入って相談がある 今から香枚井駅前のウインピーバーガーに来ない？ そっちは暇してる？ 沙織』

美月は早速返信を打った。

『沙織へ いま実家が忙しくて、餅ばかり売ってるよ！ お昼を一緒に、ぐらいなら、たぶんOKかな 美月』

服部美月は、母親に香枚井まで行くと言うと、こんなに忙しいのにお昼を抜けるなんて……と言いつつ憮然な表情に変わったが、高槻さんと昼食を共にするだけだ、と言ったら「まあ、しょうがないわね、行ってらっしゃい」という感じで許してくれた。早速、割烹着を脱ぐと、服装は、ふつうの普段着だった。仮に敷女の制服で買い食いしたり、商売していたら、近所の住民から学校に通報されるといった厳しさがあるからだ。

榛名天神駅から、各駅停車に乗って一駅で香枚井に着く。香枚井駅は、室山市の北の玄関口とも呼べるロケーションで、葱北本線は快速が、紅葉野電鉄は急行が停車する。そんな賑わいを見せる商業地には、大規模なショッピングモール「シエスタ香枚井」があり、高槻沙織の実家が経営する洋菓子店「パティスリー 高槻洋菓堂」の支店もテナントに入っている。なお、「ウインピーバーガー」という地元のチェーン店も、テナントに入っている。

服部美月は、ハンバーガーショップに入った。適当にフィレオフィッシュ（もちろんチーズ抜き）のセットを頼むと、やがてそれを受け取り、店の奥で待っている高槻沙織の姿を見つけると、そのまま店の奥へと入って行った。

「やあ、はっとり、こっちこっち！」

「なあに、折り入って相談って一のは。相談だったら、わたしん家来ればいいだろ？」

「呼びつけておいて、ごめんごめん、実は、わたしんところの店も忙しくて、お店のお手伝いをしているのだ、シエスタ香枚井で」

「なんだよ、お前の都合かよ……わたしだって、榛名天神の店で忙しいんだからっ」

「はい、お礼の印と言っては何ですが、これ当たったんで、はっとりにあげるー」

「お、ポテト引換券か、サンキュー。ところで、わたしのスクラッチカードはどうか……ええと、十円玉……あった。どれどれ……」

スクラッチカードを必死にこする美月。

「なんだよ、ハズレかよー」

「おやまあ、残念。でもこれって、十枚ためると五百円のチケットになるんだよ、とっときなよ」

「わたしは私用で香枚井に来ることは滅多にないから、沙織、お前が集めろ」

「そうしますー」

「で、相談って何だよ、教えろよ沙織」

「じ、じつは、今から霜田さん兄弟が揃ってこちらに来るのですー」

「はあ？ 聞いてないぞ。何だよ、まるで合コン開始、みたいな雰囲気になっちゃうじゃんかよー！ 焦らせるなよ！」

「で、ですねえ、友人代表として、一緒におしゃべりしましょう、というのが、わたしからのお願いだったりするのです」

「……帰る、わたしは忙しい、残り全部お前が食べ！」

沙織は、美月がすっと立ち上がると、事務的な表情になって、その場を立ち去ろうとするのを、服をつかんで必死に制止しようとした。

「お願いです服部さん、わたし一人だけじゃ心細いので、どうかお願いします！」

「……んもう、ちょっとだけだぞ！」

その頃、鍵堀川を渡ってきた霜田 翔と、橋の対岸で待っていた霜田拓也が合流し、紅電香枚井駅西側に隣接する「シエスタ香枚井」に向かって歩き始めたところ。背広には社章がついているので、二人共、上着を脱いだカッターシャツにスラックスという出で立ちだ。ライバル鉄道の社員同志と一緒に飯を食うというシチュエーションは、お互い避けたかったらしい。やがて、二階のハンバーガーショップに、二人が現れた。

「はっとり、あの人がおなじみ拓也さん。で、ちょっとチャラそうなのが、弟の翔（かける）さん」

「翔さんは初めて見る顔だなあ。確かにチャラそう」

「あ、こっち来るわ」

高槻沙織が手を振って合図を送ると、霜田兄弟は「よっ」というような、敬礼ほどではないけれども、軽いジェスチャーをして見せた。

「はっとり、あなたの隣譲って、席譲って」

「わ、わかった」

霜田兄弟が、ハンバーガーをトレイに載せてやって来た。まず口を開いたのが、弟の翔のほうだった。

「おっす、沙織ちゃん！ 隣の子、誰？ 新顔だなあ」

「こ、こんにちは翔さん、この子、友人代表の服部さんです」

「服部さんって言うのか。初めまして。オレは霜田 翔。よろしく！」

「あ、ど、どうも……」

「それにしても、服部さんって、胸でけえなあー」

「こら、翔、セクハラするな！」

割って入ったのは、翔の兄貴である霜田拓也だ。翔の頭に空手チョップを炸裂させた。

「痛てえ……」

「女の子にセクハラするなとあれほど……」

「わたし、帰りたい……」

「はっとり、ここは我慢して、お願い！ 女子には、誰にでもああなの、翔さんって」

「セ……セクハラされた……」

「だってさ、本当にでけえから」

「ま……またセクハラされた……」

美月は泣きそうだった。

「翔、黙れ！ とっとと座れ、このおっぱい星人が！」

「だって、無いよりかは、あるほうがいいだろ？」

「わたし、胸以外に取り柄とかないんですか？」

「初対面なのにわかる訳ねえよ、なー」

「なー、じゃねえよ翔！」バシッ！

「何か今日のオレ、兄貴にどつかれっ放しなんだよなー」

「当たり前だ！」



場も和んだことだし(?) ゆっくり昼飯でも食うか、といった雰囲気の中で、なんじゃかんじゃ言いながらも、ボックスシートにおさまる乙女と狼たち。

「拓也さん、こんにちは」

「ああ、こんにちは」

「お、オレには？」

「知りませんっ！」

「沙織い、まるでガキンチョだよな、翔さんって」

「目が、もう身体目当て、って感じだよなー」

「なんだよー、それ、失礼な。オレだってマジメな葱北本線の駅員だぞ！」

「沙織ちゃんに美月ちゃん、コイツ、サックスとセックスだけが生き甲斐の、どう猛なケダモノだから、気をつけて」

二人「はい」

「おい、ちょっと待てよー！ オレにはそんな設定ねえよ！ 誤解を与えるなって！」

「ちなみに、兄貴のオレは、いつでも紅電の代行バスが運転できるよう、バスが運転できる大型二種免許持ってるよ」

「お、オレだって、ハーレーダビッドソン運転できる大型二輪持ってるんだからな！」

「霜田さんたち、すごおおおい！」

「でも、翔さんとタンDEMしたら、翔さんの背中センサーで胸の感触探られそうね」

「あり得る、あり得る」

「なんだよー、そのケダモノ設定やめてくんないかなあ……」

食事も一段落したところで、各自が携帯電話を用意して、ワイヤレスで電話番号やメールアドレスなどの情報を交換することにした。

「じゃあ、いっきまーす」

「いっせーの、えいっ！」

「あ！ 翔さんのも取り込んじゃった……」

「後で消せばいいんじゃない？」

「消すなよ！ ちゃんとオレのも残せよ！」

「拓也さんのは、ちゃんと残しときますからね」

「うん、ありがとう」

「って、おい！」

「じゃあ、今日のメインイベント終了、ってことで、良かったな、沙織」

「ありがとう、はっとり！」

「あ、霜田さんたち、今日はお忙しい中、ありがとうございます！」

「済みません、私のわがままで呼び出したりして……」

「いや、気にしなくていいよ、オレらのことは」

「そうそう、オレたちのことは、心配いらぬから」

「じゃあな」

「じゃあ、また月曜日、改札口で！」

二人「はい」

そうして、二人の駅員は、席を外した。まだ何かしゃべり足りない翔は、兄貴に向かって何か言っているが、その都度兄貴の空手チョップを後頭部にくらうのだった。

「翔くんって、まだまだ子どもっぽいところあるよねー」

「くんって……確かに、言えてるー」

「それに引き替え、拓也さんって、紳士よねー」

「そうかなー。案外、実は中身がムツリスケベだった、とか言うんじゃないのー」

「んもう、幻滅するじゃない、はっとりったら」

「男は狼よー、気をつけなさい、赤頭巾ちゃん」

「そういうもんですか」

「その通り」

「と、いいいますと？」

「敷島女子、略して『敷女』ならいいんだが、色魔の女子、略して『色女』にだけは、絶対なっちゃダメだぞ」

「はっとりったら、時々、学校の先生みたいなこと言うねえ」

「まあね。長年、アホ二名の世話してきたから、くせかな、これは」

服部美月が、ドリンクを口にした瞬間、高槻沙織が突拍子もない事をしゃべった。

「ところで、はっとり誰が好きなの？」

「ごぼっ！」

「恋とか、してるの？」

「げはっ、げほ、げほ……あー、もう、沙織は急に何を言い出すの？」

「わたしの恋愛事情はともかく、いつも仲人さんみたいに振る舞ってるはっとり、誰が一番好きなの？ 恋とかは……してないの？」

「ばっ、ばかもの！ わたしに限って、好きな人なんかいるはずないじゃない！」

「そうかな。はっとりって、異性モテしそうな感じするけどなあ……」

「もててない、もててない。どうせ見てくれだけの堅物な女ですとも！」

「そうかなあ……はっとりを見て、振り向く男子、結構いるよ？」

「あー、わたしさあ、まだ異性に興味ないんだよね。つーか、色恋沙汰は、何かと面倒くさいし、噂や評判になるのもイヤだし」

「でも、和菓子屋さんの長女なんだし、お店にお嬢さんをお迎えしなきゃ……」

「って、いきなり配偶者かよ！ 気が早いんだよお前は！ ……さて、帰るか」

「ぶ……無粋なこと、訊いちゃったかなあ」

「さあ、もうすぐ一時だ！ 仕事だ仕事！ 行くぞ沙織！」

「はあい」

シエスタ香枚井の地下一階に、高槻洋菓堂の店舗がある。そこに付き合わされる、服部美月。なにやら「お土産」があるそうだ。冷蔵ショーケースと、いわゆるクッキー、ビスケット類が半分半分に置いてある。

「やだ、チーズケーキが置いてある……」

「違うよはっとり、こっちのだよ。これだったら食べられるでしょ。ほら、棒状に丸めたバタークッキー」

「え、ちょっと待て。わたしにくれるのか？」

「うん、ヤボ用に付き合わせてしまったお礼」

「いいよ、友達なんだし、そんな社交辞令みたいな、遠慮します」

「堅いこと言わない言わない。電車賃代わりに」

「わたしは、できれば五〇〇円玉の方が嬉しいのだが……」

「はい、プレゼント、フォー、ユー」

「さ、さんきゅ。あんがと。じゃな。仕事頑張れよ！」

「うん、今日のごめんね」

シエスタ香枚井のエスカレーターを昇って行く美月。そういう美月も、実は、恋がしたいって思っているし、人並みの健康な女子なのだから、異性に興味がないわけじゃない。が、しかし、いつも理性が勝ってしまう。理性が、そうした欲求を、知らず知らずのうちに抑え込んでいるのだ。由緒正しき「香枚井餅本舗」のお嬢さんだ。常に、そういう欲求は抑えるように、両親から知らない間にインプリントされている。

(でも、沙織に言われた……恋をしたことがあるのか、って。ないことはないけど、わたしって勝ち気だし、どちらかと言えば男言葉だし、男友達はいたけど、そんなピュアなシチュエーションまで至ったことがないし、キス……だって、まだだし……)

エスカレーターを上り終え、少し進んだところで、ふと立ち止まった。

「恋……かあ……」

美月は一瞬、遠い目をした。

「えええい、心頭滅却すれば火もまた涼し！ さあ、仕事だ仕事！」

服部美月は、紅電香枚井駅の切符売り場で、コインを投入し、一五〇円と書かれたボタンを押した。そして、完全に我に返った。

（そうね、シエスタ香枚井に空き店舗が出来れば、服部宝珠庵の支店を出すという手もあるかもね、経営上。ライバル同士、繁華街でこそ、しのぎを削らねば！ 各駅停車の門前町でくすぶっている場合じゃないわ。よーし！ 今度、父親に相談してみよう！）

◇ ◇ ◇

服部家の晩の食卓。ショルダーベーコン入りの野菜炒めに、ご飯、それからおみおつけ。至ってシンプルな晩ご飯だ。服部家の夕餉は遅い。午後七時に店を閉め、午後八時にみなでお食事といった具合に。食卓には、美月と、美月の兄で服部明良、美月の母、服部久美子、美月の父、服部征志が座っていた。

「ねえ、父さん、お願いがあるんだけど」

「お金の相談だったら、聞けないなあ……」

「今度、シエスタ香枚井に出店することがあったら、私手伝う！」

「うーん、シエスタ香枚井かあ。一度は考えたんだが、どうも店賃が高くてな……」

社会人一年生の兄、明良が口を挟んだ。

「おい美月、もしかして、お前の友達、洋菓子店と張り合おうってのか？」

「うん、まあ、そんなところ」

「止した方がいいと思うぜ。うちは、室山市観光協会に置かせてもらっているし、道の駅・香枚井にも置いているし、葱州縦貫道の岩崎サービスエリアにも置かせてもらっているんだから、全然、高槻さん家とは、客層が違うんだよ」

「くっそお、早く大人になって、高槻洋菓堂を見返してやりたいんだけどなあ……」

この道一筋の父、服部征志が口を挟んだ。

「美月。今は、学問に集中しなさい。もし文学部に入れたら、特に、この近辺の歴史を研究するんだ。何故、天神社に餅を供えるようになったのか。なぜ、服部家が御用達になったのか。そも

そも、何故地名が春名坂上なのに、どうして井戸の名前が香枚井なのか。どうせ勉強するのなら、そこんところを、深一く勉強しなさい、わかったね」

「はあい」

服部美月は、自分で自分の食器類を洗い終わると、自室にこもった。椅子に腰掛けて、机に向かって、音楽を聴きながら勉強をし始めた。そして、つぶやいた。

「あー、早く大人になりてえ……ちきしょ、認めてもらいたい……」

そう言いつつ、室山大学の赤本を手にとって、涙目で勉強しているのだった。

（目標は、服部宝珠庵、シエスタ香枚井出店！ 負けるものか、負けるものか！）

服部家の夜は更ける……。

臨時講師、マイク・ゴズウェル登場！

■臨時講師、マイク・ゴズウェル登場！

ここは、県内屈指の進学校、室山県立敷島女子高等学校。規律正しく、折り目正しき女学生が集う、他校の女子もうらやむ、お嬢様学校な、はず、だが……。今日の職員室は事情が違っていた。

なんと、はるばるイングランドのリバプールからやって来た、英語の臨時講師、その名も、マイク・ゴズウェル。身の丈、約二メートル。当然英国人だから、あやふやな日本語を操り、そして、何と言ってもむだ毛の多さ。Tシャツからは、あふれんばかりの胸毛が見えている。そして、腕にも体毛がわんさと生えていて、脚も例外ではなかった。とりあえず、いまのところ、セックスアピールだけは抜群だ。

「HAHAHAHAHAー、ミナサン、ゴキゲンオカラデスカー？ ワタクシ、リバプールカラ、キチャイマシタ、マイク・ゴズウェルデース。ワーオ、コノ、ハイスクール、ピチピチガール、バカリデース！ ドウゾ、ヨサク、オニガシマース」

英語科の、悩める女性教諭、相川杏子先生が、この巨漢を相手に生徒に生のイングリッシュをレクチャーさせないといけないのだ。

「わたし、頭が痛いんですけど……校長、早退させてもらってもいいですか？ いきなり疲労がレッドゾーンなんですけど……」

「なんだ、英語科担当教諭なんだろう？ 自分から志願したんだし、やりかけた事を途中で投げ出すのは、関心しないねえ……」

「でも、校長……この人発言が卑猥です……」

「じゃあ、早速、三時限目に、一年三組に連れて行きなさい……頼むよ」

「はああ……」

◇ ◇ ◇

三限目は、英語Ⅰの時間……。その前の休み時間に、廊下にゴズウェルを引き連れて、相川杏子先生が一年三組の教室に向かった。杏子先生の手提げ袋には、謎の物体が。そうして、一年三組の教室の前で、杏子先生はゴズウェルに向かってこう言った。

「ミスター・ゴズウェル、キープ、サイレント。ウェイティング、ヒアー。アンダスタンド？」

「オー、オーケー、オーケー、ハーツハツハツハー」

「シーッ、ビー、クワイエット！」

「ソ、ソーリー……」

先に、相川杏子先生が教室に入ってきた。お祭り騒ぎできゃいきゃい言っている教室が静まりかえった。

「起立、礼、着席！」

「えー、先般から皆さんにお知らせしていましたが、イングランドからお越しになった、マイク・ゴズウェル講師が参ります。もし、セクハラの表現の度が過ぎた場合、わたしが合図をしたら、今から配ります、豆まき用の炒り大豆を渡します。徹底的にぶつけてください。生徒同士怪我のないように。わかりましたね。わたしは後ろで見えていますから、安心してください」

「えー、豆えー？ 炒り大豆うー？」

「そんなに酷いセクハラなのかしら……」

「スケベなのかなあ……」

「えー、全員行き渡りました？ 行き渡った。ああ、そう。じゃあ、武器は隠して下さい。では、今からゴズウェル講師をお招きします」

ガラリと扉を開いて、杏子先生がゴズウェル講師に呼びかける。

「ミスター・ゴズウェル、プリーズ、カムイン！」

「ウェル、オーケー、オーケー。ハーツハツハツハー！ オー！ ウァオ！ ミナサン、ビューティフルデスネー！ ハジメマステ、ワタクシ、イングランドのリバプールカラ、キチャイマシタ、マイク・ゴズウェル、デース。ドーズ、ヨサク、オニガシマース！」

「はい、拍手ー」

パチパチパチパチ……。

「サンキュー、サンキュー、ジャパニーズガール、マルデ、カインドネスデ、ハートウォーミングデース」

「じゃあ、ミスター・ゴズウェル、ゴー、アヘッド」

「オーケー、ミス・キョーコ！！ ハーツハツハツハー！」

「……では、わたしは後ろで見えていますから、授業を受けてください」

◇ ◇ ◇

「デハー、ジュギョーヲ、ハジケマース！ アー、ユー、レディ？」

一同「イエー！」

「マズ、ノートヲ、シャカシャマにして、ウラガエシテ、ソウ、サッカサマニ、シマース」
「逆さまの裏返しだって……」
「どうする気かなあ……」

半信半疑に、英語のノートを裏返し、天地逆さまにしてみる、女生徒たち。

「ソコニ、コクバンドオリ、カキクダシテクダサーイ！ ヘルス&フィジカルエデュケーションノ、テクストヲ、モロダシシテクダサーイ！」
「ゴズウェル先生、保健体育のことですか？」
「ハイ、ホッケンタイックのコトデース！ アイム、ソーリー」
「何ページを開くんですか？」
「ホワット、ドゥー、ユア、オープンナ、ページ？ オーケー、オーケー」

相川杏子先生は、おやっ？ と思い始めた。何の教育をするのだろうか、そんな目で見ていた。ところが。

「ホッケンタイック、テクストノ、ヨンジュウハチ、ページ、デーズ！」

そして、おもむろに、それを黒板に板書し始めた。そして、黒板に描かれた男性性器の断面図の睾丸のへんを、拳で叩きながら、こう言うのだった。

「ココ、イイデスカー、ココハ、ダイジデス！ テスティクル！ テスティクル！」

相川杏子先生が叫んだ！

「みんな、準備しましたかー？ これは、セクシャルハラスメントです！ 突撃ー！」
「イエッサー！」
「ホワット？ ハラス……ノー！ マイ、ガー！」

マイク・ゴズウェル講師にぶつけられる、炒り大豆の数々。廊下へ逃げようとするのを、みんなで追いかけて追い払う。文字通り、赤鬼にぶつけられる炒り大豆。マイクは、こりゃ堪らんと、教室のドアをがらりと開けて逃走しようとするが、四十一名対一で、その差は歴然としていた。なので、廊下は炒り大豆だらけ。

「ノー！ ソイビーンズ！ ア、イテー。ダスケテ、タシケテクダサーイ！ ニッポンノ、オンナノコ、キレルト、コワイデース！」

三階の教室から、豆をぶつけながら、一階の職員室まで追いかけて、校長先生にマイク・ゴズウェル講師を突き出した。そして、ノートを見せた。炒り大豆をぶつけながら、最後まで追いかけた女生徒は、十数名はいただろうか。

「おやおや、生徒の皆さんと、ゴズウェルくん。穏やかでないね。一体全体どうしたんだね。」
「こ、校長先生、この人、英語を教えてくれるかと思ったら、こんな卑猥なモノを教えるんですよー。もう、超最低ー！」

「あ、あそこを指さして、テストィクル！ って言って、もうセクハラです！ やだー、わたし、やだー！」

相川杏子先生が追いついた。

「校長、人選ミスです！ 即刻この学校から叩き出して下さい！ 最低です！ 最低です！」

校長が巨漢のゴズウェル講師に詰め寄って、言葉汚く罵った。

「ユー、サック。ナウ、レイオフ！ レイオフ！ ゲット・アウト・オブ・ヒアー！ ユー、ア
ンダスタンド？」

「オー、ソーリー、ソーリー、モウ、トゥワイスハ、シマセンカラ、カンベンシテ、クダサーイ
」

「ノーノーノー、レイオフ！」

相川杏子先生はため息をついた。

「校長、人選ミス……ってというか、廊下の大掃除が必要ね……はああ……」

教室では、日直の服部美月が、黙って例のあれを、黒板消しで消している。机には、立花梨音だけが残って板書を書き写していた。

「ねえ美月ー、まだ消さないでー、わたし、今日すごく勉強になった！」

「書き写すな、こんなもん！」

「えー、やーだ、消しちゃやーだ！」

「だが断る……」

その後、マイク・ゴズウェル氏がどうなったかは、読者のご想像にお任せする……。

中間テストがやって来る！

■中間テストがやって来る！

春名台団地の一部屋。土曜日の午後二時、立花梨音が、柏原桃花の家を訪ねた。団地と言っても新しく、3LDKの広いお部屋だった。そこでしばらくは、おとなしく現代文の教科書を広げて、柏原桃花から指導を受けていたの……だが？

「……い、いかん、糖分不足で、全然考えがまとまらん！」

「え？」

「じゃあ、桃花、今からおやつの時間にしようか？」

「そうしましょう。それが終わったら、数学にしましょう。その前に、掃除機を……」

「あ、そうだった！ 掃除機忘れるところだったー」

辺りは、主に立花梨音が吹き飛ばしたと見られる消しゴムのカスで一杯だった。

「で、今日のおやつは？」

「沙織んちの、スイートポテトで一す！」

「うわー、美味しそう！」

「じゃあ桃花、お茶入れてきてー。あ、掃除機どこー？」

梨音は、現代国語の宿題を書き終わると、ウォークインクローゼットの中から掃除機を取り出し、カーペットを掃除するのだった。一方、桃花は台所から、電気ケトルとティーバッグ、お皿やフォークなどを用意して、こちらの部屋へ持ってくるのだった。

「梨音ちゃんちで揃えたんだよね、掃除機とか、電気ケトルとか、この家の電化製品のほとんどを……」

「お、お客様は神様でございます、桃花さまー」

「えっへん！」

「六〇ヘルツの電子レンジとか、いろいろ揃えてもらいまして、恐縮です桃花さまー」

「お茶ですよー」

「サンキュー！」

さつまいもをくりぬいて作られたスイートポテト。女性に生まれて来たなら「芋・たこ・なんきん」の三大好物は外せない。このふたりは、まだまだ「色気より食い気」の方が勝っていた。

「でさー、今回芋だろう？ でさ、わたしが、たこ焼き器持って来たから、たこを制覇するだ

ろう？ で、次はあんたが、わたしに、かぼちゃの含め煮を食べさせる。これで、芋・たこ・なんきんコンプリート計画は完璧だね」

「いい計画ですね、梨音ちゃん」

「えっへん！」

「でさー、まさか、その、ナサパニックのたこ焼き器、売りつけるんじゃないんでしょうねー」

「ええー、まさかのまさか、今回はわたしのサービスつーことで、無料でーす」

「良かった、また何か売りつけられるんじゃないかって、ヒヤヒヤしてたの」

「そこまで商売汚くないよ、だって、お得意様だしー」

「じゃあ、芋・たこ・なんきんコンプリート計画って、いい計画ね」

「だろう？ 桃花もそう思うだろう？」

「でも……」

「なんだよ」

「五月って、中間考査があるんだよねー。中間テスト」

「……ちゅ、中間テストー！」

「そう、あ、梨音ちゃんは見えてなかったんだ、はい、プリント」

「本当だ！ やっべえ……」

「……準備、してないんだ、やっぱり」

一方、服部宝珠庵の美月も、プリントが配られていたことを思い出していた。家の自室に入ると、革靴の中から「中間考査実施について」のプリントを引っ張り出した。しげしげとプリントを見つめ、プリントを持ったまま、店のカウンターへ入って行くのだった。

「お母さん、これ……」

「んまあ、中間テスト？ あなた、入学してから初めてじゃない？」

「うん。敷女の中間テストって、あなどれないんだよね」

「難しいの？」

「うん、結構ビシバシ来るね」

「……あなた、お店はいいから勉強なさい。さあ、ここはいいから！」

「はあい」

美月は、自室の机に戻り、現代文、数Ⅰ、物理、英語Ⅰなどなどの教科書とノートを取り出した。「ふう」と、溜息をつき、「さてと、どうすっかなあ……」とつぶやいた後、携帯電話を取り出すのだった。

「まずは、一番勉強してなさそうな、梨音にかけてみるか」

『はい、立花ですが……って、美月い？』

「正解。お前、中間テストあるの知ってるかー？」

『えっへん。いま、わたしたちは、桃花の部屋で勉強合宿中なのであったー』

「……それで、はかどってんのか？」

『もちろんであります。理系はわたしで、桃花が文系』

「そ、そうなのか……随分仲良く助け合っているんだなあ……梨音が、勉強だなんて、天災地変の前触れかもな」

『な、なにをおっしゃいますか美月さん。わたしらだって勉強してますよー。いま、桃花の部屋でー』

「ま、マジメだなあ……お前ら、変なもの食べたか？ 何か食あたりでも……」

『やだなあ、沙織んちのスイートポテト食べてただけだよー』

「……や、やっぱり」

『なあに？』

「……やっぱり変なもの食べて、アタマがおかしくなったのか……あ、それはそうと、ちゃんと、おカネ払ったんだろうな！ まさか、ネコババ？」

『失礼な。わたしらで分け合って、おカネ出しましたよ、美月さん！』

「ちきしょ、うらやましい……さつま芋か……」

『ところで、お二人で、霜田さんたちと、デートしてる場合じゃありませんよ、美月さんったら』

「デートじゃない……って、そ、その話、だ、誰から聞いた？」

『沙織のお母さんからー』

「あ、あのおしゃべり親子……」

『美月さんも、隅に置けないねえ、ぷふっ！』

「わ、笑うなー。わたしは、翔さんにセクハラされたただけだ！ 全然楽しくなかった！」

『まあ、詳しい話は置いといて、ウチ来る？』

「ったく、春名坂小学校までバスで何分かかると思ってる！ わたしは、沙織を呼ぶ！」

『おおー、やっと勉強する気になったか商売人！』

「元祖商売人の、お前に言われたくないよ……じゃあ、勉強、がんばれよ！ じゃあな」

『はーい、んじゃねー』

(……く、くそっ、全部見透かされた……沙織はどこじゃああ！)

いそいそと、美月は沙織に電話をかけた。

「あ、もしもし、沙織？」

『はーい、いま、お店のお手伝い中……』

「って、そんなこと、やってる場合かあああー！」

『うわあ……何だか知らないけど、急に怒られたあああ！』

「沙織、何か忘れてない？ 中間テストとか……」

『い、いや、わたしは覚えてないよ』

「それがいかんっちゃーんじゃー！ まったく、緊張感持てよ……」

『い、いや、わたしは一夜漬けで何とかするから』

「それもダメ！ エプロン脱いで、勉強道具持って、敷女の制服ちゃんと着て、今すぐ榛名天神の店に来なさい！ 今日は、明日になるまで、みっちり勉強を叩き込んであげる、わかった？ 外泊は、親の許可取るの！」

『はっとり、話が急すぎて、何が何だか……』

「今から一時間だけ待つ、大至急来ないと、絶交だからな」

『わ、わかりました、わかったから、はっとり、どうか落ち着いて……』

「じゃあ、待ってる、わたしは切る」

『……』

高槻沙織は、シエスタ香枚井店のショーケースの裏にしゃがみこんで、とても困惑している……。

「ど、どうしよう……なんか、凄い怒ってる……」

沙織が、母に急いで電話をかけた。

「もしもし、お母さん、いまシエスタ香枚井なんだけど、服部さんに、勉強しろ！ って呼び出されて……」

『あら沙織、お疲れさま。って、何かテストの時期でも？』

「そうなの。五月は中間テストがあるから、お前も勉強しろ、って、榛名天神のお店に呼び出されて、お泊まりで勉強がんばることにしたの。直ちに来なきゃ絶交だって……」

『まあ、必死っていうか、すごい剣幕ねえ……』

「とりあえず、家に帰って支度するから、お店、店員さんに任せていいでしょ、ね、ね」

『まあ、しょうがないわねえ……いいわよ、行ってらっしゃい』

「ありがとう、お母さん！」

携帯電話を切って、店員さんの方へ向き直ると、沙織はアタマを下げた。

「お店の方、済みません。急に美月の家で勉強する事になったので、行って来ます。後は宜しくお願いたします、皆さん！」

「沙織ちゃん、勉強がんばってね！」

シエスタ香枚井を出た自転車が、香枚井三丁目の本店兼自宅に着いたのは、そんなに時間はかからなかった。ただ、春名坂を越えて自転車では到底間に合わないの、紅電に乗るしかなかった

。「おやまあ、お帰り。ちょっとあなた、急ぎ過ぎよ！」
「いいの！ これはゆっくりしちゃいけないから！」
「もう、ドタバタしちゃって……」
「お母さん、今日は服部さんちでお泊まりになるから、よろしくね！」
「ええ、いいわよ……いいけど、あなた、制服なんかで……」
「はっとりが着て来いって！」
「あら、そう……」
「じゃあ、行って来まーす！」
「気をつけて！ って、もう、ドタバタね……」

香枚井三丁目のお店から、自転車で紅電香枚井駅に取って返す沙織。自転車置き場に自転車を収納すると、改札口へ駆けて行く。もう土曜日の午後五時だ。改札口に、霜田拓也の姿を見つけた

。「霜田さああん」
「沙織ちゃん！ どうした、こんな夜に、しかも制服で……」
「えへ、榛名天神駅に行くだけですー、服部さんちでお勉強です」
「服部さんかあ……この間は、翔のやつが済まなかった、と言っておいてくれる？」
「はい、わかりましたー！」
「じゃあ、行っておいで、気をつけて……」
「はーい、霜田さんも、おやすみなさい」
「ああ、おやすみ！」

『四番線の電車は、次発、各駅停車、楠葉（くすのは）行きです。楠葉までの各駅に停まります。間もなく、電車がまいります。白線の内側まで下がってお待ちください』

（携帯電話、この車両は使っていないだよ……ね。メール打とうっと）

『はっとりへ いま、紅電香枚井駅の電車の中 次発の各駅なので、動き出すのを待ってる だから、もうちょっと待っててね 沙織』
「ふう……。これで安心してくれるかなあ……」

メールを打ち終えた直後、今度はいきなり電話がかかって来た。

「はい、もしもしー」

『わたしだ！ 香枚井三丁目なら、なんで霜田さんちのタクシー使わない！ 坂登りゃあすぐじゃないか！ 急げ！』

「はっとり、うるさい。もう駅の改札くぐっちゃったよー」

『あーもう、あんたってばお金持ちなのに、コレだっ！』

「でもでも、霜田さんに『おやすみ』って言ってもらえて、なんか幸せ！」

『……なーんだ。のろけかよー。色恋沙汰はわたしには関係ないんだから』

「あ、電車出るよ、じゃ、お店で待ってて」

『はいはい。じゃあ、お幸せに！ 大至急来いよ！』ガチャ！ プー・プー・プー……

「切れちゃった……っていうか、はっとりがキレてた……何でだろう……」

◇ ◇ ◇

紅電・榛名天神駅は、線路を通すための切り通しの上をまたぐように、橋上駅舎が建っている。つまり、ホームからの上り階段が長いのだ。小刻みにステップを踏んで、沙織は階段を駆け上がった。エスカレーター。そんな便利なものは、ローカル私鉄の各駅停車の駅には存在しない。階段を上がり終え、自動改札に切符を通すと、例の「服部宝珠庵」を目指して駆けて行った。

「服部宝珠庵」は、寛永七（一六三〇）年から綿々と続く、餅屋の家系だ。名菓「香枚井餅」は、この近辺の地名の由来となっている「香枚井」という井戸の銘水で練り上げられた羽二重餅で、昔は、葱州街道の春名坂越えをする旅人の休息場所となり、美月の実家、「菓匠 服部宝珠庵」は、榛名天神社で「御用達」になっているほどの旧家だったりするのだ。

「こんばんは一、高槻沙織で一す。美月ちゃんおられますかー？」

「あら、春名坂下の高槻さんね！ こんばんは！ いま、おばさんが呼んでくるから、ちょっと待っててね。……美月！ 美月！ 高槻さん家のお嬢さんが来られたわよー」

「はあーい」

二階で美月の物音がする。

「……美月、もう来るからね、ちょっと掛けてて頂戴なさい」

「やあ、はっとり！」

「なんだ、遅いぞー！ 日が暮れちゃったじゃないかー」

「ごめーん、これでも、全力疾走して来たんだからー」

「じゃあ、上がって、さあ、早く！」

「お邪魔しまーす」

「お、ちゃんと制服着て来たんだな。偉いぞー。それでこそ敷島女子！」

「もう、急がせるから、階段でスカートがもつれて……走りにくかったんだよー」

「今日は、桃花の家で、梨音が合宿するらしいから、わたしたちも合宿だ！」

「な、何で対抗して、わたしたちも合宿するのよー」

「ばっかっ、梨音のアホに負けてなるものか。わたしたちが負ける？ そんなこと、絶対にあってはならない。さあ、入った入った！」

「もうっ、相変わらず、とことん負けず嫌いねー」

かれこれ、築、四〇〇年近く経った、とことん古風な和風の部屋に、不釣り合いな、水色のカーペットと、ステンレスをベースにした、とことん実用一本槍な調度品。

「ここ、はっ通りの、お兄さんの部屋？」

「ちっ……ちがあああう！ ここは、わたしの部屋だ！ 悪かったな、男らしくて！」

「ごめんごめん……」

「ところで、沙織……あなたのお母様が、わたしたち二人と、霜田さん兄弟と、デートしたことになってるわよ。あなたの店に、スイートポテトを買いに来た梨音に、それがバレちゃってるのよー！ なんておしゃべりなのかしら、あなたのお母様！ 信じられない」

「ええーっ、お母さん、しゃべっちゃったのー？ お、おんなじ制服……だからかな」

「そう、筒抜けよ。同じ敷島女子の生徒といえども、言っていることと、悪いことが！」

「ごめえん……」

「……ったく！ さあ、勉強勉強！」

「あ、そういえば、拓也さんから、はっとりへ、弟がセクハラしてごめんね、って伝言があったよ」

「へっ、今更何を……」

美月の本棚をのぞき込む沙織。他人の本棚なら、誰しものが気になるどころ。そこに、朱書きの書籍を何冊か発見した。

「あ、本棚……大学受験の赤本が並んでるー」

「敷島女子の一年生なら、今頃、当然の装備だろ？」

「そんなもんですかねえー」

「あなたも買いなさい。損はしないから……」

「だってー、志望校はおろか、進路決めてないし……漠然と、店を継ぐとか……」

「あーあ、進路も決めずに恋愛ばっかしてるし……沙織は呑気でいいよなあ……」

「はっ通りは、決めてるの？」

「最低でも、室山大学には入ろうと思ってる。そこで、教育学を専攻する」

「えー！ 国公立うー？ むずかしいよー」

「あんた、それでも敷島の普通科？ さあさあ、そんなことより、わたしに昨日の授業、教えなさいよ。梨音の痴漢事件の巻き添え食って遅れたから！」

「そんなに急がなくても、明日は日曜日だよー！」

「.....それもそうね。じゃあ、カフェイン摂るか！」

「じゃあ、わたしはコーヒーで.....」

「いや、この家には、お茶っ葉しかない。緑茶だな」

こぼこぼと急須からお茶が注がれ、お茶菓子は、売り物の「香枚井餅」の訳あり品が出された。

「餅なら、ご飯と一緒に、アレルギーの心配がないだろう？ これでも沙織さんには、陰ながら、いろいろと気を遣っているのですよ、わたしは」

「ありがとう.....ね」

「じゃあ、借りて来たノート、早速、見せてくれないか！」

「わかりました、美月さん.....」



明るく日曜の、深夜一時。一通り勉強を終えた服部美月は、テレビを見ながら、奇抜なパフォーマンスのお笑い芸人たちを見て、必死で笑いをこらえていた。一方、高槻沙織は、机の上で、まだ問題と取っ組み合っていた。美月はボリュームを落とすと、デスクにかじりついている沙織の方を見て、言った。

「ねえ、沙織.....そろそろ眠くない？」

「いや、もうちょっと.....」

沙織は、カリカリと、シャープペンシルで書き、時に消しゴムで文字を消したり、口をとがらせて考え事をしたり、また書き始めたり、そうかと思えば腕組みしたり.....。

「沙織.....ぼちぼち、寝るか！」

「ねえ、はっとり、ここ、分かんない」

「どれどれー？ ああ、微分ね。だから、 x の時間軸が限りなくゼロに近づく時の y の値のことで、このページの、ここ！ 教科書のここだ。ほら、 x を徐々に小さくして行くと、その瞬間の y の速さが、核心に近づいて行ってるだろ？ これを極限值と言って.....」

「ふむ。何となく分かった気が.....でも、 x の時間の幅はゼロじゃないんだよね.....」

「そうだな、ほんの少しの幅はあるけど、幅はゼロじゃないんだな、これが」

「ふむ。奥が深い.....時間軸は限りなくゼロに近い幅だけど、ゼロではなく、限りなくゼロに近い.....ああっ、もうっ、わたし、これ意味わかんない」

「じゃあ沙織、今日は、もう寝よう。あんたいま、数学に随分、哲学混じってる。もっと言えば、ドツポにはまってる。まあ、そういうもんだ、と割り切って、公式を丸暗記することだな。じ

「やあ、また明日、考えよう。さあ、お布団出してー♪」

「はあっ、やっと解放された……」

◇ ◇ ◇

高槻沙織は、ふすま一枚隔てた向こう側の布団部屋で、着替えをしている。一方、服部美月は、勉強部屋で、着替えを済ませた。

「沙織、着替え済んだー？」

「はい、お待たせ、黄色いパジャマです……って、はっとり、和服の寝間着ー？」

「ええ、いつもそうだけど、それが何か？」

「何か、新鮮……ってというか、胸元がどことなくセクシー！」

「こら沙織！ お前、煩惱が多すぎ！ そして、変な妄想もしない！」

「は、はなちが……」

「こらあ！ 他人ん家の寝間で、わたし見つめて、鼻血吹いてんじゃない！ さっさとティッシュ丸めて鼻の穴に詰める！」

「おまたへしまひた。さあ、れんき消して、にえるよ、はっとり……」

「な、何言ってるか、わからん！ とにかく電気消せー！」

◇ ◇ ◇

美月の部屋には、和風のペンダント照明があり、麦球の常夜灯が、ぽつんと灯る。布団をふたつ敷いて、横になっている。が、沙織は慣れない種類の枕で眠れず、まだ緑茶のカフェインが効いているようで、ひとり暗闇で携帯電話をもてあそんでいる。

沙織の携帯に、マナーモードの着信があった。どうやらメールのようだ。

「ねえねえ、はっとり……」

「ふ、ふあ〜？」

「いま、携帯に、梨音たちの様子が、写メ付きで、着信来たんだけど……」

「むむう……はん？ はいー？ いま何時い？」

「ご、ごめん起こして……いま、午前二時……」

「あん？ 二時い？ 梨音のやつがどうしたってー……もうっ、そんなの、どうだって、いいじゃんかよー……わたしは……ねむ……」

「あ、寝ちゃった。しょうがないなあ、はっとりは……ん？ メール？」

『沙織へ イエーイ！ ハイテンション！ ハイテンション！ やってるかーい！ わたしら、

勉強はかどってまーす！ お夜食に、たこ焼きも作ってるぜ！ そっちはどうだーい？ 梨音』

携帯電話の中で、勉強してるんだか、ちまちまと、たこ焼きを作っているのか、本当に勉強がはかどっているんだか分からない、とにかくハイテンションな画像が映し出されていた。

(そうねえ……うっしっし……フラッシュ消して、美月のセクシーな寝姿などを、パチッと撮影して……)

『梨音へ イエーイ！ そっちは楽しそうね。こっちは……ローテンション……わたしが思わず鼻血を吹いた、セクシーな美月の寝間着姿のサービスショットはいかが？ ふっふっふ。じゃあ、こちらはもう消灯時間なのでまた明日。じゃあねー。 沙織』

またもや、メールが着信した。

『沙織へ うおおおー、セクシー！ そりゃあ鼻血も吹くよ、色っぺー！ じゃあ、わたしらは、色気より食い気っつーことで、芋・たこ・なんきんコンプリート計画、始めてまああす。桃花のかぼちゃの煮付け、いただきますまああす！ じゃねー！ 梨音』

こうして、服部家の夜は更けて行く……。



明るく朝……服部家の朝は早い。午前六時半……。ラジオから、けたたましいラジオ体操の歌が流れてきた。服部美月は、ジャージに着替えて、自室でラジオ体操の演技をしている。そうして、コンポーネントステレオから大音量で流れる、ラジオ体操第一……。

『それでは、姿勢を正して、ラジオ体操第一！』

「ほにゃっ？」

『胸を反らして大きく、背伸びの運動から！ イチニーサンシー……』

「む、むがっ？ は……はっとり……？ い……いま何時ー？」

『手を振り後ろ反りー……』

「む……むにゅむにゅ……」

「さあ、沙織も起きる！ ほらあっ！」

「え？ た……体操？ 急に言われても……」

『斜め後ろに大きくねじって、ゴーロクシチハチ……』

「みゅ……ふみゅ……ゴビー、ゲー、スー、スー」

「スースーって、おい！ まどろみに陥ってるんじゃない！ 今すぐ起きろ、沙織！」

どうやら、午前六時半に、高槻沙織を起こすことは、大変な困難を伴う作業と見た。再び制服姿に戻った美月は、机に端座して、朝の勉強を始めた。一方、無理矢理布団部屋に押し込まれた沙織は、制服を眠そうにだるそうに、もたもたと着替えているのだった。

「はっとり、朝早いんだね。おはよう……」

「おはよう沙織。そりゃもちろん、春名坂中学校の頃から、あのアホ二名を起こして引率していたので、私は毎日大変だったんだよ」

「あー、それは大変そう。わたしは、もともと香枚井中学校だから、隣の学区だねえ」

「沙織んところは、都会だからなあ……。この家はもう少しで、椎瀬町になるところだからねえ、ぎりぎり室山市春名坂上……。そこの神社ってば、もう室山県吾野郡椎瀬町大字榛名、だからな」

「田舎って大変だね」

「田舎……って、お前が言うなー！」



翌週、中間テストの結果が返ってきた。答案を返却するのはもちろん、君子豹変する、クラス担任の相川杏子先生だ。もしも悪い成績だったら、ケチョンケチョンに言われるだろう。

「は一い、答案を返します。もしも一科目でも赤点だった人は、面談、補習の上に、後日、再試験を行います」

赤点を免れたのは、美月と桃花だけで、たこ焼きを深夜に作っていた子と、数学に哲学が混じていた子は、それぞれ赤点がちらほら。

「高槻さん、数学。だめよ、数Ⅰレベルでこんなのわかんないや……。立花さん、英語が最悪ね。だめよ、これぐらいでもたついてちゃ……」

高槻沙織は、内心動揺していた。

(駅員さんの事で頭が一杯になってた挙句、お店を手伝っていて、ましてや、数学に哲学が混じていました、なんて言ったら、先生に怒られる……)

立花梨音も、内心動揺していた。

(徹夜でたこ焼き作って食べてました、英語は中学校レベルです、なんて言ったら、先生にバラバラにされる……)

――帰りのHR後。服部美月が召集をかけた。

「香枚井登下校組、集合ー！ テストどうだった？」

柏原桃花がやって来た。

「みてみてー！ 全部七十点は取れてるよー」

「おおっ！ さすがアナウンサーの子どもだなあ」

「えへっ」

立花梨音が、ぶつぶつぶつぶつ言いながらやって来た。

「英語。ほら見て」

「うわ、本当に最悪だ。お前、たこ焼き作って遊んでただけだろう」

「ず、凶星です美月さまー」

高槻沙織が、うなだれながらやって来た。

「数学。こんな感じ……」

「うわあ、すごい書き込みと、消しゴムで消した跡……何があったんだ？」

「数学に、哲学混じっちゃいました……」

「はああー。香枚井登下校組でまともなのは、わたしと桃花だけかよー」

「そういう美月は……全部九十点台！ いつ勉強してるのー？」

「普段。普段から、一步一步の積み重ねだぞ！」

「参りました」

「服部さーん、柏原さーん」

「は、はい！」

恐怖の大魔王、相川杏子先生が、美月と桃花を柔和に呼び止めた。

「あの二人、当面、部活動は禁止ね。香枚井から来ているよしみで、ここはいっちょ、あの子たちに、居残り勉強のボランティアをして欲しいの。先生役ね」

「わかりました。高槻さんには、土日もわたしの家で数学の勉強を教えていたのですが、何と言いますか、哲学的に深く考えてしまうようで、こういうものだ、と暗記して飲み込むのが苦手だと見受けられます」

「ほんとうに……あなたも苦勞が絶えないのね……柏原さんも、できれば勉強、手伝ってあげてねー、顧問の先生には、わたしから言っておくから」

「はーい」

先生が去った放課後の教室……。服部美月はゴキゲン斜めだった。

「お前らー！ お前らの胸に緊張感はあるか！」

二人「胸なら多少はありまーす」

「これだ……まだまだ緊張感が足りんつとろうが！」

「はい」

「申し訳ありません」

「まったく……家に電話かける……あ、もしもし、お母さん？ それがね、聞いてよー」

「美月先生怖いわねー」

「き、鬼畜だわー」

「……何か言ったかオイ」

「べ、べっつにー」

その後、美月の鬼畜とも言えるスパルタ教育と、桃花の懇切丁寧な教え方で、追試で赤点は免れたようだった。

■鳥取地震と私たち

朝の紅電香枚井駅、上りプラットホームに到着した、おなじみの敷女生4人組。ただ、この日はいつもと違って、電車が来ない。改札口にもホームに霜田拓也がいない。沙織、美月、梨音、桃花は、ジリジリしながら、上りの急行を待っていた。が、来ない。このままでは高校に遅刻する。そこで、電光掲示板を確認すると、沙織が指を差しながら「あーっ！」と声を上げた。

◆お客様へお知らせ◆ 今朝発生した鳥取県を中心とした地震に伴い、楠葉市の楠葉車両基地から車両が出せません。急遽、室山市の咲花台車両基地から車両を融通しておりますが、通常の30%の運転間隔になっています。なお、紅電吾野～紅電麦野原間は、線路の安全点検のため、運転を見合わせており、全線にわたって徐行運転をしており、タイヤが乱れていますことをお詫び申し上げます。

「ねえはっとり、今日は休校かなあ……」

「さああ……おい、梨音、スマホで調べろ！」

「合点承知の助！ ええと、紅電のURLは、momijino.co.jp……」

「お前は人間グーグルか！」

「確かに、梨音ちゃんがいると、グーグルいらなかもね」

「でも、地震、おっきかったからね、震度4は来たね」

「うん、そうだな、びっくりしたけど、それより鳥取の人たちが心配だなあ」

「よし！ 紅電運行情報きた！」

「ええっ！」

「ああ、こりゃダメだね、全線で各駅停車がまばらにしか来ないね、あっちの香枚井駅の運行状況も調べてみようかな」

「お願い、梨音ちゃん！」

「こういう、非常事態に役立つんだなあ、梨音は……」

「どう、沙織ちゃん、学校に電話つながる？」

「うーん、話し中か、たぶん、発着信規制かなにかだと思うよ」

「こりゃあ参ったね……川渡って、あっちの香枚井駅に行くしかなさそうだね」

「あの変態おっぱい野郎のいる駅？ あいつもいま忙しいんだろうなあ！」

「まあ、そうするしかなさそうだねえ……」

そうして、プラットホームから降りる四人組。すると、霜田拓也が、柱の陰で、こっそり手招きをしている。なんだなんだ、と群がる四人組の生徒たち。

「おはよう、みんな、家のほうは無事かい？」

「ええ、まあ」

「弟の話では、あちらの香枚井駅も、ほとんど電車が来ない。で、親父の話によれば、葱州縦貫自動車道ならどうやら無事らしいから。親父が運転するタクシーが、いまこっちに向かっているから！」

「え、どういうことですか？」

「君たちを無料で敷島市の学校まで送り迎えするらしい。4人なら乗せられなくはないからね！」

「う、嬉しいですけど、霜田さん、お父様平気なんですか？」

「ああ、親父なら、こんな非常時に、困っている学生を放っておけないって張り切ってたから。さあ、改札を出て、東口の前だ、急げ！」

「はいっ！ みんな、行こう！」

「よっしゃー！」

「ありがとう、霜田さん！」

香枚井駅東口駅前のロータリーには「予約車」と書かれた黒塗りのタクシーというか、ハイヤーが待機しており、中年のおじさん、霜田駅員の親父さんが、新聞を広げて待っていた。コンコン、とノックする沙織。

「おじさん、霜田のおじさん！ わたしです！ わたしたちです！」

「うん、事情は拓也から聞いた。高速道路は六〇キロ規制だが、まあ、止まっている電車よりマシだろう。君たちを敷島市まで連れていく。安全は保障するので、安心して乗ってくれよ」

「でも、霜田のおじさん、帰りはどうするんですか？」

「ああ、神崎市の知り合いの紅電無線タクシーがいるから大丈夫だし、何なら、オレが待っていてやってもいいぞ！」

「じゃあ、乗せてくださいね」

「ああ、今日ばかりは、無賃乗車だが、おじさんが許す！」

「助かります！」

「いいか、みんな、今から飛ばすぞ、つかまれっ！」

「うおおーい、おじさん、運転が豪快！」

「すごおおおい！」

紅電無線・霜田タクシーは、葱州道の室山南インターチェンジ（塩瀬）に入って、しばらく南へ向かった。ところが、途中からなにか、黒と白の警戒色の、赤い回転灯がついた馬力がありそうなセダンが、こちらに向かってくるのだった。

「むむっ？ 背後から室山県警！？」

「おじさん、どうしたの？ って、ええっ？」

prrrr... prrrr...

「はい、もしもし、高槻です。げっ、紫織！ え？ なんて？ 室山県警の彼氏のクルマで送迎中？ お前のタクシーの後ろをつけている？ うそ！」

「沙織ちゃん、マジで！？」

「おかしいな、おじさんのスピードメーターは、確か60キロで、速度違反はしてないよ.....オレが一体何をした.....」

「ねえ、霜田のおじさん、ハンドルを握る手が、緊張して、10時10分になってますよー」

「うん、うん、紫織、事情はわかったよ。はい、じゃあね！.....あの一、おじさん、霜田のおじさん？」

「こ、こんな時に何だい？」

「あのパトカー、高速道路を警邏中で、おじさんを追いかけているわけではないらしいので、安心して下さい。ついでに、わたしの姉の紫織と、果物屋の啓子ちゃんと、チア部の長瀬さんを敷女の学校まで乗せているらしいのです」

「なんだよ.....驚かせるなよ、まったく。そうだ、いいことに気が付いた！ むしろ、緊急走行で先導してもらうというのはどうだろう！ 沙織ちゃん、姉貴に電話しなよ！」

「えー、紫織とあまりコミュニケーションしたくないんですけど.....。そうだ、啓子ちゃんならば。もしもし、啓子ちゃん.....えー？ お巡りさんが緊急走行するには、室山県警高速道路交通警邏隊の許可が必要ですか？ サイレンは、あまりやりたくはないですか？ そこを何とかお願い、サイレン鳴らして先導してもらって！ 先輩権限よ！ 遅刻するのよ私たち！ だからどうかお願い、早く！」

「お！ なんか、後ろのパトカー、サイレン鳴らし始めたぞ！ 先導してくれんのか？ 追い抜きにかかっているぞ！」

prrrr... prrrr...

「はい、高槻です.....って紫織！？ なになに、偉大な、あんたの姉貴に感謝しなさい？ 後でわたしにひざまずきなさい？ わたしの脚をお舐め？ わたしの犬？ ふざけんじゃないわよ！

わけがわからないよ！ え？ 今から、特別に、紅電無線・霜田タクシーを先導するので、ここから一般道に降りる敷島インターチェンジまで、時速八〇キロまでは特別に出してよろしいと許可が出た！？ 本当！？ うっそ、マジ！？」

「うーん、嬉しいんだけど、ガソリン車の馬力には、正直勝てないなあ、おじさんのタクシーのエンジンは、プロパン車だからなあ.....しかも、お客さんを四人乗せてるしなあ.....」

「おじさん、いまだ、レッツゴー！」

「ゴーって、お前ら.....室山県警、融通が利くなあ.....」

「沙織に梨音！ いま、薬火野・大牧・麦野原では、地震で大変なんだからな！ ちょっとは自重しろ！ ニュースを観ていないのか？」

「ううん、観てない」

「はああ、これだっ！ まともなのは、霜田のおじさんと、わたしと、桃花だけだぞ……って、桃花！？ 桃花大丈夫？」

「服部さん、おじさんが思うに、桃花ちゃんは、あまりの出来事に、どうやら気を失っているようだ」

「はああ……やれやれ……」

鍵堀川を渡る鍵堀大橋あたりから、紅電無線・霜田タクシーは、しかるべき筋にきちんと先導されて、高速道路上において、本来あるべきスピードを回復した。



ここは、県内屈指の進学校、室山県立敷島女子高等学校。規律正しく、折り目正しき女学生が集う、他校の女子もうらやむ、お嬢様学校な、はず、だが……。今日の昇降口は、いささか事情が違っていた。

「早く着いたー！ 一番乗りだー！ いやっふー！」
手放しで喜ぶ、高槻姉妹と梨音ちゃんと、啓子ちゃん。

「すみません、ごめんなさい、本当にありがとうございました！」
ちょっとだけムツとしている隊員さんにひたすら謝る、霜田父と、服部さん。

「沙織ちゃーん、気絶しているこの子、保健室まで連れてくけど、いいー？ ねえ、本当に聞いているの？」
チア部の長瀬さんに、おんぶされている桃花ちゃん。

そこへ、駆け付ける相川杏子英語科教諭と、藤井奈緒子保健教諭。突然のパトカーとハイヤー襲来に、相川教諭は血相を変え、藤井教諭は青ざめていた。

「高槻さんたち、それに、立花さんと田辺さん、ちょっとこっちへ来なさい！」
「あなたがた！ 一体どうしたの、なんの騒ぎ？ この子、気絶してるじゃない！」

総合高校がやって来る！

■総合高校がやって来る！

ふと、服部美月は、昇降口近辺から、学校の掲示板を眺めていた。すると、さりげなく、このようにポスターが貼りだしてあった。そこに書いてある文面は、こうだった。

“室山県立敷島女子高等学校は、来年度より室山県立敷島総合高等学校になります”

「はあ？ 総合高校になるって……もしかして！」

“なお、室山県立敷島総合高等学校は、完全単位制となり、男女共学となります”

「なんだ……と……ちょっと沙織！ 沙織来ーい！ カモン沙織ィー！」

「うあー、ほわああー、おはよう、はっとり。素っ頓狂な声を出してどうしたの、朝から」

「うちの学校、来年度から男女共学になるんだよー！」

「ああ、なんだ、そっかー、良かったね……って、えええええー！」

「眠気が覚めたか」

“室山県立敷島女子高等学校と、室山県立敷島商業高等学校は、来春合併予定です”

「そっかー、少子化の影響でかー。でもさあ。なんかこう、学校の文化っつーものが違くない？

なんか、彼ら、そろばんとパソコンと簿記会計ばかりやってるイメージが」

「今後、女子制服は、敷島女子のものを踏襲するらしい。なお、男子制服は、敷島商業のものを踏襲するらしい」

「んじゃあ、私たち、最後の真っ当な、敷女生だねえ……」

別の紙には、こう書いてあった。

“敷島女子高等学校英邁会（卒業生OG会）学校合併反対の署名をお願いしています”

「そりゃー、OGのお姉様方が黙ってないでしょ！」

「仮に敷島商業の生徒の半分が男子として、校内の四分の一が男子生徒になるわけで」

「ちょっと嫌ねえ」

「相当嫌だよ。何のために女子高選んだかわかんなくなる」

そこへ、遅れてきた立花梨音と柏原桃花がやって来た。

「おっす諸君、おはようー」

「コラ、誰を捕まえて諸君だとー、えー、オイ！」

「いでででで！ 顔をつねるのだけはやめー！」

「で、桃花、話なんだが……」

「これだよ、美月ちゃん。掲示板の、あれ」

「そうそう。男子と共学になるかも、というお知らせだ。まだ本決まりではなさそうなんだがな」

「なんとか防ぐ方法は……ないの？」

「あー、OG会がね、いま、あっちで署名集めていて、敷島商業と合併反対、という内容で、県議会や県教委に請願や陳情を行うらしい……」

「あ……室山工業高校もやってるらしいよ、反対署名」

「梨音、その情報、どこで？」

「知らなかったのか？ わたしのお父さんや、霜田さんたち、みんな室山工業高校卒業だよ。ちなみに、わたしのお父さんは電気科、霜田さん兄弟は、機械科かな。ほら、夏の高校野球で、うちのチア部やブラスバンド部が友情応援している関係で……」

「なるほど」

「貴重な情報、どうもありがとう、さっきは済まなかった」

「じゃあ、沙織に美月も一緒に、署名しに行こうぜー」

「よっしゃー！」

室山県立敷島女子高等学校の玄関前には、「合併反対！」のプラカードと共に、記帳台が設けられた。生徒たちが群がって、反対署名をしている。OGや教職員組合の人たちが、メガホンで呼びかけている。

「えー、皆さん、今回の合併騒動は、我が校存亡の危機です。何としてでも室山県議会で反対の議決が得られるよう、努力いたしましょう……」

署名を終えた、高槻沙織、服部美月、立花梨音、柏原桃花の四名は、昇降口に向かって歩き始めた。

「なーんか、大変だね」

「朝から、メガホンって」

「つか、敷島商業と一緒にされると、何かしゃくだなあ」

「テレビ局も来てたねー」

「室山県立敷島総合高校かあ……男子が入って来るのねー」

「ねえねえ美月ちゃん、商業は男子の人数少ないんですか？」

「まあ、若干名だけだな」

「ううう、気色悪い」

「水泳の授業を想像するだに気色悪い！」

「や、やめろ梨音！ 卑猥な想像もするな！」

◇ ◇ ◇

朝のHRの時間。なにやら、紙の束を抱えて、相川杏子先生がやってきた。どうやら、例の反対署名の用紙らしい。

「おはようございます。今日は、大事なお知らせがあります。一部のクラスメイトの皆さんには、今朝、校舎の外でもう既に反対署名を書かれた方もいるかと思いますが、敷島女子高等学校は、敷島商業高等学校と合併の上、男女共学の敷島総合高等学校になる予定です。九十年続いた敷島女子高等学校の伝統を守るために、父兄の皆さんや、友人、知人の皆さんに、是非署名に協力していただきたく、ここに用紙を持って来ました。これを集計して、県議会や、県教委に届けますので、用紙を紛失しないよう、気をつけて持って帰ってください。わたしも敷女のOGなので、何が何でも合併は反対です。前の席の人から順番に用紙を回しますので、一人五部ずつ持ち帰ってください。用紙のコピーは自由です。なお、提出期限は、三週間後の金曜日です」

――下校時、夕暮れ時の葱北本線、敷島駅前で。

同じく香枚井に住む、チア部の先輩、長瀬千秋が、高槻沙織の電話に連絡を入れた。なんでも、署名をする男子や近隣住民、それに室山工業の保護者とOBが後を絶たず、人手が足りないそう。すぐに来てくれとの話だった。

「今日は、チア部やブラスバンド部の様子を見に行こう。まだ署名活動しているみたいだから、どうする？」

「そうだな、室山工業高校は、葱州長坂（ぎしゅうながさか）だから、じゃあ、今日はこっちの敷島駅だね」

「さて、チア部はチア部として、わたしたちは、誰に署名を渡すかだが……梨音、決めた？」

「そうだなあ、電気工事士の組合とか。ナサパニックの関係者とか、電力会社とか」

「桃花は……室山放送……かなあ……」

「放送局！ それは強力ね！」

「わたしはどうするかなー。室山県和菓子業同業組合とか……」

「それも組織力としてはすごいと思う……」

「沙織には、とっておきの人がいるじゃないか。九十歳の元祖パティシエ！」

「んー、全国洋菓子同業組合なら、何とかなるんじゃないかなあ」

「全国！ でも、何だかあのペース見てると、男女共学に賛成しそーだしなー」
「それはお爺さんに限っては、ないない。男女、席を同じうせず！ で育ったから」
「これまた、随分お堅い教育だなあー」
「あ、もうじき電車来るよー、乗ろう、乗ろう」

『三番線の電車は、快速、大牧行きが、六両で参ります。停車駅は、岩崎、室山、志賀原、葱州長坂、香枚井、椎瀬、新芝草、吾野、楠葉、麦野原以降の各駅に停まります』

◇ ◇ ◇

一方、こちらは、県立敷島女子高等学校に応援してもらっている、葱州長坂駅近くの、室山県立室山工業高等学校。伝統的に、高校野球のチアガール、ブラスバンド部の応援をしてもらっている関係上、野球のライバル校、室山県立敷島商業高等学校との合併には、誰もが反対している様子だった。敷島の乙女たち数十名が記帳台に工業高校生を迎え、そして両校の先生方は、こちらにもメガホンを持って、署名への協力を呼びかけているところだった。また、チア服に着替えた数名は、ポンポンを手に、いままさにチアリーディングのパフォーマンスを行っているところだった。署名担当の、長瀬千秋先輩は、制服で、臨時の記帳所にいた。

「署名お願いしまーす……って、おお、沙織ちゃんたちか。来てくれてありがとう」
「いえいえ、いつもお世話になってますからー」
「いいえー、いつもお世話してますから〜」

バシッ！

「梨音、うるっさい！」
「いてーなー、沙織！」
「でも、梨音ちゃんは、署名をパパが運搬してくれるんだよね、ボランティアで」
「もちろんです！」
「助かるよ、心強いよ、梨音ちゃん」
「ありがとうございます、先輩！」

そうして、敷島女子高等学校、家庭科部四名を加え、チアリーディング部、ブラスバンド部、そして室山工業高等学校の数少ない女子三名とともに、「室山工業高等学校の生徒の皆さん、署名お願いしまーす」というかけ声をかけていたのだった。現場は突然の女子襲来に色めき立った。

「おいおい、何の騒ぎだ」
「なんでも、来年から野球部のチアリーディングやブラバンが、なくなるかも知れないってー

んで、反対署名集めてるらしいぞ」

「聞いたところによると、なんでも敷島商業と合併するらしい」

「これは反対しねえとな。おい、お前らも来ーい！」

「なに？ 敷島の学校が総合高校になると、応援に来られない、だどー？」

まるで、神社仏閣で、お守り売り場の巫女さんに集まる参拝者のような様子で、約一千名の男子が記帳を済ませ、謄写ファックス刷りの署名簿を受け取るのだった。

「は一い、順番に並んでくださいね！ あと、追加の署名簿は、後ほど工業高校の先生が回収しますので、きちんと持って帰ってくださいね」

◇ ◇ ◇

――三週間後のある朝。

一台のワンボックスカーが、室山県立敷島女子高等学校の正門に到着した。たちばなデンキのクルマだ。玄関前で待っていたのは、相川杏子先生ら、教職員と、高槻沙織、服部美月、柏原桃花だった。……なぜワンボックスカーなのか。それは、服部宝珠庵、たちばなデンキ、高槻洋菓堂、それに民放・室山放送による、大量の反対署名を載せているからだ。段ボール箱にして、数個はあるだろうか。

クルマからは、立花梨音と、その父、功武が降りて来た。

「どうも、梨音の父です。ご無沙汰しています」

「杏子先生、おはようございます！ 高速道突っ走って、署名、持って来たよー！」

「立花さん、おはよう。まあ、こんなに！」

「美月い、段ボールが重くて、わたし、腰が痛くなったよー」

「お前はお婆さんか！」

「いいから手伝ってくれよん、重いんだから。ささ、みんなで荷物おろしてー」

「えー、か弱き女子に向かって！」

「念のため、わたしも、一応女子なんですけど……沙織さん……」

立花功武が、杏子先生に向き直って挨拶した。

「これが、私共の総意です。一箱に千五百枚は入っていますので、十名書いたとして、六箱で、約九万名分の署名が入っています。どうぞ、ご査収願います」

「まあ、そんなに……」

「はい、高槻さん家の洋菓子組合、服部さん家の和菓子組合、柏原さん家の室山放送、霜田さん家の鉄道会社と室山県タクシー業同業組合、室山県立室山工業高等学校、それから、私どもの電気事業関係の皆さん、それぞれ共学に反対してくださいました」

「校長、お聞きになりましたか？ 九万名ですよ！ この子たちの人脈ってなんて素晴らしいのかしら……」

「校長の松井です。この度は何と御礼申し上げて良いかわかりません。誠に恐縮で、ご尽力に感謝申し上げます」

「いえいえ、そんなにかしこまれても……」

「有効に活用させていただきます。学校長表彰をしたいぐらいですよ、ええ」

「今後とも末永く、この子たちをよろしくお願い申し上げます」

「わかりました、この度はありがとうございます」

「では、わたくしは電気工事の仕事がありますので、これで。こら梨音！ ちゃんと勉強しろよ！ もし、なまけてたら承知しねえからな！ では、わたくしはこれで」

「親父い……」

かくして、全校生徒の尽力と、彼女たちの父兄の尽力によって、室山県立敷島総合高等学校の設立は見送られることになった。

◇ ◇ ◇

「あーあ、反対しなきゃ良かったかなあって」

「なんだよ、桃花、今更、残念そうに」

「ううん、共学だったら、また違った楽しみがあったらうな、ってお話」

「なるほど。じゃあ、女子高は彼氏を他校の生徒の中から探さないといけないからねー」

「うん……ちょっと寂しい気も……」

「まあ、彼氏キープ中の例外は置いといて」

「わたし？ まだまだ年の差がありすぎるよー」

「……と、言いつつ、霜田さんにメール打ってんじゃねーよ！」

「そうだそうだ！」

「この携帯……壊す！」

美月が、沙織の携帯を取り上げたかと思うと、曲げてはいけない方向に力尽くで曲げて、ミシッ、ベキッ……と嫌な音がした。

「ああっ、霜田さああん！」

「私たちの前で、恋愛自慢は御法度。携帯を打ち首にしてくれたわ！」

「は、はっとりー！」

「ざまあ見ろ！」

「梨音ちゃんまで……」

「自業自得ね」

「桃花ちゃん、そんな言い方は……」

「私たちの掟だかな一、抜け駆きは許さんぞ！」

「とほほ……」

こうして、ひとりだけ彼氏キープ中の高槻沙織だけが、その憂き目に遭ったのだった……。

水泳大会がやって来る！

■水泳大会がやって来る！

夏休み前のお楽しみは、屋内プールでの水泳の授業だ。しかし、遊びに行くのと違って、授業なので、年がら年中、きゃいきゃい出来ない訳で、泳法の指導から、リレー競技までである。敷島女子オリジナルというよりは、黒色の競泳用水着を学校から指定されている。三年生は青色のライン、二年生は赤色のライン、一年生は緑色のラインが側面に入っている。

保健体育の指導は、高野 寛先生（男性）だ。まだ三十歳代前半といったところ。ソフトボール部の顧問をしている。しかし、脱ぐとすごい。もっこりしているのだ……。夏になれば、ぴちぴちの競泳用水着を履くから余計エロスを感じるらしく、生徒の間では「敷島女子のもっこり野郎」とあだ名されているのは、公然の秘密。

「お前ら、集合ー！ お遊びはこれまでだ、プールから上がれー！」

「はーい」

二十メートル離れた場所で、美月と梨音がつぶやいた。

「もっこりが何か叫んでる」

「もっこり、きゃはー」

二十メートル離れた場所から、高野先生が、美月たちにめがけて叫んだ。

「なんだ服部、立花、何か言ったかー？」

美月と梨音は、ノンノン、といった感じで、首を振り、手を振るのだった。

（ちきしょ、あの地獄耳めが！）

（覚えてやがれ！）

「えー、クラス対抗リレーの代表選手を選ぶ。これから全員、二十五メートルを往復して、五十メートル自由形のタイムを計るので、各々、好きな泳法で行って帰って来い。出席番号順に、五名ずつ、八組に分かれてタイムを計る。さあ、ここへ出席番号順に並んで、控えの生徒は、自分の番が来るまでプールサイドで待機」

第二組に、柏原桃花が現れた。

「うわー、ももっち、ふぁいとー！」

友達の応援に、少し照れながら、ぎこちない仕草で台の上に上がる。

「えへへ」

「位置について、用意……」 パーン！

柏原桃花は、そんなに運動が出来る訳ではなかったが、水泳は別だった。ただし、バタ足、平泳ぎしか出来なかったが……。

「柏原桃花、五十メートル、二分十五秒〇三」

「偉いよ、よく頑張ったよ、桃花ちゃん！」

「ありがとう、沙織ちゃん！」

「ねえねえ、梨音！」

「なんだよ、沙織……」

「今日はあなたと競争よ！ 絶対に負けないんだから、わたし！」

「なにおう！ こっちには『超絶バサ口』って泳法があるんだからね！」

「超絶とは？」

「まあ、見ててごらんささい、なんてったって『超絶バサ口』なんだから」

「超絶って……」

第四組に、高槻沙織と、立花梨音が現れた。

「きゃあああー、高槻さん、ファイト！」

「根性見せたれ、立花ー！」

プールサイドで待機している、服部美月と、柏原桃花。

「梨音のことだから、またあのパターンかもな……」

「あのパターン？」

「去年、やらかした、あのパターンだよ」

「ああ、あれ！」

「位置について、用意……」 パーン！

高槻沙織はクロールで息苦しそうにしていたが、立花梨音が、いつまで経っても浮上して来ない。へびのように、身体をくねくねさせていて、ちっとも浮上して来ないのだ。高槻沙織は焦った

。（おかしい、梨音ちゃん、まだバサ口のまま……くうっ、このペースだと遅れる……二十五のターンで……）

次の瞬間、梨音は、プールのコンクリート製の壁に頭から正面衝突をして、そのまま動かなくなったかと思うと、肺の中の空気をゴボゴボと吐き出して、やがて、挽き潰された蛙のようなポーズになって、がに股といった、はしたない格好で、ぷかあんと浮かんだ。

「立花梨音、失格！ 高槻沙織、三十六秒四〇！」

「おおっ、暫定一位か……やるなあ、沙織……」

「ねえ、はっとり、梨音は？」

「あっちの方で、引き揚げられたみたい……去年と同じパターンでね」

「超絶バサ口、真似しない方がいいみたい……」

第六組に、服部美月が現れた。

「よし！ 自己ベスト三十五秒台に乗せる！」

「きゃあああー、服部さああん！」

どうやら、服部美月は、女子にも人気があるようだった。

「位置について、用意……」パアーン！

服部美月は、クロールで水を切って泳いでいる。動きに無駄がない。二十五メートルのターンをして、壁を蹴って勢いに乗った美月のタイムは……。

「服部美月、三十五秒五三！」

「おおー！ すごい……」

「ただいまー」

「服部さん、すごいよ。何、スイミングかなんかやってたの？」

「ま、まあね、小さい頃、ちょっと……」

「はっとり！ 暫定一位だよ！」

「ありがと。でも問題は決勝戦！ 絶対に負けないわ！ 今までのはまだ手加減していたのよ！」

」

「むむっ、わたしだって負けませんからね！」

「沙織一、だからって、ムキにならないならない……」



二年三組、五〇メートル決勝。第一のレーンから、第五のレーンまで選手が並ぶ。第二のコースに服部美月、第四のコースに高槻沙織がいる。

「位置について、用意……」パーン！

一斉にプールに飛び込み、最初に抜きこんでたのは美月だった。しかし、二十五メートルのターンで、ちょっと出遅れた。代わりに抜きこんでたのが、沙織だった。熾烈なデッドヒートは、さながら、ベルリンオリンピックの前畑選手とゲネンゲル選手を彷彿とさせるものがあった。もしも、ここに河西三省アナウンサーがいたら「高槻嬢、現在第二位、ガンバレ、ガンバレ、高槻ガンバレ、服部嬢と並んでおります。まるで火の出るやうな大接戦、わずかに一掻き高槻リード、高槻ガンバレ、ガンバレガンバレ！」と連呼していたことでしょう。で、結果は……？

「服部美月、五〇秒五五……高槻沙織、五〇秒二三、よって、クラス代表は、高槻沙織に決定だ！」

服部美月は、ゼイゼイ言いながら、ゴールで沙織の方向を向き、ちっ、と舌打ちをしたが、やがて、レーンを越えて来る沙織を見ると、沙織も息が切れていた。

「え、わたし、勝ったの？ はっとりー」

「そうさ。おめでとう。ちくしょ、寸でのところで負けた……多分、あそこのターンで失敗した……」

「そんなことないよ、だって、コンマ何秒差でしょ？」

「わたしはそれが悔しいけど……とにかく、おめでとう！」

と、プールの中でデジタルのスコア表示を見ながら、二人は堅い握手をした。

衣替えがやって来る！

■衣替えがやって来る！

衣替えと言っても、敷女の場合は、単にセーラーと、スカートの上下が、少し生地が薄めの夏用になるだけ。他に、先輩後輩を区別するために存在するのが、徽章の七宝焼きの色表示だ。胸元の徽章を頼りに、先輩か後輩かを判断する。また、クラス番号の徽章は、普通科は、Generalの「G」が、情報処理科は、Informationの「I」が、家政科は、Homeの「H」という具合に付いている。沙織や美月たちは、「敷女・普通科G・何年何組」であり、先輩と色違いになるわけだ。徽章を取り付けているフェルトの生地が、三学年が青、二学年は赤、沙織たち一学年は緑、という色分けになる。

以前、実施されたのが、スカーフをキャビンアテンダント風アレンジして、首に巻いて、横に流す案だ。但し、これも本格採用されなかった。なぜなら、クラスメイト同士引っ張り合いこして、首が絞まってしまう事故があったため、これも見合わされた。

後は、上履きのゴムの色と、体操着の色……ぐらいだ。先輩後輩を見極めるのは、慣れないうちには至難の業だ。やがて、慣れて来ると、スカーフと徽章だけで簡単に判別できるようになる。

放課後、家庭科室で――

「衣替えしたねえー」

「これで、梨音がこれ以上痴女になる可能性がなくなった」

「やれやれだねえー」

「ところで梨音、どこ行ったのかな」

「気にせず、タルトを作ろう。待ってたら時間なくなっちゃうよ！」

ガラリと扉が開いて、立花梨音がやって来た。見ると、スカートの丈が短い。

「諸君、おまたせー」

「おそようー、って言うか、何ですと！」

「夏用のスカートを？」

「へへーん、折って来ちゃった」

「またー？」

「誰に対する、どんなセックスアピールなんだよ……」

「先生ー、立花さんがスカート折って来ましたー」

「まあ、何ですって？ 懲りないわねー！」

「美月い、先生にチクるなんてそんな……」

やがて、被服室で、貸し出された短パン姿になった梨音は、アイロンで折りじわを、ちまちまと直すのだった。先生が沙織たちに言った。

「あの子、普通科よりも、家政科に進んだ方がよさそうねえ」

「そう思います」

「どう見ても、普通科向きではないですし……」

「でも、コンピュータの授業だけは高得点ですし……」

「ならば、情報処理科だけど」

「でも、梨音は受かんなかったし……」

「あのカスタマイズのくせは何とかして欲しい」

一同「うーむ……」

しばらくすると、立花梨音が、被服室から出て来た。

「諸君、お待たせー」

「お前には学習能力っつーもんがないのか！」

「本気で心配させやがって、こんにゃろ、こんにゃろ！」

「もう、わたしは慣れた」

「先生も、この展開には、もう飽きました」

「み、みんなああああ！」

「あー、はいはい、あんたも支度して、スイーツ作るの手伝って」

「わかりました皆さん……」

昨夜から冷蔵庫で寝かせたタルト生地を伸ばして、型に敷き込む。生地に重石を乗せ、から焼きしている間に、アーモンドクリームを作り、から焼きが終わったら、重石を取り、アーモンドクリームを生地に入れる。そうして、しっかりオーブンで焼いてから、取り出す。適度に冷めたら、全体にラズベリージャムを塗り、ラズベリーを敷き詰めれば完成だ。

「できたあ！」

「さすがは沙織、本職だな」

「さて、問題は、どうやって取り分けるか、なんだけど」

「トルテカッターがあるから、八等分が、ちょうどいいんじゃない」

「じゃあ、そうしよう」

「今回は、チーズ入ってないから、わたしは安心した」

「じゃあ、ここで、パルメザンチーズの粉末をまぶして……」

「うおおおい！ それじゃあキッシュになるだろう！ チーズは苦手だ！」

「へへん、冗談だよ～ん」

「は一、お前の冗談はシャレに聞こえんから、心臓に悪い……」

「冗談か真面目か、分からない時があるから、梨音ちゃんって、ある意味怖いねー」

「あいつは油断ならん女だ……」

「じゃ、じゃあ、みんなでいただきますしょうか！」

一同「いただきます」

「あ、忘れてた！ これには、紅茶が合いそうだな、桃花、お茶入れてくれる？」

「うん、持ってくる！」

「わたしも手伝うよ、桃花ちゃん」

「ごめんね沙織ちゃん」

「いいって、いいって！」

「ポットにカップとソーサーにお砂糖にミルク……一人じゃ持てないでしょ？」

「確かに……」

お茶の準備が出来たところで、改めて……

一同「いただきますーす」

「おい、沙織、いただきます、したか？」

「いただきます！」

「よし」

実は、今日は多い日で重い日で痛い日なのだ

■実は、今日は多い日で重い日で痛い日なのだ

六月……春と夏の間を交互に行き交う季節。お陽さまは、照ったり曇ったり……。もうじき衣替えの季節だというのに、ぐずつく空模様に、体調を崩す生徒が後を絶たない。中には、女性特有の症状で、鎮痛剤をもらいに來る生徒もいる。ここは、県立敷島女子高等学校の、保健室。ただでさえ頭の痛いシーズンだ。

「おはようございますー」

「あら、いらっしゃい。立花さんじゃないの、まあ珍しい」

「藤井先生、わたし、今日、ちょっと、あれで……」

「まあ、つらそうね。顔が真っ青じゃない……」

「痛み止めをください、少し横になりたいっす」

「はい、どうぞ、ゆっくりして行ってね」

「そ、そもゆっくりしてらんないんですよ先生」

「まあ、何で？」

「授業に出ずに、家庭科部だけ出ていると、なんか、サボってるみたいで」

保健担当教諭、藤井奈緒子は、立花梨音を寝かしつけると、こう言った。

「お友達や担任の先生に言うておくから、ちゃんと帰れるようになるまで、ゆっくり横になりなさい。何なら、眠ったっていいわよ。さっき見たら、足許ふらふらじゃない。代わりに、鉄分ドリンク買ってくるから、三百円出しなさい」

「はあい……」

◇ ◇ ◇

一方、こちらは教室――

「ええ、そうなの、相川先生……」

「病気ならば、仕方がないですわ……藤井先生」

「じゃあ、よろしくお伝えください」

「了解です。おーい、そこの、香枚井登下校組！」

三人「は、はいっ！」

「実はね、立花さんが、とつてもつらい日で、多くて、重くて、痛い。おまけに、顔面蒼白で。帰るまで保健室ね」

「本当ですか？ 梨音が生理痛で顔面蒼白？」

「珍しいこともあるもんだ」

「そりゃあ、あれでも一応、女の子なんだから、あってもおかしくは……」

「梨音の世話ですか？」

「というわけでみんな、お昼ご飯と、帰りはよろしくね」

「わかりましたー」

「で、余りにも様子がおかしい場合、ご両親に連絡するから、私に教えて頂戴ね」

「はい」

◇ ◇ ◇

――昼休み

「それにしても、梨音に、生理が酷い時があるとか、生理で調子悪い時があるなんて、知らなかったよ」

「わたしも、近所に住んでいて、よく遊ぶけど、おくびにも出さなかった」

「我慢しきれなくなったかー、ついに」

「とりあえず、購買では、全員パンにしよう。で、梨音にも買って帰る。牛乳や鉄分飲料も忘れずに」

「了解！」

「どう？ 今日はもう歩いて帰れそう？」

「うーん、放課後になんなきゃわかんない……」

「最悪の場合は、紅電タクシーね！」

「沙織！ なんだそのタクシーチケットの束は！」

「へへーん、霜田さんにもらっておいたものでーす」

「じゃあ、タクシーチケットか……」

「わ、悪いよ、沙織ちゃん……」

「うわー、倒れそう、起き上がっちゃダメ！」

◇ ◇ ◇

「やはり、早退させるべきですかね、藤井先生……」

「そう思います、今からでも、お医者さんに連絡取ってみようかと。なにせ、デリケートな問題なので……」

ヒールのかかとを鳴らし、相川先生が保健室に入って来た。

「立花さん……梨音ちゃんはどこー？」

「相川先生、こっちですー」

「あ、みんな揃っていたのね。この子、今から婦人科のお医者様にかけるので、今から帰宅させます」

「先生、わたし、紅電のタクシーチケット持ってるんですが」

「あら、高槻さん、使っているの？」

「もらいものですし、後で返してもらえればいいかなって」

「悪いわね、ごめんなさい……さ、立花さん、起きて」

「は、はい……」

「立花さん、足腰立たないじゃない！ よくここまで放っておいたわねー」

「す、すびばしえん……」

昇降口には既に、紅電無線タクシーが停まっていた。相川先生と、高槻沙織が、肩を貸してやっ
てはいるが、梨音は、なかなか思うように歩けない。

「済みませーん、この子を、関津駅前の、室山県立敷島病院婦人科まで連れて行ってください。

はい。タクシーチケットはここにありますので……お願いしますね、運転手さん」

「しかしまあ……遠いねえ……関津の県立病院だろ？ 電車一駅も無理なのかい？」

「そうなんです」

「じゃあ、お預かりします」

「お願いします！」

◇ ◇ ◇

六限目も終わり、みんな一様に溜息をついている、二年三組の教室。

「じゃあ、部活の人も程々にして、何も無い人は、寄り道せずに帰宅してください」

「起立、礼、解散！」

まるで、下校のタイミングを見計らったように、携帯にメールが着信した。

「あ、携帯だ……誰からだろう……梨音？」

「わたしのところにも……ねえ、先生のところにもメール来てませんか？」

「あ、何か届いているみたいだけど……」

『皆さんへ 立花です。お昼にご迷惑をおかけしました。さて、病院で診てもらったところ、何の異状もなく、思い起こせば、ただの食べ過ぎとわかり、重ね重ね申し訳ないです。昨日の夜、地元春奈坂の、隼人そば屋さんでの、ざるそば大食い大会に出た所為でした。実は、大ざるで、

十五杯食べたので、申し開きができません。ごめんなさい、本当にごめんなさい 梨音』

「まあ、何ですって？ 食べ過ぎー？」

「ただの食べ過ぎ……腹痛……ぷぷっ！」

「梨音……許さん！ どうもおかしいと思ったんだ！」

「しかし、顔面蒼白、足腰立たなくなるまで食べるってどれだけ……」

「お邪魔します……立花先輩が、どうかしたんですか？」

「あ、啓子ちゃん……実はね、梨音が、昨日、大食い大会に出て、食べ過ぎたために、保健室で寝ていたってこと……」

「ぷっ……た、食べ過ぎってどれだけ！」

「田辺さん、ああいう先輩見習っちゃダメよ。大食い大会で大ざる十五杯」

「ぷっ、大ざる、十五杯って、あははははー」

「笑い事じゃないよー」

「マジ心配したのにー」

「ここは、教育的な指導が必要ね！ 今に見ていらっしゃい！」

「私たち、香枚井に戻りますが、何か梨音に伝えておくことはありますか？」

「そうねえ、香枚井通学組のみんなから、あたしが本当に、心底カンカンに怒っていた旨、伝言してもらえるかしら？」

「わ、わかりました、杏子先生！」

「先生の、その微笑みが怖い……」

◇ ◇ ◇

――翌朝

「おはよー」

「あ、おはよう」

ここは、県内屈指の進学校、室山県立敷島女子高等学校。だが、その職員室内では、朝っぱらから、生徒を怒鳴り散らしている相川杏子教諭と、怒鳴り散らされている生徒、立花梨音がいた。

「なんですって？ 腹痛？ 食べ過ぎー？ あなたねえ、もう三～四年で大人になるのよ！ 自覚を持ちなさい、自覚を。なにになにー、うちの生徒が、前日、ざるそばをたらふく食べて、授業に出られないくらいお腹を壊し、生理痛と間違えられた挙げ句に、早退しました……って、どのツラ下げて上司に報告するのよー！」

「す、済みません……」

「あたしのことはいいわよ、この際。でも、本気で心配してくれた仲間に、申し訳ないでしょ、今から行って謝って来なさい！」

「失礼しましたー」

「……ったく、しょうがないんだから！」

◇ ◇ ◇

一年三組の教室。いつもの仲間が集う中に、梨音が泣きながら入って行った。

「ごめえええん、みんな、昨日は本当に心配掛けて……ごめんよー。沙織、これ、タクシーチケット返すから、受け取ってー」

「え、ええ。どうしたの、急に。ひどく取り乱したりして……」

「あのその……反省しています……」

「あんまり無茶ばかりやってると、そのうち、友達なくすよー」

「昨日は本当に心配したよ」

「ご、ごめんなさい」

窓辺の陽だまりの中、クラスメイトにひたすら詫びを入れる、立花梨音でした。

家庭科部、スイーツ食べ歩き！

■家庭科部、スイーツ食べ歩き

家庭科室に集まった、全学年の生徒。三年生はいつも受験勉強なので、今回のスイーツ食べ歩きには、息抜きのために参加をするそうだ。そこで、顧問の柴島祥恵先生の発案とは……。

「えー、七月最初の行事は、このスケジュールに従って、一、二、三年生全員でお店めぐりをやります。参加費はかかった実費のみです。皆の実家でご商売をされているお店を巡ってスイーツを堪能しようというわけです。出発地は、敷島駅から葱北本線を北上して新芝草駅……そこで乗り換えて、紅電紅葉野駅から。そこから紅電沿線に海浜神崎まで南下します。わかりましたかー」

「はい」

「実費は痛いよな……」

「それぞれの駅近くにある部員の実家のスイーツショップなどに立ち寄ります。なお、これは、学校の行事なので、集合は制服でお願いします」



「……そっか、家にも先輩方が来るのか」

「どしたの、はっとり？」

「うちが出せるスイーツって、餅か、水ようかんなんだよね……沙織んちは？」

「そうだねえ……うちはバターロールクッキーぐらいかな。後は生ものしかないよ」

「いやはや、ハイカラで、お洒落だなあ……チーズだけは勘弁な」

「はっとりんちだって、お餅美味しそう！」

「うちは、ナサパニックのヘルシーオーブンがあるぞ」

「お前んちは電器屋だろ？ 論外だ」

「ご飯をパンにできる機械だってあるぞー！」

「それ、いいかも！」

「いいなあ、みんなお店持ってて……」

「そだねー。桃花んちはラジオ放送局だもんねー」

「『あすの料理』の料理本販売とか！」

「お父さんに訊いてみる」

「先輩！」

「やあ、田辺啓子ちゃんじゃないか。どした？」

「私も、香枚井地区なんです。フルーツショップやってます。シエスタ香枚井で、田辺青果を……」

「忘れるところだった、ごめんごめん」

「スイカか、プリンスメロンぐらいなら、何とかなるかと……」

「スイカにメロン！ いいねえ！」

「持つべきものは、後輩だなあ」

「香枚井登下校組は決まりましたかー」

「はい」



ある日。県立敷島女子高等学校、家庭科部は、スイーツ食べ歩きを開始していた。部活の顧問の先生が、皆を誘導する。まずは、新芝草駅前のベーカリーで待ち合わせ、ラスクを食べる。次に、新芝草駅に徒歩十分で隣接する、紅電紅葉野駅前の繁華街にある芋羊羹のお店で、芋羊羹とお茶をご馳走になる。

そして各駅停車に乗り、紅電・榛名天神駅前の服部宝珠庵に着いた一行。今度は特製水羊羹だ。細い竹筒に入っていて、ちっちゃな栓を抜いて、片側から吸い込むと、きゅーっ、ぽんっと水羊羹が口に入っていく仕組みだ。

「服部さん、これ、美味しい！」

「買って帰ろうかしら……」

「くせになりそう……」

「はい、喜んでいただければ光栄です、先輩」

「このお餅も最高です！」

「寛永七年創業のお店だからね、歴史が違うんだよー」

「さすがは江戸時代から続く味ね、感心したわ」

服部宝珠庵の、服部美月は得意気だった。そこへ家庭科部、顧問の柴島祥恵先生がやって来て、みんなに諭した。

「いいですか、まだ三軒目ですよー！ 甘い物食べ過ぎてデブになんないようにね、適度なところでお土産にして持って帰りなさい」

「はい」

「次は、紅電香枚井駅ですよー！」

「ごちそうさまー」

「さて、行くか」

紅葉野電鉄の榛名天神駅に向かう、ぞろぞろと連なって歩く女子の集団は圧巻だった。普段は制

服で団体行動と言えば、修学旅行程度だからだ。電車に乗り、榛名天神駅から一駅、室山市の北の玄関口、紅電香枚井駅に着いた。

「お父さん、いつもと違って上機嫌ね……」

「久々に、女子高生の大群を見たからじゃないのー？」

「梨音、うるっさい！」

普段滅多に他人をぶたない沙織が、怒って梨音の頭をはたいた。

バシッ！

「おわ、痛たあああー、沙織が怒ったー、珍しいー」

「これ無料じゃないんだからねっ！ 定価で一袋、六百円するんだからねっ！」

「おおー、出血大サービス！ ……って、ぶたれたわたしが出血しそう」

「じゃあ、これは帰ってからの楽しみだねー、梨音ちゃん」

「ち、チーズケーキじゃなくてほんとうに良かった……」

「じゃあ、はっとり、チーズケーキひとつ持って帰る？」

「やめろ、いらん！」

シエスタ香枚井を後にした一行は、その後、海浜神崎までの部員の店を訪ね、あらゆる種類のスイーツを制覇して、もう、甘いゲップしか出ない。紅電敷島駅近くの、県立敷島女子高等学校、家庭科室に戻った一同……。

「うえー、疲れたー、だりいー、あちいー、胃薬が欲しいー」

「だれるな、梨音！」

「はっとりんちの水ようかん、あずき嫌いなわたしでも食べられた……」

「あ、そっか、それは良かったな……」

顧問の先生が、ドサッ、ドサッと本を用意した。「あすの料理」のスイーツ特集の本だ。ちょうど四十冊あって、ひもで束ねてある。

「えー、これは、一年の柏原さんのお父さんが、ポケットマネーで勤務先の放送局から買って来て下さったスイーツ本です。『あすの料理』という本です。皆さん、これを見て、更に腕に磨きをかけてください。柏原さんに拍手！」

パチパチパチ……。

「柏原さんのお父さん、室山放送だって？」

「はい、そうです、ラジオでニュースとか読んでます」

「知らなかったあー」

「はい、拍手されると、ちょっと照れますねー」

顧問の先生が言った。

「それでは、暗くならないうちに下校してください。夜道には、不審者がいないとも限らないので、気をつけて帰ってね」

◇ ◇ ◇

さて、下校時、四人連なって歩く香枚井登下校組。紙製のショッピングバッグには、あらゆる種類のスイーツや果物や煎餅、餅や書籍に至るまで揃っていた。みんな、少し重そうにしている。そこへ、背後から呼び止める声がした。

「先輩ー！」

「お、何だ何だ？」

「あれ、田辺啓子ちゃんじゃない、どうしたの？」

「一緒に帰りましょう、私も混ぜてください」

「あ、ああ、いいとも。聞かれて恥ずかしいことはないもんな」

「大歓迎だよー」

「でも、たまには猥談も少しは混じるけどねー」

「梨音は黙っちゃれ！」

バシッ！

「痛い……わたしばっかり……もしかして、ぶたれやすいアタマのカタチ？」

「違う！　ぶたれるようなことばかり言うからだっ！」

「ところで啓子ちゃんって、刈羽台（かりばねだい）だったよね、お家が」

「はい！　急行に乗られている皆さんとは、咲花台（さっかだい）で普通電車に乗り換えなので、そこでお別れで一す」

「私も普通電車に乗り換えようかな、アホ三名は放っというて。手短に済むからな」

「ええー！」

「美月、わたしはともかく、アホ属性をつけるって、そんなの梨音ちゃんが可哀想だよ」

「沙織ちゃんも、さすがにアホ呼ばわりされるは可哀想だぜ？」

「冗談に決まってるだろ？　ささ、いつものコースで帰るか、仕方がない」

「いつものコース？」

「あ、啓子ちゃんは知らなかったんだよな。沙織が香枚井三丁目、梨音が春名坂小学校前、桃花は春名台団地だ。そして、わたしが、榛名天神駅前まで紅電バスなんだ」

「そうなんですかー。わたしも、香枚井登下校組に混ぜてください！」

「いいよ〜」

「賛成！」

「ありがとうございます！」

田辺啓子が、ぺこりと頭を下げた。

「あの、啓子ちゃん、良かったらうちの洋菓子店とあなたのお父さんが、商談してみない？ メロンやいちごのいいのが無くて困っていたところなのよー」

「はい、協力できそうなら、ぜひ」

「わたしん家も、いちご大福作ってるから、お願いしようかなー」

「はい、喜んで……」

「待って！ 和菓子でしょ？ 大福にいちごなんて邪道だわ。ケーキにちまっと乗っているのが本来の姿というもの。和洋折衷にも程があるわ、あり得ない！」

「いや待て沙織！ そんなに興奮するな。洋菓子にいちごが使えて、和菓子に使えないという理屈は、何だかおかしいぞ？」

「最近出来た商品でしょ？ 水っぽくなって、ああ、いちごが可哀想……」

「和菓子に対する偏見は、他の追随を許さないなあ……」

「わたし、どっちも賛成です！ いちごはどんなスイーツにも合いますから、どうか、喧嘩しないでください、先輩！」

「ご、ごめんね……ついついもの癖で……」

「ありがとうな、止めてくれて！」

「えへっ」

夏休みがやって来る！

■夏休みがやって来る！

「明日からは、夏期休暇です！ 皆さん、気を引き締めて勉強しましょうね！」

相川杏子先生が言い放った。しかし、女子生徒たちはそれどころではなかった。

「夏休み！ 夏休み！ 夏休み！」

「うるさい！」

「ねえ、一緒に水着買いに行こう？」

「キャンプセットも捨てがたいね、バーベキューとか！」

「海水浴かー、久しぶりだなー」

「わたしはバイトだね、バイト！ みっちり貯める！」

「おお、働き者！」

「わたしたちは吹奏楽だから、室山工業の応援に行かなきゃ」

「それは熱そうだね、さすがは熱闘甲子園！」

そうして、生徒がわいわい、キャーキャー言っているのを、黙って見ていた杏子先生だったが、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、バンッ、と教師用机の上に、学級名簿を叩き付けると、鋭い目つきで言い放った。

「あなたがた、いいですか？ 勉強と両立なさい。それから、不純異性交遊は断じて許しません！ 気を引き締めて、遊ぶことばかり考えずに、勉強に励みなさい。わたしなんか、高校生の頃は、難関大目指して夏期講習や自習や宿題に没頭していました。遊んでばかりいると、先生の雷が落ちますからね！ いいですね！」

一同「はい」

「ではよろしい、日直さん！」

「起立、礼、解散！」

「ふー」

「はい」

各所で溜息が漏れる。夏休みの開放感、そして、日々怒れる杏子先生の呪縛からの解放。明日からは、すべてが自由だ！ そんなクラスの雰囲気。仲良しグループごとに分かれてゆく女生徒たち。さあ、夏休みの始まりだ！

放課後、家庭科部の家庭科室……。今日は部活動は休みで、その代わり、仲良しグループ同士で、わいわい、キャーキャーと「夏休み、どうする？」という話題で持ちきりだった。ところで、肝心の美月たちは、この夏をどう過ごすのだろうか……。

まず、沙織が切り出した。

「ねえねえ、浜辺で海水浴、なんてのはどう？ 泊まりがけで、秋津浜で！」

「秋津浜あー？ 知り合いいないし……。どうだ、わたしん家の庵で抹茶でも！」

「はっとり、却下。今は夏よ？ かんかん照りの夏に、着物着て、茶室で抹茶はどうかと思うなあ……」

「言えてるー。考えただけでも蒸し暑そう……」

「そういう沙織は、知り合いいるのー？ 秋津浜に」

「うーん、知り合いはいないけど、小さなレンタルコテージならあるよ」

「さ、さすがは金持ち……」

「もう、はっとりは、すぐそうやってー」

「ここは多数決だよ！ この夏、海水浴にしたい人！」

「はーい」

「……なんだ、美月以外は全員賛成だぞー」

「……わ、わたしも水着になるのかー？」

「じゃあ、全員賛成ね！ じゃあ、明日早速水着選び！ 集合はわたしん家！ 時間は、午前9時！」

「ラジャー！」

「はいはい、付き合いますとも、沙織さん……」

「明日、シエスタ香枚井で、水着選びしようねー」

「ふー、やれやれ……」

沙織たちがノリノリの中、ひとり溜息をついたのは、美月だけだった。

「高槻さんたちー！」

「あ、啓子ちゃん！」

「わたしも付き合います！ 海水浴には、すいか持って行きましょう！」

「おおー、すいか割りかあ！ 雰囲気出るわねえー」

「さて、香枚井に帰りますか！」

「イエーイ！」



翌日、紅電香枚井駅に隣接する大型ショッピングセンター「シエスタ香枚井」。婦人服の、水着のコーナーは、海水浴に、はたまた、プールに行くことだけを考えている女学生たちで、ごった返していた。

高槻沙織が言った。

「ねえねえ、はっとりは選ばないの？」

「わ、わたし？ わたしは学校の競泳水着でいい……」

「そうかなあ、この、フリル付きのセパレーツなんか似合いそう。透けない白で」

「そうだよ、似合うよ美月！」

「これにしときなよ……」

服部美月は顔を真っ赤にしながら、こう言った。

「それ、とっといて」

「おやまあ、はっとり、買う気になったー？」

「と、とりあえず、わたし、ちょっとATM行って来る……」

「……お金がなかったんだー」

「悲しいね、貧困家庭は……」

「梨音、何か言ったかー？」

「いえ、べ、別にイー」

柏原桃花が、立花梨音に訊いた。

「ねえ、梨音ちゃん、わたしのこれ、似合うかなあ……」

「おおっ、桃花らしくていいね、何だか子どもっぽくて！」

「子どもっぽいって一体……」

「もっと大人っぽいものにしろよ、桃花。怪しいおじさんとかに、かどわかされるぞー」

「じゃあ、わたし、もっと大人っぽいものにするー」

高槻沙織が、立花梨音に訊いた。

「そう言う梨音ちゃんは、水着、何を選ぶのさー」

「えー、あたしー？ じゃーん、黄色のビキニでーす」

「うわああー、似合わなさすぎる……」

「うるさいうるさい、これにするのだ！ そういう沙織はどうなのさ」

「え、わたしは、白のビキニ水着」

「ぐはっ、の、悩殺……」

「参ったか」

田辺啓子が、高槻沙織に訊いた。

「わたしは、これにしようと思います」

「え、どれどれ……って、これー？」

立花梨音が、続けた。

「あ、チューブトップ水着！」

柏原桃花が、続けた。

「か、かわいい……」

A T Mから戻って来た美月が、田辺啓子の水着を見るなりこう言った。

「うわー、洒落たものを持って来るね、この子は！」

「じゃあ、全員決まったようなので、レジへ……」

服部美月がさえぎった。

「ちょっと、沙織のを見せて……うわあ、お洒落！ わたしもお揃いにするー」

「もう、はっとりったら……」

「あったぞー、これにするー！」

「じゃあ、みんな持ったかなー、レジへGO！」

「イエッサー！」

「あ、ああ、お金が要るんだったな……八千五百円は痛い……」

◇ ◇ ◇

翌日――

蝉が朝からミンミン鳴いている。ここは、葱北本線、香枚井駅。みんなで、秋津浜行きの快速電車に乗るためだ。秋津浜行きの電車は、こちらの快速電車の方が速いのだ。沙織、美月、梨音、

桃花、そして刈羽台から来た啓子が、プラットフォーム上で集っている。

「今日は、あのおっばい星人は現れないみたいだね」

「ふー、やれやれー」

「誰がおっばい星人だとー？」

振り返ると、アロハシャツに短パン姿の、霜田拓也、霜田 翔が現れた！

「うおおおーい！ 知らせたの誰だー？」

「誰だと思う？」

「梨音……お前の仕業かああっ」

「いててっ、ほっぺ、つねったらだめー」

「ありゃー、発信元は梨音ちゃんだったのー、びっくり！」

「よっ、今日はおまえらのボディガードに来てやったぜ！」

「いりません！」

「美月ちゃん……僕らいたら、邪魔かなあ……」

寂しい子犬のような声を出す拓也に、思わず美月が……。

「いえいえ、邪魔だなんて、そんな、大歓迎です！」

「やれやれ、梨音ちゃんのせいで、借りコテージもう一個予約しなきゃ……もしもしー？ はい、室山市の高槻沙織といいます。急遽、男性二名追加で、もう一部屋予約お願いします、大至急！ はい！」

「ごめんね、沙織ちゃん」

霜田 翔が、服部美月の肩に後ろから手をかけた。

「なんだよ美月ちゃん、お泊まりかよー、興奮しちゃうな、オレ」

「勝手にすれば」

「ほら、意地張ってないで、笑顔、笑顔」

「ぎゃあああ！ ど、どこ触ってんのよ、この変態！」

「翔、止めろって！」

「こういう輩は……関節技で……えいっ！」

「痛ってえ……腕が、腕があらぬ方向に曲がっ……痛ってえなあ……」

「天罰てきめん！」

『二番線の電車は、快速・秋津浜行きです 停車駅は、葱州長坂、志賀原、室山、岩崎、敷島、

新室山、葱州神崎、終点・秋津浜の順に停車します』



ここは、室山県秋津浜市の、秋津浜海水浴場近くにある、緑が丘コテージ。会員レンタル制になっていて、高槻沙織の父、信也が会員になっているため、コネで安く借りられた。十数棟の小さなログハウスが作られている。海岸までは、作りつけられた、専用の階段を降りてすぐ。じりじりとし照りつけている太陽が、砂を焦がす。

高槻沙織と、霜田拓也は、それぞれに支払いを済ませた。一泊二日。虫除けスプレーと、日焼け止めを買っておいたので、男部屋、女部屋でそれぞれに塗り、みんな水着に着替えて、三々五々、コテージから出てきた。

「美月一、まだー？」

「着替えが……もう少しかかる」

「早くしないと、行っちゃうよー」

「すいかは今日にしましょう！」

「啓子ちゃん、こっちこっち！」

「あ、出口こっちですか」

霜田兄弟は、プラスチックの椅子兼テーブルの中央に、貸し出されたパラソルを立てる作業をしていた。

「パラソルは、このテーブルの真ん中にと！ おい、翔、手伝えー」

「やだよー、美月ちゃんと遊ぶんだもんオレ」

「いいから手伝え！ パラソルが重いんだよ！ ちょっとこっち来ーい！」

「はいはい、分かりましたよ！」

翔はそそくさと兄貴の手伝いをしていたが、専用のビーチバレーのコートがあるのを浜辺に見つけ、わくわく楽しそうにしていた。沙織が、美月に声をかけようとしたが、肝心の美月は……黙々とラジオ体操……。

「何か、泳ぐのに必死な人が約一名……」

「沙織ー！ 向こうの島まで泳いで行って、帰って来る！ すぐ戻る！ じゃな！」

「って、ちょっと、美月……」

「ちっ、逃げられた……あーあ、オレの美月ちゃん……」

「お前がいじるから、美月ちゃん、呆れてどっか行ったぞ！ この間抜けい！」

「じゃあ、残った俺たちでビーチバレーすっか」

「沙織ちゃん、立花さん、柏原さん、そして、田辺さんかー。4対2でビーチバレーしようかな？ いい？」

四人「はい！」

「さてと、賞品は……」

やがて、美月が海から上がって来た……。

「やあ、みんな、ビーチバレーだね！ ぜいぜい…… 向こう岸の島の海女さんから、壺焼き用のサザエ買って来た」

「賞品はそれにしよう！」

「ああ、ちょうどいいな！」

「美月はビーチバレー、どうするの？」

「泳ぎ疲れたので、審判をする」

「ああねー、ちょっとした遠泳だったもんねー」

「はい、前半二セットは二十一点以上先取、後半一セットは十五点以上先取で一セット獲得。二セット先取で勝ち。二点差がつくまで頑張って相手方コートに落とそう。まずはコイントスから、先攻後攻決めて？」

「先攻わたしたち！ 美月ちゃん、罰ゲームは？」

「そうね、勝ちチームには、スイカ割りをする権利。負けチームには、スイカ割りの棒で叩かれる罰ゲームかなんかがいいかと。みんな、肉離れが起きないように、今から三分間は、ウォームアップの時間です。みんなで体操をしましょう」

三々五々、体操をしていたが、美月だけは「ちょっとホイッスルと、ストップウォッチ借りてくる」と言って管理事務所まで駆けて行った。戻って来ると、間接チューが嫌なのか、ホイッスルを海水で洗って、審判席へよじ登った。

「どっこらせっと。じゃあ、始めるよ！」

美月のホイッスルが鳴った。

「サービスは、いちばん背の高い沙織！」「よっしゃー！」バンッ！

「翔、受け止めろ！」「兄貴、スパイクだ！」「分かったー！」バシーン！

「梨音、受け止めろ！」「あ痛っ！」「桃花、トス」「了解！ 沙織ちゃん！」

「アタック！」「させるかあ！」

という具合に、白熱した試合展開の後……。

「ゲームセット！ 2-1で、敷島女子チームの勝ち！ スイカ割りの権利獲得！」

「やったよ！ 大人相手に勝ったよ！」

「そりゃあ、大人2人に高校生4人じゃあ、圧倒的にオレら不利だよ……」

「は、ハンディ与えすぎ……」

スイカと同列に砂浜に埋められた霜田兄弟。一方で、目隠しをした沙織が、じわじわと接近して、棒を振り下ろす。

「オイ、怖ええなあ……って、ぐえっ！ 腹を踏むな！ そこはオレの腹だよ！」

「オレは……え、え、そんな近くで、びゅん！ って、危ない危ない！」

「ここだなあ、えいっ！」

「あ痛っ！ そこはオレの頭じゃないよ……って、痛てえ！ 痛てえ！ ストップ！」

「沙織一、霜田さん叩きもいいけど、スイカ割りなさいよー」

「こ、これが五回も続くのか……」

「ひ、酷い……」

「さあ、次は梨音……」

一巡して、霜田兄弟を砂から救い出したら、霜田兄弟の頭と身体が、全くもって、ふらふらになっていた。霜田兄弟を支えていた沙織と美月が腕を離すと、彼らは砂の上に、仰向けにひっくり返った。

「ノックアウト……」ドサッ。

「同じく……」コテッ。

「あーあ、霜田さんたち、伸びちゃったよー」

「あんまり沙織が踏んだり叩いたりするから」

「その代わりに、梨音みたいに、急所は狙ってないからね」

「すいか、一個も割れてないのが不思議だね」

「割れてないのかよ！」

「一個ぐらい割れよ！ つーか、急所って！」

二人「は～あ……」



女生徒、男性陣、別々に、管理事務所近くのシャワールームで水着を洗い、砂まみれ塩まみれの身体を清めた。私服に着替え、コテージの側のバーベキューをする所に集まった。俄然、やる気を起こした“バーベキュー奉行”、火起こし職人の霜田拓也が、助手の高槻沙織を従えて、必死に炭の火起こしをやっている。

「助手、固形燃料プリーズ！」

「はい、霜田さん」
「助手、炭をもう少し！」
「はい、霜田さん」
「よおーし、起こって来たー！」
「その調子です、バーベキュー奉行さま！」

遠くで見ている女生徒たち……。

「助手って何？ 何、あの小芝居？」
「沙織が甲斐甲斐しく……」
「沙織ちゃん、本当に霜田さんのことが好きなのねえ……」
「ああ、兄貴と沙織ちゃんは、十年前ぐらいの頃は、ままごと遊びしていた仲だからなー」
「材料持って行きましょう！」
「そうだ、そうだ、そうしよう！」
「あ、肉奉行はオレだからな！ 言うこと聞けよ！」
「さあねー」
「どうだか」
「翔さんとは、関係ナシに食べるよ」
「そこの変態！ 肉抱えて突っ立ってないで、さっさと歩く！」
「……変態……変態って一体……関係ナシって一体……」

バーベキューパーティーは、女生徒たちが、きゃいきゃい言いながら進んで行った。霜田兄弟は、翔が次から次へと串に材料を刺しては、拓也が火起こし職人として黙々と焼く係。「はい、次！ はい、次！」女生徒の胃袋は、育ち盛りと言うことで、どこにそんなに入るの？ といった量が、次々とさばかれて行く。

「材料なくなったぞー！」
「兄貴、オレらの飯は？」
「焼くのに夢中で、気がいたら自分のがなくて……あ、そうだ！」

霜田拓也が、溜息をついた。

「しょうがない。クーラーボックスに、オレが秋津浜駅で買った駅弁と、生ビールが入ってるから、それでも食っとけ！」

服部美月が、翔に向かってこう言った。

「翔くんがボケッとしてるからでしょ！」

「し、失敬な！ オレはお前らの為にと思ってだなあ……」

冷めた駅弁と、よく冷えた缶ビールで、お腹をこわしそうな、駅員二人……。

「硬い駅弁だなあ……キンキンに冷えてるよ……」

「まあ、生ビールは良かったなあ……って、無い！ あれ、どこだー？」

ごっふごっふごっふごっふ「ぶはーっ！」

なんと、翔のビールを、梨音がいつの間にか飲み干していた！

「コラ！ 梨音ちゃん！ 未成年だろ！」

「ひっく。あー、堅てえこと言うなよー、無礼講だよ今日は」

「翔、お前、ちゃんとビールを管理しておかないから！ 梨音ちゃん酔っ払って……」

「え？ あたし？ あたしー、酔ってなんか、い・ま・せ・ん、よーだ。でへへへー」

それを聞いたほかの女生徒たちが、酔っ払いの梨音の前に集まった。

「お前、飲酒したのかー？」

「梨音ちゃん、お顔が真っ赤！ ちょっと誰ー？ 梨音ちゃんに飲ませたの？」

「いえ、オレは、別に……」

立花梨音が言った。

「おっす！ 揃いも揃った、不細工共めが。がん首並べて、あたしに何をしようって言うんだー、へへへい！」

「コラ、梨音！ 正気に戻れ！」

「あたしー？ ひっく。至って正気にてごじゃりまするー」

「こら、今度は翔さんに何を？」

「あそこはお元気ですか、ちーん！」

翔の下腹部を、梨音の指が弾いた。

「おわ、痛っ！ 何しやがる、このガキー！」

「お遊びはそこまでだ、梨音……」

「やあやあ、美月ちゃん、今日もきれいだねえー」

「お前、今からちょっと、女子トイレに來い！ さあ、來るんだ！」

「やーだー、もっと飲みたいー！」

「お仕置きだ！ 水ぶっかけて、胃の中のもの、全部出させる！ さあ、來い！」

「やーだ、やーだ、もっと飲むんだ、あたしー！ 美月！ 離せ！ ぐるじい！」

「お仕置きだ！ 水ぶっかけて、胃の中のもの、全部出させる！ さあ、来い！」

「やーだ、やーだ、もっと飲むんだ、あたしー！ 美月！ 離せ！ ぐるじい！」

服部美月は、小柄な立花梨音を右腕で抱えると、階段を昇って行った。高槻沙織が、何事かと仰天して、美月と梨音の行方を追った。他の面々も、慌てて後を追った。暗い中で、トイレの電気だけは灯りが漏れていて、そこからは、信じられない音がした。ザッパーン……と、バケツをひっくり返した音が聞こえたかと思うと、中から、何かをリバーズする音が聞こえて、キーキー、ぎゃあぎゃあという激しい乱闘の音がした後、トイレを流す音がして、やがて静かになった……

。

そして、水でべちゃべちゃになった梨音と、猛獣を手なずけた達成感で一杯の美月が息を切らせていた。

「美月！」

「やあ、みんな！ 大丈夫、梨音は完全に正気に戻った。ついでに、胃の中のものも全部戻させた！」

「梨音！」

「先輩！」

「あ、あれ？ わ、わたしはどこ？ ここはいつ？ あなたはいま？」

「ふー。梨音！ ちゃんと謝れ！ 今すぐにだ！」

「ご……ごめんなさい……」

「お前、飲酒したのを、覚えているか？」

「いや、何も……って、わたしがお酒ー？」

「うん、オレのビール、五五〇ミリリットル……」

「重ね重ね、済みませんでしたー」

「よろしい、さあ、行け！」

「きゃいん、きゃいん……」梨音は、そそくさとログハウスに入って行った。

「大虎の次は、子犬かよ……」

「はっとりが、次第にタフになってゆく理由が、こんなところで明らかに……」

午後九時……女生徒と男性駅員が、それぞれのコテージに分かれて、お休みの時間を迎えた。

「じゃあ、いろいろお騒がせしましたー！」

「ああ、まあ……」

「お休みなさい！」

「ああ、お休み！」

「失礼しましたー」

「気をつけて眠れよー！」

「じゃあなー」

バタン！ っと扉を閉めると、霜田兄弟は、食べ直し、飲み直しといった案配で、柿の種、さきいかや、すっかり冷めたサザエの壺焼きなんかをつまみつつ、野球の生中継をラジオで聴きながら、生ビールを開けた。

一方、女子部屋では、沙織や桃花や啓子が、ドライヤーで髪を乾かしたり、整えたりしている。猛獣を退治し終えた美月は、疲れて、カーペットの上で、大の字で横になっていた。その猛獣は、今では、バスタオルを上半身に絡めたままで、部屋の隅で、すーすー寝息を立てて寝ていた。

◇ ◇ ◇

夜十一時……霜田兄弟は、まだ惰性で起きていて、深夜放送のリクエスト番組を聴いていた。霜田拓也が、何気なく覗いた窓の外に、人の気配を感じた。誰だろうと、カーテンの隙間から覗いて見ると、なんと、女子部屋のログハウス付近でうろちょろしている、怪しげな人影を発見した。目出し帽にサングラスにマスク姿。手には懐中電灯を持っていた。これはまずいと思った拓也は、ひそひそ声で、弟の翔を起こした。

「う、うあー、夜中に何の用だよ、兄貴……」

「しーっ！ 不審者！ 不審者！」

「おいおい、女子部屋の近くにいるじゃんか！」

「翔、気配を殺して不審者退治だ！」

「了解！」

目出し帽の男は、女子部屋のログハウスの扉の取っ手に手をかけてゆさぶった。女子部屋の中では、物音の怪しさに全員目覚めていて、特に美月は、みんなを背に守り、外敵と素手で戦う覚悟でいた。

「こ……怖い……」

「な、何この音……？」

「いざとなったら、わたしに任せて！」

一方、霜田拓也、霜田 翔は、不審者の男に背後から近づいて、羽交い締めにして、一気に階段の下へ転落させた。翔が馬乗りになって、二～三発、男の頬を殴った。拓也が、目出し帽と、マ

スクと、サングラスを取って、懐中電灯で照らしてみると、意外な人物が目を回していた。

「高槻のお父さん！ 何でここに？」

「きゅー」

「沙織ちゃんの親父か！ ちっ！」

その後、コンコンとノックをして、霜田拓也が女子部屋の扉を開けさせた。

「夜分遅く済まない。あれは、高槻さんちのお父さんだった！」

「ごめん！ オレが間違えて退治しちゃった！」

「沙織の、お父さん？」

「お父さん？」

その後、女子部屋に集まる全員。

「済まん……どうにもこうにも、娘が心配で……」

「いくら心配でも、あの入り方はないよねー」

「管理人さんに聞いたとしても、いくら何でも、真夜中に来るなんて！」

「オレが二～三発殴った」

「オレが、変装を解いた」

「お父さん、最低ー！ とんでもないことをやらかして……」

「おじさん、さすがのわたしも、武者震いしたよー」

「済まんかった……」

「でもまあ、身内で良かったじゃないか。大事に至らずに……」

「そうそう、いつだって不審者はオレたちが許さない！」

やがて、貸しコテージの駐車場から、室山ナンバーの車が走り去って行った。不審者騒ぎは、未遂どころか、人騒がせな身内に終わり、みんな安心して眠るのだった……。

◇ ◇ ◇

――翌朝

「さー、今年最後の泳ぎ納めだー！」

「遊ぶぞー！」

「酔っ払いは自重しろ！」

「すいか切って食べましょうねー」

「沙織は？」

「わたし、ここがいい」

「え？」

「霜田さんの隣がいい」

「ええーっ！」

高槻沙織は、霜田拓也の左腕にしがみついて、すーすーと、眠ってしまった。

一同「仲良くしろよー」「このバカップルー！」

「バカ……バカップルって……お前らー！」

こうして、高校一年生の夏休みイベントは、終わりを告げるのだった

オープンスクールがやって来る！

■オープンスクールがやって来る！

八月は、オープンスクールのため、全員出席の日が一日だけぽつんとある。そこで、模擬授業や、父兄や当事者である、中学生の女子（敷女候補生）に、学校を見て、体験してもらおうという、生徒にとっては甚だ迷惑で、率直なところ、「かったるくてしょうがない」行事だ。

一年三組の担任教師、相川杏子が目指す、理想の学校説明会とは！

- 一、流れるようなプレゼンテーション
- 二、宝塚音楽学校のような、折り目正しき女子教育
- 三、徹底した風紀チェックによる、マナーの良さをアピール
- 四、偏差値高そうなイメージを崩さないこと
- 五、理知的でありながら、フレンドリーな校風であること

これら五箇条である。生徒たちには、中学生にはない「ちょっと大人の雰囲気」を出してもらうこと。これが、担任相川に課せられた使命だった。

そんな気持ちを胸に、HR棟三階のクラスに赴くのだった。久しぶりに、ご機嫌なテンションで部屋を覗くと……。

「ごめえん、ナプキン貸して」

「いいよー」やおら、ナプキンを投げる。

「サンキュー」そして、キャッチする。

「暑ちいよー、だるいー、うー、死ぬるー」

「スカート、ばたばたさせればいいじゃない！」

暑さにたまりかねた女子複数名が、スカートをひるがえしている。大変お行儀が悪い。ばたばた。ばたばた。

「ったく、この部屋女臭えなあ！ 窓開けろ、窓！」

「誰だよ、全館冷房止めるのは！」

「不快指数うなぎ登りだ、つってんだろ！」

「つか、なんで真夏に冬服なんだよー！」

相川杏子は、扉の隙間から見える、まるで舞台裏のような光景に仰天した。

(こ、これがイマドキの敷女生なの？ なにあの醜態！)

がらり、と扉が開くと、まるで何かのマシンのように一斉に着席し、静まりかえった。そして、日直が続ける。

「起立、礼、着席」

「よろしい。日直さん、ありがとう。先程までの態度！ こっそり、見せてもらいましたが、女子高だからって、異性の目が無くたって、教師が来なくたって、今のように緊張し、普段から、張り詰めていて頂きたいものです」

そして、相川杏子先生が続ける。

「ここには、あなたがたの後輩に当たる女子中学生も見学に来るので、先ほどのような醜態、断じてなりません！ ああ、この学校に入りたい、この学校のお姉さんは優しい、この学校が第一志望なの……と、思わせるぐらいの雰囲気醸し出していただきたいのです、分かりましたね！ なお、節度ある交流は認めますので、やさしく接してあげてください」

◇ ◇ ◇

やがて、女子中学生の父兄が教室に入ってきた。中学三年生の女生徒と、そのお母さんが、羨望の眼差しで、在校生を見詰めている。相川杏子先生は、それまでの鬼の形相から一変、柔和で優しい口調に変わっていた。

「えー、お母様とお嬢さま方に申し上げます。今から、敷島女子高等学校、普通科のプレゼンテーションを行います。これが大体……そうですわね、大体二十分程度だとお考えください。それから、後の二十分間は、在校生と自由にお話ができる、ふれあいタイムを設けます。そして、最後の十分間で、資料をお渡ししますので、お持ち帰りください」

それから、一通り、相川杏子先生のプレゼンテーションが済んだので、自由なふれあいタイムに移った。在校生も、柔和なイメージを作り出そうと懸命だ。

ある子が、高槻沙織のところへ行った。

「ねえ、ママ、この人、すごくやさしそう」

「あら、本当ね」

「ねえ、お姉さん、勉強は難しいですかー？」

「う、うん、きっと基礎さえ出来たら、大丈夫だよー」

「冬服着て、暑くないですか、お姉さん」

「うー、ちょ、ちょーっと暑いかなあ……でも、夏は薄着になるよ！」

「じゃあ、暑い日も安心、ってことですね！」

「うん、そうだね、そんな感じ……」

(ふー)

また、ある子が、服部美月のところへ来た。

「ママー、この人にお話を聞いてみようよ」

「そうね。ねえ、このセーラー服のスカーフ、学年別に色違いだそうだけど、娘がもし入学出来たとしたら、何色になるのかしら……」

「は、はい。ご入学時には、わたし達は二年生になりますので、スカーフは、赤色になります」

「ママ、赤だって！ 赤いスカーフ！」

「あらそう。じゃあ、頑張ってお勉強なさい」

「はい」

(やれやれー)

そして、ある子が、柏原桃花の席へ来た。

「ねえねえ、先輩！ 普段、あだ名は何て呼ばれてますか？」

「え、あだ名……だよ。えーっと、桃花なので、ももっちと呼ばれています」

「そうですか！ ももっち先輩、きっと必ず合格しますから、待っててくださいね」

「う、うん、分かりました。じゃあ、今日から、ちゃんとお勉強しましょうね……」

「はい、ももっち先輩！ じゃねー」

(ふえーっ)

ある子が、立花梨音の席へ来た。

「ママー、わたしと同じ、眼鏡キャラな人がいるよ」

「あはっ、本当ね」

「先輩、こんにちは！」

「あ、ああ、こんちわ……」(何だろう、この緊張感は……)

「このお姉さま、すごく勉強してるって感じです、眼鏡キャラです！」

「い、いや、特技はパソコンと裁縫ぐらいで、大したことないです……」

「まあ、ご謙遜を、さあ、ママとこっちにいらっしやい」

「はい」

(うぎょー、眼鏡キャラ呼ばわりされた！)

一通り、資料の配付が済んだ。

「では、何かご不明点でもございませんでしょうか……では、終わりにしたいと思います、

はい、日直さん」

日直が号令をかける。

「起立、礼、着席」

「では、皆様方は、こちらの出口よりお帰りくださいませー」

作り笑顔で手を振り、廊下へ送り出す、相川先生。

「……さてと」

相川杏子先生が、教壇に立った。

「皆さん、お疲れ様。肩の力を抜いて……」

「うおーっ」「あっちー」「だるい、わたしだるい」「めっちゃ緊張したよー」

「では、よろしい。本日のオープンスクール、終わりにします。解散してください。また、九月になったら会いましょう、では、解散！」



毎度おなじみの、香枚井登下校組。紅電敷島駅のホームで電車を待っていると、先ほど、柏原桃花の席を訪れた親子がやって来た。

「あ！ ももっち先輩です！」

「こんにちは、皆さん、ご一緒に通学を？」

「ええ、急行で、香枚井まで」

「うちの娘は、吾野本陣なんですの。香枚井から急行で一駅ですわね」

「そ、そうですね」

「何か奇遇ですわ」

「そ、そうですね」

「ももっち先輩、板宿美香っていいます、よろしく願いします」

「あ、わたし？ えー、柏原桃花っていいます。よろしくね」

「よろしくですー」

「この子は、田辺さんって言って、刈羽台の女の子です」

「どうも、刈羽台の田辺で一す」

「みんな仲良しで一す」

「じゃあ、皆さんと一緒に帰りましょう」

「そうしましょう」

「通学する事になったら、この子もお願いね」

一同「はい！」

「わかりました！」

「まずは、志望校合格ですね」

「でも、たまには猥談も混じるけどなーって、ぐえっ、痛あっ！」

美月の肘鉄と、沙織の空手チョップが炸裂した。

「おやおや、敷女の生徒さんも、案外フランクなところがおありのようで……」

「いえいえ、こいつだけは例外です。何かの間違いです」

「入学試験の採点のコンピュータが故障したと思われます！」

「ぷっ」「きゃははははははは」

「うーん、もう、笑わないでよ、わたしゃ自力で受かったよ」

『三番線、急行、楠葉行きです 停車駅は、岩崎、室山、咲花台、香枚井、吾野本陣、紅葉野、吾野以降の各駅に停車致します 白線の内側まで、下がってお待ちください』

◇ ◇ ◇

紅電香枚井駅に着いた電車。ホームでお見送り。

「じゃあ、きっと合格しますー」

「ああ、頑張れよ！」

「元気でねー」

「達者で暮らせー」

「バイバーイ」

『ドアが閉まります。閉まるドアにご注意ください』

「ふー、やれやれ……って、霜田さん？」

「あ、君たち。冬服でどうしたの？」

「今日は、オープンスクールだったので、紺色のセーラーじゃないと駄目だったんです」

「拓也さんはホームの掃除もやるんですかー？」

「ああ、ラッシュ時以外は、掃除か、改札だよ。君たち、暑くない？」

「もう、べろーんとなるぐらい、暑かったです」

「じゃあ、自販機のアイスでも食べる？」

「ええー、いいんですかー？」

「六〇〇円ぐらい、どうってことないさ」

◇ ◇ ◇

「くーっ、生き返るー」

「つめたああい」

「どう、美味しい？」

一同「はいっ！」

「んじゃ、そりゃー良かった！ あ、ゴミはくずかごにね」

「ごちそうさまでしたー」

「お粗末さまでした」

「なんて優しいのかしら、霜田さん……」

「そう言ってもらえて、うれしいよ」

「お熱いよ、二人とも、ヒューヒュー！」

「梨音、うるっさい！」

こうして、紅電香枚井駅は、夕刻を迎えようとしていた。

梅香祭（文化祭）

■梅香祭（文化祭）

今年、創立九十周年を迎える、室山県立敷島女子高等学校。ここにも、普通の高校と同様に、文化祭がある。現在の敷島二丁目は、以前、敷島市大字梅香（ばいこう）と呼ばれていた関係上、その伝統を受け継いで「梅香祭」（ばいこうさい）と呼び習わされている。

部活動やクラスの模擬店が展開されている校庭には、テントが設営されていて、さまざまな催しが行われている。鉄道員である霜田兄弟は、土日という関係上、駅係員として、参加どころではなかったし、タクシー業の霜田家も、目下忙しくて来られなかったが、家庭科部メンバーの親御さんは来ている。

高槻沙織の父、服部美月の父、立花梨音の父、水谷啓子の父が来ていて、放送局ラジオ担当の柏原桃花の家からは、代わりに母が来ていた。どれどれ、といった案配だ。

「立花さん、あれ、娘さんでは？」

「本当ですね、梨音だ。……何々？ クイズ『乳酸ショック』ですと？」

「クイズに答えて、不正解ならば、乳酸飲料をジョッキに入れて、飲み干すそうです」

「あ、あのバカ……！」

『二年三組、立花梨音ちゃんです！ どうぞー！』

「いやあ、どうもどうも～」

『早速ですが、問題です。大化の改新が行われたのは、西暦何年でしょう、はい、十秒以内にお答えください。十、九、八……』

「はい！ はいはいはい！」

『おおっ、早いですねえ、さて、お答えをどうぞ！』

「鳴くよウグイス……七九四年！」

ブブー！

「な、なんだ、外れちった……」

『残念！ っていうか、当たりもかすりもしませんでしたね。正解は、西暦六九五年でしたー。歴史をもっと勉強しましょう。では、罰ゲームとして、ジョッキに並々と注がれた、乳酸飲料を飲み干してもらいます。さあ、どうぞ！』

「せーの、立花さんのいいとこ、見てみたいー！ そーれ、一気、一気、一気、一気……」

「ぶっ、ぶふううー！」

「きゃあ」

『おっと、早くも吹きだしたー、大丈夫か立花さん！ 最後まで責任持って飲み干していただきましょうー！』

「げはっ、ごえっ、わ、わたし、もう無理……」

その一部始終を見ていた、父、立花功武は絶句した。すでに怒りを乗り越えて、呆れていた。ぽかーんと口を開けて……。

「ほら、立花さん、女の子だけだと、遠慮がなくなるんですよ、気にしないで」

「そうそう、元気があっていいじゃないですか」

「チャレンジ精神旺盛な娘さんで……ぷふっ」

「お、オレ、育て方間違えたか……な……」

「さあ、立花さん、気を取り直して、家庭科部の模擬店行きましょう、ね」

「た、たぶん、育て方……間違えた……」

「見なかったことにしようか、立花さん……」

次に一同が向かったのが、文化祭には欠かせない、食品系の模擬店。中でも、代々受け継がれて来たのが、敷女名物、ダシが自慢の「梅の香うどん」だった。重要なミッション、梅の香うどんを任されているのは、服部美月とその先輩後輩たちだった。とても緊張している様子で、先輩たちに尋ねているのだった。

「ば、梅肉の分量、間違いないですよ、ね、ね、ね？」

「うん、もう少し薄い方がいいんじゃないかしら。ダシを足してみて」

「は、はい、わかりました、先輩！」

「服部さん、何か緊張していませんか？」

「ぶるるる、何でも無いの、何でも無いたら……ただ、伝統の味を守るプレッシャーがあってね、それで……」

様子を見て、たまらずに、服部征志が声をかけた。

「おーい、美月いー、来てやったぞー！ 僕らにも一杯食わせてくれや」

「は、はい、わかりましたですとも、お、お父さま……」

「なんだ、えらく緊張しているな」

「敷女九十年の伝統を守るプレッシャーに押しつぶされそうで……」

「そんな昔からあるのか、梅の香うどんって……」

「うん、戦前から……」

「高槻です、僕も一杯もらおうかな」

「うちとは違って、立派な娘さんだ……」

「立花さんも、ぼおとしてないで、一杯いかが？」

「はい、頂戴します」

「美月ちゃん、私にも一杯いただけるかしら」

「はい、お待ち下さいーい」

「おお、来た来た」

「どうぞ、熱くなっていますので、やけどに注意してくださいね」

梅の香うどんは、薄い梅肉風味のダシ汁に、シーズン時に摘み取った、梅の花びらの塩漬けがトッピングされていて、どちらかと言えば関西風味だった。

「おお、美月ちゃん、グッジョブだ！」

「美味しい！」

「いい仕事してるなー」

「ありがとうございます！ 苦労した甲斐がありました！」

「良かったですね、服部さん」

「あの、皆さん、スイーツも、服飾雑貨もありますので、ぜひそちらもご覧くださいね！」

「おお、任しておけ、美月ちゃん！」

「そ……育ちがうちのとは全然違う……」

◇ ◇ ◇

さて、お次は、柏原桃花&立花梨音プロデュースのたこ焼き模擬店「桃源郷」だ。今は、立花梨音が「乳酸ショック」クイズの後で、テント内の椅子でへたりこんでいるので、桃花が先頭に立って売っている。二・三年生の先輩も一緒にちくちくとたこ焼きを作っている。そこへ、先程の父兄一同がやって来て、声をかけた。まずは立花功武から……。

「こら梨音！ 少しは真面目に商売しないか！」

「お、親父い……今はもうダメ……ビフィズス菌のゲップが出るう……げぼっ」

「は～あ、情けない……ごめんね、桃花ちゃんたち」

「いいえ、私たちは、大丈夫ですから……」

「小粒でも、ぴりりと美味しいですよー」

一部始終を見ていた、柏原桃花の母がつぶやいた。

「ねえ、桃花。私とお父さんのぶん、包んでくれないかしら……局に持っていくから」

「えー、恥ずかしい～」

「日頃からあんなにたこ焼き作ってるじゃない、心配いらないわ」

「じゃあ、二箱だけよー」

「いいわ、頂戴」

それを見ていた親父共も欲しくなって、その場で食べるのだった。

「うん、カリッとして、ふわっとして、丁度いい」

「霜田君たちにも買って帰ろうか」

そして、高槻沙織と後輩たちのブース「モンスター・クッキー・マシン」というコーナーにたどりついた。一種の自動販売機で、500円玉を入れて、スロットマシンのように、モンスターの右手を下に降ろすと、「ウオー、クッキー！」といった具合に音が鳴り、袋に入ったクッキーが、本体上半身の下にある取り出し口から、ポロポロと出てくるのだった。おかげでお子様連れのお客が多く、物珍しさから行列が出来ている。

「沙織、沙織はどこだー？」

「ウオー、クッキー！」

見ると、モンスター・クッキー・マシンの裏側で、ボイスチェンジャーを使ってしゃべっていて、500円硬貨投入を見計らって、クッキーを手動で排出していたのだった。その役を、後輩に譲ると、折りたたみ会議テーブルの向こう側から、ひょっこり沙織が出て来た。

「ウオー、クッキー！」

「沙織、もうそれはいいから、素に戻りなさい」

「いやあ、皆さん、どうもどうも、いらっしゃいませー」

「あの声、沙織ちゃんだったの？」

「ウオー、クッキー！ ……この声に、ボイスチェンジャーを使ったの」

「よく喉が枯れないよな」

「ええ、実は、喉がガビガビですー けほんこほん」

柏原桃花の母親が、こう言った。

「じゃあ、私たちのぶんと、うちのお父さん、それに霜田さんたちに渡すので、準備お願いね」

「ウオー、クッキー！」

「いや、その効果音は、もう無しでいいから……」

◇ ◇ ◇

「お待たせしましたー」

「どうもありがとう」

「ところで、田辺さんは？」

「あー、あの子はいま、あのへんで綿飴屋さんやってまーす」

「じゃあ、田辺さん、行きましょう？」

「あ、ああ、そうしましょうか」

「じゃあね、高槻さん」

「がんばれよー」

グラウンドを横切って、グラウンド隅の鉄棒の近所に行く父兄一同。その近辺は、疲れて休んでいる生徒のたまり場になっていた。田辺啓子は、いささか暇を持てあましていた。

「綿飴ですよー、おいしいよー……だめだ、全然売れない……」

「啓子！ こんなところで、綿飴かい？」

「お、お父さんたち……」

「どうだ、売れてるかー？」

「見ての通り、全然売れないよ……」

「これはねえ、こうやって、商品見本を左右、三つづつぐらいに吊り下げて……」

「値段は、もう少し落とした方がいいな。百円ワンコインってやつだ」

「そして、このメガホンで、お客さんに訴求する！ これで完璧。あ、喉をつぶさないようにね、注意して……」

「で、元気よく『綿飴いかがっすかー？』……これでOKだ。やってみ？」

「わ……『綿飴いかがですかー？』……『美味しい綿飴、くせになっちゃう綿飴！』」

「そうだ、その調子だ！」

「じゃあ、値段も下がったことだし、おじさんたちに一個くれるかー？」

「はいっ！」

田辺啓子は、機械の中央にザラメ砂糖を入れると、機械が暖まるのを待った。やがて、ふよふよと、綿飴らしきものが立ちのぼって来たので、それを割り箸ですくい取り、きれいに丸めて行く。

知らぬ間に、百円とあって、いつの間にか、近所の子ども達が群がってきて、綿飴の順番を待つのがあった。

「ほらね、小学生は、百円玉が限界なんだよ」

「なるほど……ありがとうございました！」

「じゃあ、頑張っ！」

「はいっ！」

「お姉さん、僕もー」

「お姉さん、わたしもー」

「はいはい、良い子は順番に並んでねー」



夕方……一般公開も済んで、撤収の準備にとりかかった。後夜祭では、キャンプファイアーが催されていた。

「やー、今年も済んだかー、なあ、服部！」

「そうですね、先輩！ 梅の香うどんの味、伝授致しました」

「それは良かった……わたしら、最後だもんね……」

「こんばんは、サオリ……ですう……スッカリ、声が、枯れて……」

「お前は『クッキー！』言い過ぎだよー」

「あ、だるうー、しんどーい。美月、なんか元気の出るものない？」

「あいにく、ここにはない。つーか、お前は、乳酸ショックだけだったろ？」

「てへへ……その分、桃花がたこ焼きの腕を上げたぞ」

「あっつい……のど渴いた……のぼせています。沙織ちゃん、お水ない？」

「はい、お水！ 桃花ちゃんはずっと鉄板の前だったからね」

「先輩、田辺です……わたあめいかがですかー？」

「おおっ、啓子ちゃん、ありがとう！」

「みんなで食べよう」

「じゃあ、わたしはこれぐらい頂戴してー」

「もうっ、ダメです！ 乳酸ショックだけの人は謹んでください」

「しょぼーん……」

「はい、どうぞ！」

「おお、悪いなあ、こんなにもらっていいのか？ 一年の、田辺さんだったっけ」

「はいっ、なんというか、記念に……」

「ははっ、記念ね」

「で、これが沙織さん、これが美月さん、これが桃花さん、で、乳酸ショックだけの人は、これだけ」

「こ、こんなにちょびっと？ ひとつまみも無いよ？」

そんな笑いに包まれながら、今年の文化祭は、幕を閉じるのでありました。

霜田、身を挺して！

『二番線、急行、海浜神崎行きが、八両で参ります 白線の内側に下がってお待ちください』

霜田拓也の構内アナウンスが響く。朝のラッシュアワー時間帯の急行は特に、通勤客の人出が多い。上り線のホームに人があふれ返っている。白い旗を振って、電車の運転士に減速の指示を出した。

不意に、服部美月が、通勤客らにドンツと圧されて、ホーム端でよろめきそうになった。このままでは線路に落ちる。次の瞬間、恐らく、考えている間にも、電車は近づいてくる。美月がそう思った瞬間、そばのマイクに向かってアナウンスをしようとした霜田が、とっさに非常ボタンを押し、服部美月に駆け寄り、マイクを落としたまま、後ろからしゃがみ込むようにして、彼女を転落から身を挺して助けた。

「美月ちゃん、危ないっ！」

霜田の肩胛骨に、電車の側面がガツン、ガツンと何度も繰り返し当たる。幾ら非常ブレーキで減速している電車とは言え、肩胛骨には相当なダメージを受けているに違いない。電車の側面に、血糊の跡が帯状にくっついていて、ワイシャツには、血液が相当程度にじんでいた。

「い、痛ってえ……」

そう言ったきり、美月を抱き留めたまま、プラットホームの端にしゃがみ込んでしまった。かぶっていた制帽は、飛ばされて、線路下のどこかへ落ちてしまっていた。

「霜田さん！」

「わたし、携帯で救急車呼ぶ！」

「わたしは、駅員さん呼んでくる！」

「ねえ、霜田さん！ ねえ！ ねえったら！ ねえ！」

「あまり揺さぶらない方が！」

彼は後頭部も打ったらしく、気を失っているようだった。身を挺して助けたその安堵感からか、そのまま美月におぶさるように、がっくりとうなだれた。

まず駆けつけたのが、電車の車掌と運転士だった。次に駆けつけたのが、駅長と駅員だった。まるで、眠っているかのように微動だにしない霜田を見て、美月が口を押さえて嗚咽した。霜田は、そのまま、駅員の手によって、ホームに寝かしつけられた。もし頭部を打っていたならば、無

闇に動かすのは危険だと判断したからだ。

『ピーポーピーポー ウーウー 交差点に進入します 進路を譲って下さい』

やがて「室山北9」と書かれた救急車が、香枚井駅東口に到着した。沙織は、携帯電話で、担任の相川先生を呼び出し、事の経緯を説明した。救急隊は救急隊で、受入先病院を携帯電話で探していた。

「室山大附属……いや、遠い。近くの県立室山病院で。そう。お願いします」

「あの……」

「咲花台の、県立室山病院に連れて行くから、容態が落ち着いたら、お見舞いに来るといいよ。大丈夫、バイタルはあるから、大事には至らないと思うよ」

「あの、出来れば彼女も一緒に連れて行ってあげてください！」

「泣いているあの子と、慰めているあの子か……まあ、乗れなくはないな」

救急隊員が、よいしょっと、ストレッチャーを起こすと、霜田を、駅のエレベーターで運んで行った。服部美月は、その場に泣き崩れていた。

「わたし……わたしをかばって……うわあああん……霜田さん、死んじゃ嫌あああー」

美月が取り乱す。

「はっとり、落ち着いて！ 一緒に救急車乗ろう？」

沙織がなだめる。

「もう泣かないで……美月ちゃん、しっかり！ ね！」

桃花が慰める。

「じゃあ、沙織、美月、霜田さんのこと、よろしく頼んだ！」

梨音が続ける。

「う、うん、分かった梨音ちゃんたち……わたしたちは、救急車に乗るから……」

問題の急行電車は、室山県警の現場検証もあり、三十分遅れで香枚井駅を発車した。沙織と美月は、救急車に同乗し、県立室山病院のある咲花台へと向かった。保護者たちは、室山県立室山病院の、S I C U（外科的集中治療室）へと向かった……。

病院へお見舞い

霜田拓也の母親と、服部美月の父親、それに、沙織と美月が病院の個室に赴いた。

霜田の母親が、息子の手をさすりながら、耳元でささやいた……。

「拓也……拓也……」

服部征志がつぶやいた……。

「大けがですからねえ……何でも、オペに四時間かかったそうで……」

沙織と美月がショックで声を出せずにいる中、服部征志が続けた。

「美月、この駅員さんが、お前の命の恩人だよ……」

「恩人……命の、恩人……」

霜田拓也の母親が、沙織と美月に向かって、優しく諭した。

「あなたたち、どうか、静かに見守ってあげてね……」

美月の父親が、去り際にこう言い残した。

「お父さんたちは、先に、先生に経過を聞いてくる。そのまま帰るから、君たちもほどほどにして帰りなさい」

二人「はい……」



高槻沙織と、服部美月が、霜田拓也の個室に置かれた椅子に座った。そうして、静かに寝息を立てている、拓也の表情を見詰めていた。病院用ベッドは、枕元の部分が少し、斜め上を向いていて、配膳台はいつでも食事が食べられるような位置に固定してあった。沙織が美月に言った。

「ねえ、まだ目を覚まさないんだけど、しんどいのかなあ」

「そ、そりゃあ、わたしをかばって、代わりに電車と擦（こす）れたんだから、多分、肩か、背中かどこかに、ダメージを受けてて……」

「ダメージが軽いことを、祈るばかりだよ……」

「やだ、申し訳ない、霜田さん、ごめんなさい！」

「まだ、麻酔から覚めないみたいだね、まだ、覚めないのかしら……」

「み、みんな、わたしの所為だ……」

「ほーら、泣かない、泣かない！ 美月がいつも私に言ってる言葉がある！」

「お、女は度胸と、愛嬌……」

「そう！ そうでなきゃ！ 空元気でも元気は元気！」

「うん、ちょっと無理そうだけど、やってみる。……女は度胸と愛嬌！」

「うん、それでこそ、いつもの美月だよー」

高槻沙織が、服部美月を呼んだ。エレベーターホールは、さほど遠くない場所にあって、エレベーターの、下の階へ行くボタンを押し、乗り込んだ。何階かに止まった後、地階に着いた。

「ねえ、はっとり、こっちこっち！」

「な、何だよ……」

「晩ご飯、食べに行かない？」

「わ、わたし？ うーん、どうかな。まだ早いし、食欲がぜんぜん……」

「そうだねー。でも、食べとかないと！」

「ああ、そうかも。だいいち、腹が減っては戦ができぬ。じゃあ、わたしはカツ丼で！」

「ならば、わたしはエビピラフ……」

「なあ、沙織？」

「なあに？」

「霜田さん、治るといいね……」

「そうだね」

「……で、お医者様は何て言ってたの？」

「ううん、まだ訊いてない……ちょっと怖くて……」

◇ ◇ ◇

夕方に満腹になった沙織と美月は、五階東病棟へ向かった。地階のエレベーターホールにて。

「結構待つねえ」

「そうだな……」

お互い、身に降りかかっている現実を前にして、普段より無口だ。

「お医者さんが待っているみたいだよ……」

「説明を聞くのが怖い……」

ようやくエレベータが到着して、五階東病棟に行く二人。五階に到着すると、ナースステーションが目の前にあり、そこで、看護師たちが立ち働いている。沙織が、ひとりの看護師を呼び止めた。

「あの一、霜田拓也さんのお見舞いに来ました、高槻と服部です。看護師さん？」

「まあ、あなたたち、待ってたわ。お疲れさま。先生が、医局からもうじき戻って来るから、その部屋で待機してくれないかしら」

二人「はい」

S I C U（外科的緊急治療室）の横にある、窓のない四畳半程度の別室に通された。ここは、入院患者の家族に対して、医師が病状を説明する時に使う部屋だ。沙織と美月は、パイプ椅子に腰掛けて、じっと主治医が来るのを待っていた。そこに、霜田拓也を診察、そして、オペした外科医がやってきた。

「やあ、君たちか、霜田さんのお友達というのは……」

「はい」

「今から、霜田拓也さんの怪我について説明するので、落ち着いて聞いてね」

「は、はい」

医師による説明とは、次のようなことだった。まず頭は、軽い脳震とう。肩は、左の肩胛骨を中心に、骨に亀裂が走っていて、脊椎も軽度の損傷で済んだが、当面、安静にしないといけないので、関係者以外は面会謝絶にしている、食事や着替えには介添えが必要だ、などとのことだった。説明は二十分近くにも及んだ。レントゲンフィルムを見せられたりして、沙織や美月は、泣きそうになった。

「ここに運ばれた時には、意識レベルは落ちていたものの、君たちの名前を小声でつぶやいていたよ。沙織ちゃん、美月ちゃん……ってね。仲良く看病するなら、看護師の言うことに従ってやってね。あと、学業をおろそかにしないこと。約束できるね。じゃあ」

「はい、わかりました」

「気をつけます……」

パタン、と扉が閉まり、二人は深いため息をついた。

◇ ◇ ◇

二人は霜田の病室に入った。一般病室に移り、麻酔から覚めた拓也が、朦朧な意識の中で、彼女たちに気づき、起き上がろうとした霜田を、沙織と美月が制した。

「あれ？ 君たち……」

「ちょっと待って、霜田さん！ 大怪我なんだから！」

「起き上がらなくていいから、ストップ、ストップ！」

「君たち……来てくれてたんだ。そして……オレ、助かったんだ……」

美月が、半べそをかきながら言った。

「そだよ、霜田さん、助かったんだよ！ は一、生きてる……」

霜田が続ける。

「あれ、沙織ちゃんも一緒だったんだ。ありがとう……」

沙織が、安堵の表情を浮かべて、返す。

「良かった……霜田さん！」

二人「うわああああん……ごめんね、ごめんね、霜田さん」

霜田が応える。

「ちゃんと、オレは生きてるよ！ ほら、落ち着きなって。泣かない、泣かない」

二人は我に返ると、ティッシュで目元を拭いたり、鼻をかんだりした。

「ほらほら……オレは、無事だよ……落ち着いて」

「すごい怪我で、オペに四時間もかかったんですよ！」

「わたしたちが毎日看病します！」

薄目を開けて、霜田が応える。

「うん、ありがとう。二人とも……」

「あなたは、わたしの命の恩人です、ありがとうございます。全力で看病につとめます！」

「助かって、本当に良かった……霜田さん……」



服部美月は、気を遣っているらしく、霜田拓也の身体を拭いたり、洗面器の水を取り替えたり、そうかと思えば、借りて来た花瓶に、売店で買った花を活け、テーブルを拭いたり、寝間着を着替えさせ、それを洗濯したりしていた。

高槻沙織が、あれよあれよという間に、美月が何もかもをやってしまうのだった。沙織は、実際の所、何も出来ずにいた。

甲斐甲斐しく霜田の世話をしていた二人だったが、特に美月は、きびきびと立ち働いていた。そんな中……。

「拓也さんのこと、もう、あきらめました。なので、美月にあげる」

「えっ？ 突然何を言い出すの？」

「さ、沙織ちゃん……」

高槻沙織は、服部美月の方を向いて突っ立ったまま、ただただ涙を流すのだった。流れる涙をぬぐいもせず。

「霜田さんに、身を挺してかばわれちゃ、もうあなたのものなのよね。……何だか……とってもお似合いだから……」

「そ、そんなことないぞ！ 霜田さんは沙織と、ずっと仲良しじゃない。沙織、きゅ、急に何を言い出すの？」

「でも、でも、わたしには、到底真似ができない……もう、あきらめるしか……」

そうして、沙織は、その場で泣き崩れてしまった。美月は、そんな沙織をなぐさめようとして、手を差し伸べたが、沙織は真っ赤な顔をして、美月を振り払った。

「あなたにわたしの何が分かるってのよ！ 放っておいてよ！」

「沙織……ごめん……」

「うえっ、うわああああん！」

沙織は子どものように、声を出して泣いた。もう何も言えなかった。ただただ、泣き尽くすことしか術がなかったのだ。五階東の病棟中に響き渡る泣き声に、何事が起きたのかと駆けつけた病棟看護師が駆け付けた。沙織と美月は、促されるように、ナースステーションに入っていった。病棟看護師が、やさしく尋ねた。

「あんなに泣いて、一体どうしたの？」

「私が悪いんです。霜田さんと、高槻さんとの間にヒビを入れたのは私です……」

「ぐすっ、ぐすっ……」

「私が悪いんです。霜田さんに構い過ぎたと思われても、仕方がないから……」

「でもあなた、一生懸命看病してたんでしょ？ 命の恩人に」

「はい……でも、沙織の気持ちも考えずに、出しゃばってしまいました」

沙織は、少しは落ち着いて椅子に座れたものの、まだ泣き止んでいなかった。黙ったまま、頬を赤らめて、涙を流し、袖でぬぐう。病棟看護師は、マグカップを差し出して、お茶を二人に勧めた。

「まあまあ、落ち着いて」

「ありがとうございます」

「す、すみません……」

「あなた、服部さんって言うの？　じゃあ、今日はもう、先にお帰りなさい」

「はい」

「今日のところは、高槻さんが看病したら？」

「わかりました。じゃあ、沙織、後はよろしく頼んだ。じゃあ、私は帰ります」

「今日のところはね、一旦お帰りなさい、ね」

「はい、どうもすみません。じゃあ、沙織、ごめんな……失礼しました……」

美月が扉を閉め、帰って行く。エレベーターホールで待っている時も、沙織のいる、ナースステーションの方を、時々横目で見ながら……。

「……高槻さん、少しは落ち着いた？」

沙織は、こくこくとうなづき、涙をぬぐった。お茶を飲み終わると「ありがとうございました」と言って、霜田拓也の部屋へ戻って行った。

「何だか……泣かせてしまって、ごめんね」

「いいんです。わたし、霜田さんとふたりがいいんです！」

「沙織ちゃん……」

当の霜田拓也は、声をかけるタイミングを逸した。この子達が、仲違いしないかどうか、とても気になっていた。

黄昏を追い抜いて

――午後、校門前で、服部美月は、携帯のメールを確認していた。ふと、こんなメッセージに、視線が止まった。

『はっとりへ 昨日、お父さんとお母さんに怒られました かばってもらった人が命の恩人の看病をするのは当然だ！ ってね 昨日は感情的になってごめんなさい 今日からもう病院へは行かないから、美月、拓也さんのこと、よろしくね 沙織』

(さ、沙織.....)

室山県立敷島女子高等学校の校門前に、一台の青い、ビッグバイクに乗った霜田 翔が現れた。彼は、落ち着かない様子で、校内の内側に目を遣っている。誰かを探しているようだった。やがて、美月が現れると、フルフェイスのヘルメットを取り、微笑みながら声をかけた。

「よっ、美月ちゃん、元気になったか？」

「翔さん.....どうして.....」

「午前の勤務が終わったからな。ここまで来た！ 兄貴が入院してる病院に行くんだろ？ 乗ってけ、乗ってけ。兄貴が会いたがってる」

「でも、わたし、恥ずかしい.....みんな見てるし.....」

「ああ、もう、うじうじ思わない！ 高速道路飛ばすから、しっかりつかまれよ！ 振り落とされて死んでも知らねえからな！」

「う、うん.....」

「じゃあ、カバンは後ろにネットをかぶせて固定して、美月ちゃんはヘルメットをかぶって.....スカートひざで挟んで、しっかりつかまれよ！」

美月は、肩まである長髪を後ろへ流し、ゴム紐で束ね、ヘルメットをロックした。カバンを後部座席付近のネットにしっかり結び付けると、ぎこちない仕草で、後部座席に座り、翔の身体にしがみついた。スカートをひざで挟むと、翔に言った。

「こ、こんなので、いいかな.....」

「上等上等！ じゃあ、行くぞ！」

「あの一、その前に、途中で岩崎サーブエリアに寄って欲しい」

「何だ、そんなことか。いいよ、お茶でもトイレでもゆっくりして」

「と、トイレって.....」

エグゾーストの音がしたかと思うと、一五〇〇CCのビッグバイクは、葱州縦貫道の室山北イ

ンターチェンジを目指していたのだった。



――放課後

「沙織は気分が優れずに早退。美月は、あの翔さんがバイクで病院まで直接連れて行った……とさ」

「なんでも、美月ちゃんは、バイクにタンデムしてたとか、他の子が騒いでたー」

「なんか、先輩お二人がいないと、調子狂っちゃいますよねー」

「そうだなー、なんというか、和菓子星人バーサス、洋菓子星人という図式がね」

「だよな、なんか部活も盛り上がらないよねー」

梨音は、うーんと空を見上げてしばらく歩きながら考えていたが、何かを思いついた様子で、ポンッと手を叩いた。

「じゃあ、あたしん家来るかー！ 業務用ジューサーミキサーも見せられるぞ！」

「またー、梨音ちゃんったら商売っ気出して……どう思う、啓子ちゃん？」

「うーん、スペースがあるので、店の前にジューススタンドが出来ていても不思議ではないと思いますが、お父さんが何て言うか……今から、お父さん同伴でいいですか？」

「おお、わたしは一向に構わぬ、構わぬ、ぬわっはっはっは」

「これはまた、美月ちゃんが露骨に嫌がるわけだわ、商売っ気のカタマリだもの……」

「今からー、とりあえず、シエスタ香枚井の啓子ちゃんのお店に行こう！」

「わかりました。ちょっと、お店に電話します……」

「わたしもー、親父いるかなー」

立花梨音、田辺啓子が、ジューススタンドの件で、それぞれの家に電話した。どうやら、親の了解を取り付けたようだった。

「二人とも、商売っ気たっぷりね……」

「お父さんの車で春名坂まで行ってくれるみたいです、是非試したいとのことで……」

「そんなら、行くぞ！ ももっちも付き合えー！」

「そう来ると思った……はいはい、付き合いますとも……」

『香枚井、紅電香枚井です。三番線の電車は、急行楠葉行きです……』



——その頃、葱州縦貫道、岩崎サービスエリアに、翔と美月のバイクが到着した。ここには、カフェも食堂も売店もあったが、翔は、自動販売機の冷たいコーラ、美月は、暖かい烏龍茶で充分そうだった。二人はベンチに腰掛けた。美月は、ストレートの長い髪を、手櫛で整えていた。サービスエリアに、夕闇が迫ってくる。

「寒くなかったか？」

「ううん、全然大丈夫……」

「『おっぱい星人』も、たまには役に立つだろう？」

「うん」

「意外と、素直なんだな、ほんとうは……」

「べっ、別に！」

「おやおや、こりゃまた失礼……」

翔は目をそらして、空を眺めていた。美月は、先程のメールを思い出して、携帯をポケットから取り出した。

「ところで翔さん……沙織からこんなメールが届いたんだけど……」

「ふーん。何か可哀想な気もする。沙織ちゃん、兄貴にぞっこんだったからね」

「わたしは、明日、どんな顔して沙織に会えばいいのか、わかんない」

「……大丈夫だって、心配ねえって！」

「……だと、いいんだけどね」

「メール打つよ。あ、美月ちゃんはカメラマンになって。オレだけ撮って」

「はいはい、行くよー、笑ってー、さわやかムース」

シャッターの切れる音がした。

「……何だよそのかけ声……ってまあいいか。それで、オレが沙織ちゃんにメールする」

「えー！ あんた、今度は沙織を取って食おうとしてるんじゃ……」

「あのなあ、オレには彼女がいるの！ そうじゃなくて、励ましのメッセージだよ。君からは何だから、オレから、君と沙織ちゃんと一緒に看病してはどうか、って提案をするのだ。どうだ、いいプランだろう」

「ありがと。意外と、優しいところあんのね……」

『沙織ちゃんへ 久しぶりです、おっぱい星人です。兄貴のことを心配してくれてありがとう。まず感謝します。それから、美月ちゃんのことだけど、沙織ちゃんのことを、随分気にしていて、明日会わず顔がないと嘆いています。交代で看病することも考えたんだけど、今度から、二人

で一緒に看病してはどうだろう。一晩ぐっすり眠って、よく考えてくれよな。じゃあ今日のところは、おやすみ。 翔』

「よし、送信っと！ どう？」

「いい感じじゃない？」

「それで行こう！」

「明日からは、沙織と一緒に。いいアイデアね」

「さあ、日が暮れる。室山北インターまであと半分だ！ しっかりつかまれよ！」

「ちょ、ちょっと待って！」

「何？」

「ちょ、ちょっとだけ、お手洗いへ」

「早ええよ。もうかよ！ さっき飲んだばっかなのに……」

「お土産に、香枚井餅も買ってくるー」

「おう！ 待ってるからな！」

◇ ◇ ◇

翔のバイクはやがて「室山北インター 出口 香枚井 椎瀬」と書かれた標識を確認すると、左ウインカーを灯して、インターチェンジを降り、一般道を県立室山病院へと向かうと、国道六〇号線を少し南下し、咲花台の病院へ到着した。

「さすがに寒いだろう」

「コート着てても寒いっ……」

「はいはい」

「メール……梨音と、沙織から届いてる……」

『美月へ 元気かい？ イエーイ！ ついに、田辺啓子ちゃんのお店に、ジューススタンドが出来ました！ もちろんジュースは、たちばなデンキの業務用でーす メロンジュースうめええ！ あ、桃花も一緒だよ また明日学校で会おうなー』

「相変わらずだね……」

そう言って、美月は翔に携帯を差し出して、メールを見せる。

「本当だ、お嬢様たちの商売上手には、参ったね」

「あ、次は沙織のぶん」

「どれどれ？」

『美月へ 先程は喧嘩腰になってしまって、本当にごめんなさい 翔さんに言われちゃった 一緒に看病すればいいじゃんって 明日からは、普段通りに、一緒に看病しましょう もう、泣いたり取り乱したりしないから 沙織』

「うーん、オレのメールが効いたかな」

「ありがとうございます。さてと、返事は……」

『沙織へ 明日からはノーサイドで 一緒に拓也さんの看病しようよ！ 一緒にがんばろう 今日はゆっくり寝なよ 美月』

「こんなところかなあ……」

『追伸 今日、おっばい星人が学校までバイクで来て、わたしをかつさらって病院まで乗せていってくれた 他意はないよ あくまで事務的に 美月』

二人は、夜間入口と書かれた自動ドアをくぐり、やがて来たエレベーターに乗って、五階東病棟まで行き、ナースステーションで、面会者の名前を記入した。彼らに気付いた看護師が、二人を呼び止めた。

「霜田さんの弟さんと、確か……服部さんですよ。ご案内します、どうぞ」

「おいおい、兄貴個室かよー。面会謝絶だつてさ」

「関係者以外は立ち入り禁止だそうです」

開け放された扉。カーテンを開けると、そこには、美月の命の恩人、霜田拓也が横になっていた。突然の弟の訪問にいささか、驚きを隠せない様子。

「だ、誰……？」

「……起きちゃ駄目！」

「よう、兄貴、久しぶり。服部さん、バイクと一緒に乗せて来たんだ」

「来たんだって……お前……」

「こんばんは、霜田さん！ 翔くんったら、案外気配り上手でねー、わたし、明日は沙織と一緒に、また仲良く霜田さんの看病をすることになりました」

「そっか……一時期は、何かあったのかと思って、気が気じゃなかったよ」

「ご、ごめんなさい……」

「でも、こうして、みんなに看病してもらってるのも、うれしいんだ」

「霜田さんは、わたしの命の恩人です、助けて下さって、ありがとうございました！」

「うん、うん」

ステンレス製の配膳台車には、すでに夕方の病院食が並べられていた。

「じゃあ、美月ちゃん、兄貴に晩飯食わせてやれよ、俺がやると絵面的に変だからさ」

「じゃあ、霜田さん、どうぞー」

「うん、おいしい、おいしい」

「良かったー」

霜田 翔が、忘れていたエピソードを思い出した。

「あ、そうだ。美月ちゃん、例の携帯メール、兄貴に見せてみるよ」

「あ、ああ、そうね。はい、霜田さん」

「何々？ 沙織ちゃんが親に叱られた？」

「そうです」

「で、翔、お前が演出して、仲直りさせたと……」

「そういうこと」

「じゃあ、これからは二人とも仲良くやってくれるんだ！」

「はいっ！」

「は一、良かった、助かった……オレ、ちょっと責任感じててさー」

「ごめんなさい」

「いって！ いって！ もう、無事に解決しそうじゃないか！」

「そうですねー」

美月が、忘れていたお土産を渡すことにした。

「あの、これ、つまらないものですが、どうぞ」

「おー、ありがとう。香枚井餅かあ。後で美味しくいただくよ」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、俺らはこれで」

「お邪魔しましたー」

「ああ、ありがとう！」

翔は美月の方へ向き直って、彼女に尋ねた。

「美月ちゃん、確か、榛名天神駅前の和菓子屋さんだったよな」

「ええ」

「なら、そこまで送るよ」

「いや、遠慮します。一人で帰れます。だって電車がありますし……」

「オレに遠慮なんかすんな。俺のバイクに、乗ってけ乗ってけ！」

兄が、心配そうに声をかける。

「おい、翔、あんまり無理矢理乗っけようとするなよー」

「分かってるって、じゃなー兄貴」

「お邪魔しましたー」

◇ ◇ ◇

翔のビッグバイクは、咲花台から、香枚井を経て、そこから北へ、春名坂を駆け上がった。ここは、春名坂のいちばんてっぺん、榛名天神駅前だ。

「翔さん、今日は本当にありがとうございました」

「らしくないぞ。だって、素直にお礼なんか言うから……」

「……べ、別に、送ってもらって、嬉しいだなんて、思わないんだからね！」

「よし、その調子！ じゃあ、明日も頑張れー！ じゃなー」

「さよなら！」

エグゾースト音を響かせつつ、霜田 翔のバイクは、紅電の跨線橋を渡り、国道六〇号線へと南へ去って行った。

お見舞いふたたび

ある日曜日。美月と沙織は、病棟の給湯室で、お茶を汲み、コップを洗ったりしていた。

「なあ、沙織、やっぱり拓也さんは、沙織のことが好きみたい……だぞ？」

「……私の口からは、何とも」

「本当だってば！ 何かちゅうと、沙織ちゃん、沙織ちゃん言ってるし……」

「……気のせいじゃない？ 助けてもらったの、はっとりだし」

「あれは、たぶん駅員としての義務感だと思うな」

「そうかな……」

「あ、夕食の配膳台車が来た……沙織、行って来い！」

「ええっ？ はっとりはいいの？」

「お前に譲るって……さあさあ、拓也さんに食べさせて来なさいってば、ほら！」

「ありがと……ね、はっとり……で、でも……」

「うじうじしない！ 女は笑顔と度胸！ さあ、行った行った！」

「もう、強引ね……」

晩の食事は沙織が持ち、お茶の入った小さな急須は美月が持つことにした。

「霜田さん、ご飯ですよー」

「はい、マグカップで一す」

霜田拓也は、ギブスのはまった左肩が邪魔そう。少し痛みに顔をしかめながらも、何とか、彼女たちの方へ振り向いてみせる。

「おおー、サンキュー、ご飯かあ。ちょうど、お腹が空いていたところだったんだ。ありがとう」

「無理しないで！ 霜田さん！」

「お願いします、安静にしてください」



高槻沙織は、窓際に花瓶の花を生けていた。服部美月は、お茶やお茶菓子を用意したり、し尿便の中身を捨てに行ったりしていた。甲斐甲斐しく、きびきびと、拓也の看病をしていた。

「はあ〜っ、終わったー」

「終わったな、やっど」

「あらあら、二人ともお疲れ様！」

二人「看護師さん！」

「ありがとうございます」

「二人とも、今ではすっかり仲直り。りんごジュース買ってきたわよ」

二人「いただきます！」

拓也「あ、どうも済みません、じゃあ、ついでに、頂戴します」

拓也、沙織、美月が、同じりんごの缶ジュースを開ける。

「くーっ、冷たくて美味しい」

「健康に良さそうだな」

「あー、疲れた身体にしみわたるよ……冷蔵庫に生ビールねえかなー」

「霜田さん、怪我人はアルコール禁止です！」

「ああ、済まない、ごめんごめん、いつもの癖で……」

「霜田さんにとっては、冷蔵庫イコール、生ビールなんだよねー」

「身体のためですよ、謹んでください！」

「は、はい、わかりました」

ふたりは申し合わせたように、霜田拓也の介添えに当たる。

「霜田さんは、右腕大丈夫ですか？ 食事もばっちり自分で出来ますか？」

「いや、ちょっとまだ無理っばい……」

「じゃあ、スプーンで行きまーす。ホワイトシチューですよ、はい、あーん」

「あーん」

「ご飯も食べましょう……あ、今晚のデザートは、りんごですよー」

といった感じに、仲睦まじく「はい、霜田さん」「あーん」を繰り返すのだった。傍目で見ている、やれやれー、と思ったのは、勿論、服部美月。全部食べさせるのに、かれこれ三十分は経過しただろうか。霜田の食器はすっかりカラになった。

「おおー、霜田さん、全部食べ終わりましたー！」

「済んだね、沙織、良かったじゃんか」

「じゃあ、わたしたち、地下の食堂に行っておまーす」

「行ってらっしゃい」

「じゃ、霜田さん、後ほどー」

◇ ◇ ◇

沙織と美月は、地下の食堂付近を歩いていた。

「やだ、あっちに霊安室がある……」

「もう、はっとりしたら縁起でもない、こっちに購買あるよ、雑誌でも買おうよ」

「霜田さん好みの雑誌って、こんなのかな」

「いやー、こっちのファッション誌でしょう」

「競馬新聞もあるぞ」

「やだー、拓也さんは、確かギャンブルやらないはず」

「じゃあ、後で何か買ってくるか！」

やがて、沙織と美月は、食事を共にするのだった……。

「それがね、婦長さんから聞いたんだけど、霜田さん、次第に良くなっているみたい」

「ほー、そいつは良かった」

「お待たせしました」と、店員から差し出された、沙織の親子丼と、美月のカツ丼。

美月は、沙織に気を遣って、カツの一切れを、親子丼の上に乗つけた。

「み、美月はいいの？ 私にくれるの？」

「鶏ばっか食ってんじゃない！ もっと元気出せ、元気！」

「う、うん、ありがとう……」



五階東病棟に戻った、沙織と美月。沙織の手には、新聞と週刊誌。美月の手には、みかんと市販のお菓子。

「霜田さーん」

「戻って来ました！」

「はい、新聞と週刊誌です」

「元気になるように、はい、みかんとおやつです」

「おおー、ありがとう！ お金出そうか？」

「ちょーっ！ 霜田さん、怪我、怪我！」

「お金は結構ですから、起き上がると身体に毒です！」

「ああ、ありがとう……ごめんね」

「まあまあ、そう気を遣わずに」

「そうそう、元気になることが、今の霜田さんのお仕事ですよ」

「お仕事かあ……」

「じゃあ、私たち、これで失礼しますー」

「頑張って治してくださいね」

「おお、じゃあねー、また今度！」

紅電咲花台駅に到着し、下りの急行電車を待つ二人。

「ところで沙織、何か忘れてないか？」

「えー、何が？」

「期末テストだと言っているー！」

「期末……そういえば、もうそんな時期かも……」

「はああ、プリントもらっといて、もう忘れてるし……」

「どうすんの、はっとり？」

「特訓じゃあー！ わたしん家で勉強の大特訓だー！」

「ええっ！ 土日が……わたしの土日がつぶされてゆくー」

「沙織んちに寄るから、身支度をして、着替え持って、霜田タクシーで一気に坂の頂上へ行く！

タクシーチケットあるんだろ？」

「ある、あるある……わ、わかったから、どうか落ち着いて……」

「看病にかまけて、成績落としてちゃ、駄目だろ？」

「家に電話かける……」

相も変わらず、テストの度に、美月の家へ呼び出されては、みっちり勉強させられる羽目になる沙織だった。

「はああ……勉強かあ……」

沙織は、深い深い溜息をつくのだった……。

冬がはじまるよ

朝の葱北本線、香枚井駅ホームで掃除をする、霜田 翔は、なんだか憂いを漂わせていた。沙織たち四人は、そっと近づいて、翔の耳元で、わざとからかうように声をかけた。

「霜田さーん」「翔くーん」「おっぱい星人」「スケベ」「まぬけー」

散々悪態をついたが、翔からは何の反応もない。返事がない。やおら、くるっと振り向くと、ギャグマンガのような涙を流して言った。

「彼女に……振られた……くうっ……」

「どうしたのよ、情けないわね」

「何か、思い当たる所があるとか……」

「このあいだ、病院に美月ちゃんをバイクでタンデムして連れて行ったところを、咲花台の駅前で彼女に目撃されて……」

「うわあ……」

「ああね、不運ってというか、日頃の行いと言うか……」

「うぐっ、『もう知らない！ あんたとは、もうおしまい！』って言われてさー、とほほー」
一同「は～あ」

美月は、腕組みをして考えた。

「だから電車でも行けたのに……なんか責任感じちゃうなー」

翔は立ち上がって、美月の手を取り、おもむろに告げた。

「じゃあ、責任、感じていただけましたでしょうか！ それなら、俺と交際を……」

美月は、グーで翔の頬を殴っていた。

「敷女の校則なめんじゃないわよ！ 軽々しい……」

「い、痛ってえ……」

「そんなこと言うなら、おととい来なさい！」

「罰当たり」

「まぬけー」

「さあ、行こう、行こう……」

「帰りは紅電に乗ろうねー」

「そうだな、変態おっぱい星人がいるこの駅は、危ない危ない」

「そうだねー」

「帰りに、服飾材料、シエスタ香妝井で買っていこうか」

「そうしましょう」

「賛成一！」

置き去りにされた格好の霜田 翔は、ホームで途方に暮れていた。

「ま、待ってくれ一、誤解だ一！」

そこへ、通りがかった駅長が、翔の脳天に空手チョップを炸裂させた。

「霜田、仕事中にサボるな」

「は、はい、すみません……」

◇ ◇ ◇

昼休み、人工芝が敷き詰められた校舎の屋上で、お弁当を広げていた美月は、携帯電話を取り出すと、メールを打ち始めた。

『翔さんへ わたしは、勉強が忙しいし、校則も厳しい。実家も旧家で厳しい。でも、あんたが改心してくれるなら、スケベ心を起こさないと誓うならば、高校卒業後に付き合っただけでいいからいいんだからね。大学生になったら、わたしのリストの、サ行のうちの一人になら、加えてあげても良くてよ、じゃあね。 服部美月』

お弁当に口をつけた後、今度はもう一人、気になる人物にメールを打ち始めた。

『拓也さんへ お身体大丈夫ですか？ 病院で休職扱いとなっていることに、胸を痛めています。かばってくださって本当にありがとうございました。何度お礼を申し上げてもいいかわかりません。で、大変、言い出しにくい話ではありますが、沙織を大事にしてあげてください。わたしからのお願いです。それでは、また。 服部美月』

そこへ、いつものメンバーが勢揃いした。沙織、梨音、桃香、啓子だ。

「よっ、はっとり！」

「美月ったら、探したぞ一。珍しいな、屋上で弁当なんて、寒いのに一」

「声をかけてくれたら、いつでもついて行くのに」

「そうですね、水くさい」

「いや一、ちょっと野暮用があつてな。携帯電話いじってた」

「誰と一？」

「うちのお父さん」

「つまんねー、めっちゃつまんねー」

「浮いた話の一つもないのかな、はっとりには」

「クリスマス前に、彼氏ゲットだぜ！」

「あー、わたしにはないね」

「本当かなあ」

「勉強と仕事の手伝いで忙しいっちゃんじゃ、ボケい！」

「あんまりだー」

「ひどいよー」

「沙織、桃香、ここでマジ引きしない！」

美月は、本当の事は秘密にしようと考えた。もしみんなに言ったら、それは利口ではないと考えたからだった。なので、彼女は心の中で、少しだけほくそ笑んでいた……。



あれから一ヶ月。霜田拓也が退院する日がやってきた。真新しい駅員の制服に着替えた拓也は、ナースステーションから祝福を受けている。傍らには、霜田の父、浩二郎と、高槻沙織と、服部美月。そして、拓也は、医師から差し出された、事故当日の夕刊を受け取って読んだ。新聞の見出しには、こうあった。

『紅電香枚井駅で転落事故未遂 女子高生を身を挺して助ける駅員』

「おおーっ！ オレと美月ちゃんの写真が載っている……誰が撮ったんだろう……って、『写真提供・立花梨音さん』だっってー？」

「梨音ちゃんは、スクープ記者にも向いているのかも知れないねえ……」

「梨音かあ……」

「まあまあ、完治して良かったじゃないですか」

「先生、お世話になりました」

二人「ありがとうございました」

「これ、看護師一同からの花束です！」

「うわあ、サプライズ！ ありがとうございます！」

「じゃあ、みんな元気で！」

看護師一同「元気でねー」

「さよならー、お世話になりました」

「ありがとうございました」

「お世話様でしたー」

無事退院した霜田拓也は、父親の浩二郎が運転するタクシーの車両の前側に座る。そして、沙織

と美月は、後部座席に座るのだった。

「命の恩人です、霜田さん、良かった……無事に退院できてよかった……」

「美月ちゃん、鉄道員として、当然のことをしたまでだよ」

「ワシの息子にしては、上出来だな、名誉の負傷だ」

「霜田さん、カッコよかったよ！」

タクシーは一路、紅電香枚井駅、香枚井三丁目の沙織の自宅、高槻洋菓堂で、沙織を下車させ、そして、榛名天神へ登る坂道を、美月の実家、服部宝珠庵へ向かって登っていった。

「なあ、服部さん」

「何でしょう」

「拓也は自慢の息子です。身体を張って、あなたを助けたのだから、たいした物だ」

「拓也さんのおかげで、助かりました」

「こうして、みんな一件落ち着いたわけだ」

「はい、そう思います……」

「じゃあ、着いたよ、お店ここだっけ」

「はい！ ありがとうございます！」

「うん、うん、こちらこそ！ おやすみ！」

やがて、霜田タクシーは、紅電榛名天神駅前のロータリーをぐるりと転回した後、春名坂を下って行った。

◇ ◇ ◇

――翌朝、紅電榛名天神駅前、バス乗り場にて。

（紅電香枚井駅……ど、どんな顔して霜田さんに会えばいいんだろう……）

『室山三四系統、榛名天神駅発、春名台団地、春名坂小学校経由、紅電香枚井駅行きです。料金は降車時にお支払い願います。発車までしばらくお待ち下さい。室山三四系統……発車します』

バスは、なだらかな下り道を降りて行った。そして、春名台団地。柏原桃花の家の近くの停留所。

「おはよう、美月ちゃん！」

「やあ、おはよう、ももっち。今日は一人でお着替えできたか？」

「うん、多分大丈夫だよ……って、今朝は、霜田さんに会うんだよね」

「そこなんだが、どんな顔して会えばいいのか……うーん、悩ましい」

「あのさ、美月ちゃん、いつも通りでいいんじゃない」

「というと……」

「変に肩の力が入っていると、霜田さん、また心配しちゃうかも」

「言えてる……」

「自然体だよ、美月ちゃん！」

「そうだな！」

バスは、春名坂小学校前で停まった。たちばなデンキがある、立花梨音の家の近くの停留所。

「おーっす！ 諸君、おはよう！」

「おはよう、梨音ちゃん！」

「な、なあ、梨音？」

「なんだ美月い。何か相談でもあんの？」

「実はさあ、紅電香枚井駅に、霜田拓也さん、いるだろ？ ど、どんな顔して会えばいいのかって」

「なんだなんだー？ らしくないぞ美月い。恋の悩みかー？」

「違う！ ただ、霜田さん、今日は、初出勤だろ？ 一体、どんな顔して会えばいいのか……って」

「あん？ 別に普段通りでいいんじゃない？ つーか、美月も乙女だったんだなあ、そんなことで悩むとは」

「そんなこと……って。わたしには大問題なんだ！」

「大問題ねえ……」

バスは坂を降り、交差点を右折すると、高槻洋菓堂がある、高槻沙織の家の近くの停留所に停まった。

「おはよう、みんな！」

「おっす、沙織！」

「沙織ちゃん、おはよう」

「おはよー、沙織い」

「ちょっと何？ 美月、顔色悪いわよ……もしかしてバス酔い？」

「それもあるんだけどさー、霜田拓也さんに、どんな顔して会えばいいのかって、私にとっては大問題なのだ」

「そんなの簡単じゃない。女は笑顔と度胸って、いっつも私に言ってるじゃないの。それでいいと思うよ」

「いやー、普段ならそれでいいと思うんだが……今日は、霜田さん、初出勤日だろ？」

「笑って、笑って、こちょこちょこちょ！」

「ぶっ、く、くすぐったい、こら、やめろ沙織……あはははは！」

「これでよし。笑える準備はできたかな？」

「は一、沙織には敵わないよー、いきなり脇の下くすぐるんだもん……ひー」

『次は、終点、紅電香枚井駅前、紅電香枚井駅前です。どなた様も、お忘れ物無きよう、お支度下さい』

「じゃあ、お二人さん、いつもの笑顔で！」

「沙織ちゃん、美月ちゃん、頑張ってー」

「うん、そうするね！」

「あ、ああ、愛嬌、愛嬌か……って、大丈夫かなあ……」

バスのドアが開く。一斉に、元気よく、女生徒たちは降りる。そして、紅電香枚井駅の改札目指して駆け込む。「今日の霜田はプラットホームだよ」と聞かされて、若干嫌な思い出がよみがえるが、そんなことはお構いなし。霜田拓也のアナウンスが聞こえる。

『えー、今度の二番線、急行・海浜神崎行きです。停車駅は、咲花台、室山、岩崎、敷島、牡鹿沢、神崎、終点、海浜神崎に止まります。到着までしばらくお待ちください』

「霜田さーん」

「や、やあ！ おはよう！」

「はいっ！」

「朝っぱらから、女子高生に囲まれて、オレ、照れちゃうなあ……」

「きゃははははは！」

「それを言うなら、幸せだなあ……でしょ？」

こうして、霜田拓也は、駅係員としての日常を回復した。

雪が落ちて来た！

ここは、服部美月が住む近くの、榛名天神社。学問の神様をお祀りしている神社だ。さっそく、沙織、美月、梨音、桃花の四名は、榛名天神社で初詣中。最前から、粉雪が舞って来ている。今日は一月三日、お正月の三が日だ。これはうっすらと雪化粧をしそうな空模様だ。みんな、セーターやらコートで完全防備している。

「じゃーん」

「沙織、なにそれ？」

「これは、わたしが我慢がまがまで貯め込んだ、一円五円貯金箱の中身なのです！ だから、お賽銭！」

「うわあ……軽く千円ぐらいありそう……チャリティには募金しなかったのか？」

「他人の幸せを願うなら、まず自分が幸せでなければなんないの。だから、お賽銭！」

「で、沙織、そんなにお賽銭奮発して、何を願うんだ？」

「霜田拓也さんと永遠に結ばれますように、だ、なんちって」

「は一あ、沙織はすぐこれだ……梨音、桃花は何を願うんだ？」

「わたしは、商売繁盛！」

「わたしは、受験に合格……とか」

「梨音！」

「はい！」

「緊張感ちゅーもんがないのか！ 何が商売繁盛だ！ 大学進学だろ普通！」

「いやー、わたしはコンピュータの専門学校行く気にいるから、その点心配ない」

「じゃあ、みんな、お賽銭投入！」

沙織のお賽銭の投入の仕方が、半端ではなかった。まるで、豆まきのように、右手で一円五円をつかんだか、と思うと、何度もお賽銭箱にぶちまけるのだった。後の三人は、ふつうに十円とか、五十円とかをお賽銭箱に投げ入れて、鈴を鳴らしていたが、沙織は、まだお賽銭がぶち込め切れていなくて、まだ投入を続けていた。袋を逆さまにして、一円残らずぶち込んだのを確認してから、祈った。

梨音が言った。

「なあ、あそこで絵馬書くところがあるぞー、行くぞ皆の者ー！」

「おーっ！」

「やれやれ……」

「元気だねえ、梨音ちゃんって、相変わらず……」

絵馬は一枚五〇〇円で、境内で巫女さんが売っていた。買い終わると、四人組は、設えられたテ

ーブルの上で、油性のフェルトペンで願い事を書き始めた。

『第一志望 室山大学教育学部英文学科合格祈願！ 高槻沙織』

『室山大学教育学部国文学科、合格必勝祈願！ 服部美月』

『今年もお店の売上げが上がりますように たちばなデンキ 立花梨音』

『お引っ越ししても、みんなとの友情が末永く続きますように 柏原桃花』

「どれどれー？ 桃花ちゃん、お引っ越しするの？」

「うん、お父さんが、東京の放送局へ転勤になるから、それで……」

「切ない、ああ、切ないよわたしはー」

「梨音、わざとらしい……」

「それで、引っ越しはいつなんだ？」

「来年の四月……だから、東京の方面の大学を受験することになるよ」

「旅立つ時は言ってくれ！ 新幹線の乗り場まで迎えに行くからな！」

「みんなでお見送りしよう！」

「そうだな！」

みんなが、また巫女さんのいる天神社のお守り売り場に並んだ……。

「お守り買ってくか……おみくじ引くと、凶が出たら嫌だしー」

「そうだね、恋愛成就っと！」

「言えてる、学業成就っと！」

「わたしは、商売繁盛かな……」

「わたしは、家内安全、かなー」

一通りお詣りを済ませた後で、美月がみんなに提案した。

「わたしん家で、和菓子と甘酒おごるから、来なよ！」

「まさか、あずきは入ってないでしょうねえ、美月」

「あ、ああ、まあ、沙織には特別食の羽二重餅の訳あり品てとこで」

「ねえねえ、美月ちゃん、わたしたちには？」

「ぎっしり詰まったきんつば！ どうだ、グレートだろう？」

「うんうん！」

新雪を踏みしめながら、紅電榛名天神駅前の「服部宝珠庵」で、お茶会ならぬ、甘酒会が開かれることになった。

◇ ◇ ◇

美月「ただいまー」

三人「お邪魔しまーす」

「あらあら、皆さんお揃いで！ あけましておめでとう」

「おめでとうございます」

「さあさ、雪を払って、上がって上がって！」

ここは服部宝珠庵の二階、すなわち、美月の部屋だ。みんな、震えながら、こたつに足を突っ込んでいた。

「なんつーか、いつも思うんだけど、女っ気の欠片もない部屋だよね……」

「つまんねー、めっちゃつまんねー」

「悪かったな、梨音！」

「ねえねえ美月ちゃん、今度クレーンゲームで釣ったお人形持って来るよー」

「いや、桃花、そういう乙女チックな趣味はわたしには無くてなあ……」

障子戸が開いて、甘酒とスイーツを、美月の母が持って来た。それから、美月の母は、思い出したかのように言った。

「あ、美月ー、お母さんね、おせちも用意したから、みんなで召し上がれ」

「うわー、本当ですか！」

「サービス満点、さすがは美月のお母さん」

「いただきちゃってもいいんですかー？ 何だか高級そう」

「ええ、いいわよ、今年はお煮染めを特にたくさん炊いたから、残り物でごめんね」

一同「いただきます！」

「美月ー、これぞ、お袋の味ってーやつだ」

「梨音、何を訳のわからんことを……」

◇ ◇ ◇

話題は、むしろ柏原桃花の動向に関心が集まっていて、今後どうするのが知りたい気持ちで一杯だった。

「で、東京のどこに引っ越すんだ？」

「えーっと、実家だから、新小岩ってところ。総武線と総武快速線が止まります。駅の南側からバスだから、東京都江戸川区……になるのかな」

「さぞかしハイソな街なんでしょうな、おそらく」

「いやいやいや、そんなことないよ、庶民的で、みんなチャキチャキしてるよー」

「ああ、また室山県から優秀な人材が流出してしまう……」

「美月、しょうがないでしょ、ももっちの故郷なんだし、東京は」

「寂しくなるなあ……」

「受験も、あっちなんだろう？」

「うん、おじいちゃん家で合宿です！」

「泊まりに行ってもいいかー？ わたし、一度でいいからトーキョーブックマークしたかったんだー」

「うーん、無理をすれば泊められなくはないけど、おじいさんとおばあさんが住んでるから、たぶん落ち着かないと思うよー、狭くて」

「なあ、桃花、秋葉原まで近いのか？」

「うん、電車で十五分ぐらい……」

「うおおお、わたし、眼鏡ッ子メイドになれるかなあ！」

「梨音はご主人様に尽くすより、ご主人様から巻き上げそうだしな、現金を」

「なにをおっしゃいますか、皆の衆一。わたしゃそんなに商売汚くないよ」

「あの……基本的に、梨音ちゃん見て、萌えるお客さんいるのかなー」

「うーん」

(他のみんなは、脳内で梨音のメイド姿を想像してみた……)

「ま、イマイチってとこで……」

「もう一つだよね……」

「あ、あんまりだー」

桃花がひざで立ち上がって、みんなに告げた。

「皆さんに重要なお知らせがあります。わたくし、柏原桃花は、松の内を明けた八日から、冬期講習に東京へ一旦行って来ます！」

「電車のダイヤを教えてくれ。みんなと一緒に見送りに行くから……のぞみ何号かな？」

「うーん、午前中なんだけど、まだ切符取ってない……」

「とにかく、がんばって来いよ、桃花！」

「うんっ！」



葱北本線、香枚井駅では、指定券販売コーナーで、てきぱき働いている、霜田 翔の姿があった。

「次のお客様どうぞ……って、沙織ちゃんに、美月ちゃんに、梨音ちゃんに、桃花ちゃん！ どうしたんだい？ どこかみんなでお出かけ？」

「いいえ、わたしだけです。大学は関東地方の大学に進学するので、冬期講習に東京へ行く事になって……なので、香枚井から新小岩までの切符をください。大人二人、指定席、禁煙で……」

」

「マジで？ そっかー、桃花ちゃんは、もともと東京の子だもんな、で、時間は……」

「のぞみ十四号で……」

「うん、わかった。えーっと、香枚井から、東京都区内まで、えいっ！」

専用端末から、切符が吐き出されて来た。緑色の切符である。

「じゃあ、気をつけて行っておいで。美月ちゃんたちも、一緒に見送るんだぞー！」

「わかってるわよ、変態！」

「へ……変態……変態って一体……」

◇ ◇ ◇

ここは、葱北本線と、山陽新幹線の新室山駅。随分葱州神崎寄り……つまり、浜側にある駅だ。

一月八日、午前九時代の新幹線のぞみ号のデッキに親子の姿があった。

「じゃあ、わたしたちはこれで一旦帰らせていただきます」

「みんなー、バイバーイ！ また帰って来るからね！」

三人「桃花！」

『えー、二十三番線から、のぞみ十四号、東京行き、まもなく発車致します。お見送りの方は、車外へ出られまして、柵の外にてお見送り願います……乗車、完了……』

車外へ手を振る桃花と、桃花のお母さん。やがて、発車のベルが鳴り終わる。

「バイバイ……」

「元気でね……」

「達者で暮らせ……」

電車の窓越しに、涙を拭いたり、うんうんうなずいたり、まだまだ敷島女子の女生徒は、涙もろい年頃だった……。

やがて、かすかな余韻を残して、小さな窓は、東へ、東へと向かうのだった。電車を追いかけて走り出した三人組だったが、新幹線に追いつける訳もなく、途中で息を切らして、ホームの端で、電車の最後尾を見送るしか、手立てがなかった……。

「桃花……桃花……ももかあー」

「梨音ちゃん……」

「中学校からの大親友だったからなあ」

「ももか、ももか……」

「はいはい、泣かない泣かない！ 冬期講習終わったら帰って来るんだし……」

「さ、ひとまず帰るか！」

服部美月と高槻沙織に挟まれて、立花梨音は、鼻水をすすりながらまだ泣きじゃくっていたが、その後、新室山駅の甘味処で回復した梨音の涙はもう乾いていた……。

「えへ、このあんみつ、美味しい♪」

「現金な奴ー」

「えへへ、えへへ」

「さっき泣いたカラスが、もう笑った、って感じよねー」

「ところで沙織、おぜんざいは食わないのか？」

「まるっとあげます。あずきアレルギーなんです」

「知ってます」

「あら、やるわねー、後ほどご自宅に、チーズケーキを贈らせていただきますわ」

「沙織、わたしが悪かった。どうかそれだけは勘弁！」

「じゃあ、杏仁豆腐頼もうかなー」

「食欲旺盛だなあ、オイ」

在来線（葱北本線）に乗り換えて、新幹線よりは、ゆっくりとした快速電車に乗って、三人は香枚井駅まで帰るのだった。

みやけ坂46がやって来た！

■みやけ坂46がやって来た！

沙織「ねえ、はっとり」

美月「どうしたの？ 深刻な顔して」

沙織「あの一、その一」

美月「何があったの？」

沙織「みやけ坂46のオーディションに、姉が勝手に応募して！」

美月「は！？」

沙織「三次選考まで行きそうなの！ 写真判定クリアして！」

美月「……おめでとう……って、あんたねー！」

沙織「はっとりとの約束、守れるかなあ」

美月「はあ～あ、沙織ったらすぐにこれだ。敷女の高校生として、恥ずかしくないの？」

沙織「そ、そう言われても……」

美月「アイドル学校じゃないんだし、少しは自重しろ、ってんだ全く」

沙織「断ろうかな……」

美月「待って、それは勿体ない。沙織の人生なんだし、それは沙織が決めるよ」

沙織「どうしよう……東京に来てください、ってお願いのお手紙が」

美月「えー、貴殿は……優秀な人材につき、東京・赤坂のスタジオまで来てください……って、この手紙、本物？」

沙織「うん、本物……」

美月「はあ～あ……じゃあ、宿泊滞在はどうなるのよ」

沙織「とりあえず、桃花ちゃんのおじいさんおばあさんのお家、かなあ……」

美月「総武本線、新小岩？ お家の方に迷惑じゃない？」

沙織「それもそうね……」

美月「服装は？ 何か着るものあるの？」

沙織「うん、それに関しては心配ない。ウォークインクローゼットに一杯あるから」

美月「さすがは金持ち……」

沙織「衣装の心配より、わたしの心配してよー！ 困ってるんだからさあ！」

美月「でも、みやけ坂の競争率って、すごく高くない？ 受けて来るだけ受けて来れば？ 応援する」

沙織「う、うん。ごめんね、はっとり。ちょっと、桃花ちゃんに電話するー」

美月「あー、はいはい」



沙織「もしもし、桃花ちゃん？ わたし。高槻です」

桃花「沙織ちゃん、どうしたの？ 土曜日の朝から」

沙織「それがさー、聞いてよお、みやげ坂46のオーディションに、姉が勝手に応募してさー」

桃花「ふむふむ。それから？」

沙織「来月初旬に東京の赤坂で第三次選考が行われますので、来てくださいねって」

桃花「えー！！ ちょっと待って、あのみやげ坂でしょ？ TVに出てる」

沙織「そう。そうなの。で、いま、はっとりが家に遊びに来てて、相談してたわけなんだけど」

桃花「それはそうだね。相談したくもなるね。あの宝塚系のお姉さんが勝手に決めたんじゃ？」

沙織「断ろうか、行こうかどうしようか……」

桃花「行くんだったら、応援するけど……わたし、東京・神奈川・千葉に親戚多いから、お願いすれば、従姉の家とか泊められなくはないけど……」

沙織「行こうか、どうしようか……」

桃花「行っておいでよ。多分、競争率高くて、あんまり受かんないと思うけど」

沙織「たしかに」

桃花「まあ、ダメもとで、親戚中に電話かけるから、首都圏のどこかに泊められなくはないと思うよ」

沙織「助かります、桃花さまー」

桃花「えっへん！」

沙織「ありがとう。助かりました。じゃあ、またねー」

桃花「うん、またねー」

美月「電話、済んだかー」

沙織「うん、何とか桃花ちゃんの親戚のどこかのお家に泊められなくはないってさ」

美月「ほー、それは良かった。で、桃花は何て言ってた？」

沙織「多分、競争率が高いから、受からないだろうけども、って」

美月「そりゃそうだね、わたしと同意見だ。ダンスもあるし、ヘアスタイルだって、前髪決めたりとかさ、いろいろあるじゃない、ほかの地方の子とうまくやれるのか、とか、いろいろね」

沙織「は一あ、ごめんね、はっとり。相談に乗ってもらって……」

美月「もう、相談終わり？ それであなた大丈夫？」

沙織「だいじょうぶ、じゃ、ない……」

美月「沙織の、一生の大勝負。わたしもたまには東京で遊びたいしな。よし、いっちょ付き合うか！」

沙織「えー！ 室山から東京だよ！ だいじょうぶ？ はっとり……」

美月「親に電話して、許可取って来る。桃花にも電話する、2人泊められないか、って」

沙織「さすがははっとり！ ありがとうね。ごめんね。わたしら姉妹のわがままで」

美月「それでさ……」

prrr... prrr...

沙織「はい、沙織です。って、桃花ちゃん？ それがね、はっとりも付き添ってくれるって」

桃花「えー！！ 二人ですかー。マジでー」

沙織「うん、ごめんね急に。いま、はっわりに代わる。ちょっと待ってて」

美月「もしもし、桃花か。ごめんな、急に。ちょっと沙織一人だと心配で仕方がないんだ」

桃花「それはわかったけど、家が広いぶん、ちょっと遠くなるよ」

美月「どこ？」

桃花「海老名」

美月「神奈川県海老名市かー。新宿までは少々あるなあ」

桃花「本当に一緒に行く気？」

美月「ああ、沙織が気の毒だ。それに、わたしもたまには東京で遊びたいし」

桃花「美月ちゃんが、実はここまでミーハーだったとは.....」

美月「あのねえ、保護者。沙織の保護者なの、わたしは。だからお願い、一緒に泊めて！」

桃花「はー。わかりました。わかりましたってば。もう一度海老名の親戚に電話するー」

美月「助かります、桃花さん」

桃花「えっへん！」

美月「それじゃあ、また連絡頂戴ね」

桃花「はーい」

◇ ◇ ◇

沙織「ふー、やれやれ」

美月「突然何言い出すのかと思えば、平仮名みやけ坂かよー。わたしゃたまげたよ」

沙織「美月、ありがとね、いろいろ心配かけた」

美月「へっ、今更何を。それに、わたしは東京観光しに行くんだから、気晴らしに。気にすんな、気にすんな」

沙織「ありがとう、ね」

美月は沙織のノートパソコンを借りて、乗換案内を検索した。

美月「行きは、室山空港から羽田空港。天空橋で京浜急行に乗り換えて、横浜。そこから相模鉄道かな？ 海老名へはそれが一番近い」

沙織「はっとり、まるでマネージャさんみたいね」

美月「誰もあんたのマネージャになった覚えはないよ！」

沙織「たしかに」

美月「で、海老名から赤坂へは、快速急行で代々木上原まで。そこで千代田線直通に乗り換えて、赤坂まで。意外とシンプルだなあ」

沙織「じゃあ、旅行会社で航空券だねえ、香枚井駅前の」

美月「なあんだ、室山空港行かなくていいんだ。これは助かる」

1時間後、沙織と美月は、香枚井駅前の旅行代理店のカウンターにいた。きちんと親の許可を取っていた。むしろ「ダメでもともと、東京観光を楽しんで」といった感じだった。

係員「では、行きは室山→羽田線、A J A 5 5 2 便、東京3泊4日……海老名のお友達の親戚のおうちだわね？」

沙織「はい、そうです、お願いします」

係員「では、鉄道の往復券も出しておきますか？」

美月「それをお願いします」

係員「羽田空港のターミナルビル、2つあるから間違えないようにね、国内線A J A カウンターのあるターミナルよ」

沙織「えー、あー、はい、わかりました」

美月「お前、大丈夫か？」

沙織「うーん、ちょっと東京は自信ない」

美月「もー、沙織ったらすぐにこれだ！ アタマフル回転！」

沙織「はあい」

係員「ふっ、ぷっ、くすくすくすくす」

二人「えっと、私たちが、何か？」

係員「だってえ、掛け合い漫才みたいで面白いんですもの、つい可笑しくなってしまうて、ごめんなさいね」

沙織「漫才！」

美月「まあ、わたしがツッコミってところかな？ で、お姉さん、帰りは？」

係員「えーっとですね、帰りが、羽田→室山線、A J A 5 5 5 便、この時間までにターミナルに着くのよ。でないと、乗り遅れちゃいます」

二人「はい」

係員「では、オーディション、頑張ってね、高槻さん、服部さん」

沙織「ありがとうございました」

美月「どうも、お手数かけました」

係員「いいえ、どういたしまして」

二人は、それから紅電香枚井駅係員の霜田拓也を訪ねた。

拓也「あれ、沙織ちゃんに服部さん、どうしたの？」

美月「こんばんは、霜田さん。それがね、聞いてくださいよー。沙織のお姉さんが、勝手に沙織を平仮名みやけ坂46というアイドルグループのオーディションに応募して、写真選考に通過して、いま、東京行きの飛行機取ったところです」

拓也「みやけ坂46って……あのTVに出てる、あれ？　すげえなあ。おめでとう、沙織ちゃん！」

沙織「姉が勝手に応募したので、まあ、ダメもとで行ってきます」

拓也「うん、頑張れよ！　応援する！」

駅長「おい、霜田、精算のお客さん待たせちゃいかんぞ！」

拓也「は、はい、済みません。じゃあ、君たち頑張れよ！　じゃあな！」

二人「はい」

駅長「まったくお前と言うやつは、最近女子高生にかまけすぎだ！」

拓也「重ね重ね済みません……」

上司に尻を叩かれ、駅務室に戻る霜田拓也を軽く手を振りながら、見送った後……

美月「あーあ、霜田さんったら、説教されてるー」

沙織「何だか可笑しいわ」

美月「お前が言うな。お前が原因だ。さあ、沙織んちに帰るぞー」

室山市香枚井は、すっかり夕刻を迎えていた。

みやげ坂46オーディション！

■みやげ坂46オーディション！

服部美月です。沙織の所為というか、なんというか、私自身の東京への好奇心みたいなものがある、いま、東京都港区赤坂に来ています。何ということもないオフィスの一室に受付があって「学生の方はお持ちの制服を着てオーディション会場にお進みください」とあったので「制服持ってきておいてよかったね」と沙織が言うんです。お手洗いでそそくさと敷島女子の制服に着かえて、いつもの私たちらしくはなったと思うんです。

わたしは、普段着でもよかったんですが、連られて着ちゃいまして。オーディションに出るわけでもなく……あれ、だれか女の人が声をかけてきます。

「あら、初めまして。MKSの溝口といいます。どうぞよろしくね」

沙織が言う。

「あ、はい」

溝口さんとやらが私に向かって言う。

「あら、あなたは？」

「はい、わたしは高槻さんの付き添いで来ました」

「まあまあ。付き添いだなんてもったいない。どう？ あなたも、この101番の名札付けて、出られてみてはいかがでしょう？」

「沙織、どうする？」

「どうするって、はっとり……こんな経験初めてだし、どうしていいか」

「どうしよう？」

「それは、もう倍率高いし、どうせ受かんないんだから、人生経験として受けちゃえば？」

「そっか、わたしごときが受かるはずないもんね。じゃあ、お姉さん、わたしも」

「はいはい、じゃあ、これ、右胸に安全ピンでよろしくね、はい中へ」

……どうする服部美月。なんか、沙織は67番。わたしは101番。オーディションに出ちゃう、出ちゃう～！！

「沙織、出ちゃう、出ちゃう～！！」

「え、はっとり、トイレはさっき済ませたはずだけど……」

「違う！ わたしまでオーディションに出ちゃうことになった！」

「まあ、受かりっこないんだし、リラックスして」

「沙織からそう言われるとは……なんか、この環境、女くさい」

「あはは」

◇ ◇ ◇

はっつりのことを、なんか巻き込んだみたいけど、ま、いいか。わたしより運動神経抜群で、やろうと思えばキレッキレのダンス踊れるし。はっつりとは番号順なので、別々のパイプ椅子に座ることになりました。順番で言うと、はっつりが一番最後になるようです。

みんなすごいです。1番さんから見てるけど、さすがは本気でアイドル目指す子ばかりです。北海道、秋田、千葉、静岡、愛知……全国各地、いろんなところから来ています。よく、これだけの女の子を集めて来られたな、という気はしないでもないです。

紫織……なんでわたしがこんな目に遭って……ま、いいか。気持ちよく受けて、気持ちよく落ちて、気持ちよく一緒に東京見物して、原宿や表参道行ったりなんかして……。

とはいえ、緊張しないはずがないじゃないですか。順番に、今在籍しているメンバーのダンスを、大型モニターで、何度も繰り返し観ます。そして、それをどこまで試験の時に再現できるか、ということをやります。ちょっとだけ観ただけじゃわかんないです。はい。

◇ ◇ ◇

この画像を観て、わたしに踊れと。無茶な。そんなアホな。できっこないでしょうが！ 幾ら体育の評価10とはいえ、音楽に合わせて踊るのは、わたしは初めてです！ はああ。沙織のせいだ。くっそー、この怒りのぶつけどころ、どこにぶつけていいか分かりませんが、私は私なりのダンスを踊って、振り付け全部無視して不合格になって、気持ちよく東京見物して、はい、さよなら。また、いつもの高校生活が待っているだけです。はいはい、かかってらっしゃい、全然緊張なんかしないんだから。

あ、もうじき沙織の番です。なんか、簡単な面接試験をしてから、席を少し外して、その場で踊るようです。沙織の後でほんとうによかった。

「67番、室山県から来た高槻さん」

「あ、はい」……

始まった。受かれ、沙織。それもまた人生だ。だ、なんちって。さあ、VTRチェックだ、VTRチェック。……この踊り、つまらない。まあ、適度に運動神経発揮して、それで終わるか。さらば、みやけ坂46。

「最後に、101番、室山県から来た服部さん」

「はい」

「あなたはなんのためにここに来ましたか？」

「67番、高槻さんの付き添いで来たら、出る羽目になりましてね。わたしなんか受かりっこないし、地元の高校の国語教師になる予定です。全然受かるつもりはないです」

◇ ◇ ◇

うわあ、はっとり、先生になる発言をするですよ、度胸あるなあ……私は受かるつもりはありませんって、審査員の方、怒らないかなあ……。

うああ、今度ははっとり、全然指定された振り付けしていないですよ。どんなにキレッキレなダンスなんですか。ある意味すごい。もう落とされる気満タンの、ある意味やけくそです。何ですか、あれは。髪をぶんぶん振り回したかと思えば、アスリート並みの機敏な動きです。はっとり、すごい……。

やがて、全員の審査が終わり、はっとりがこっちに来ます。

「やー、やってやったぜ。終わった、終わった」

「はっとり、ある意味すごいよ！ 全然マニュアル通りじゃなかった！」

「まあ、わたしは室山大学教育学部に行くっていうのが決まりだからな」

「いやいやいや、はっとりさん、あのダンスはすごかった」

「そうかな？ わたしはめちゃくちゃ体を動かただけで……あのさ、沙織」

「なあに？」

「別室で、お茶とお弁当の用意があるからって、運営の人が」

「はあい」

◇ ◇ ◇

わたしは、頑張った沙織に声をかけてみた。

「よっ、沙織。おつかれさま。お弁当の時間にしようぜ」

「汗かいたね」

「そうだな、枝毛も増える」

「いただきまーす」

「いただきます」

そうして、お弁当とお茶に舌鼓を打っていると、運営の人が何か声掛けをしているんです。

「67番さん、101番さん、ちょっと別室へ……」

え！ わたしたち？

「お、なんか呼んでるぞ、沙織」

「はっとり、何かお説教かなあ……」

「弁当、まだ食ってないけどな、半分も」

「行こう、はっとり……」

「そうだな、なんか呼ばれているみたいだし」

◇ ◇ ◇

小さな別室で、控室でしょうか。ダンスの先生が、感動したような顔で、ステキスイッチが入ったような顔でこっちを見つめています。

「あなたがた、高槻さんと、服部さんね。ダンス見せてもらいました！」

「あ、はい」

「先生、とても感動しました。高槻さんの正確な動き、そして、服部さんの独創的なダンスと舞台度胸。感動しました」

「いえいえ、わたしは高槻さんの付き添いで来たまででして、そんな」

「わたしも、姉に勝手に応募させられて……」

「そう？ こんな逸材、東京都にはいない、って先生思うんだけど」

「いやいやいや、お断りします、遠慮します」

「付き添いとしてもお断りします」

……そんなこんなで、はっとりとなんかは、散々口説かれました。無茶苦茶引き止められました。わたしたちは、まだ息切れが収まっていません。お腹ペコペコです。ここは、お断りするのみです。はっとりとの友情、一緒に、室山大学を目指すんだ、ってこともあります。そのことを、先生に丁寧に丁寧に説明した結果……。

「あら、どうしてもダメ？」

「そうなんです」

「わたしもです」

「じゃあ、残念ね。惜しいなあ……あなたがたが、ステージに立っている様子が手に取るように想像できると言うのに……」

「ごめんなさい」

「ご迷惑をおかけいたしました」

「じゃあ、来年なら間に合うから、また考えていらっしやい。先生は待っています」

◇ ◇ ◇

はああ、どうやらようやく撒いた……。そんなによかったかな、うちのダンス。とりあえず、お弁当とお茶を居残りで処理して、深々とお辞儀をして、その場を後にした。

「わたしはいいけど、沙織、あれでよかったのか？」

「そうね、はっとり。元はと言えば、あの姉貴が。百合族の紫織の所為！」

「ハッキリ言い切るね。未練があったら、やり直すなら今のうちだぞ」

「いや、全然。わたしには、みやげ坂46は無理かなあって、ずっとずっと思っていて……」

沙織は、どうやら断り切れない性格とみた。やれやれだぜ。

ダンスの先生が、玄関まで見送ってくれた。

「じゃあ、あなたがた、元気でね。また来年来てもいいのよ」

「はい、今日はありがとうございました」

「大変ご迷惑をおかけいたしました、申し訳ございませんでした」

「学校の先生になるのも可能性なら、こっちに来ることも可能性。それだけは忘れないで」

二人「はい、ありがとうございました」

そうして、わたしたちは、オーディション会場を後にした。

■沙織と美月 一つ屋根の下

ping... pong...

『はい、どちら様？』

「室山県室山市から来ました、高槻です」

「同じく、服部です」

『あ、分かりました、桃花ちゃんのお友達ね、ちょっと待ってて』

神奈川県海老名市のとあるところにある、柏原桃花の親戚のお家「吉田さん家」にお邪魔する二人。

「お邪魔しまーす」

「あら、高槻さんと服部さんね！ 話は聞いているわ！ どうぞ、いらっしゃーい」

「失礼しまーす」

「遠いところをようこそ。さあ、遠慮なさらずに」

「ありがとうございます」

見た目はまだまだ新しい一軒家。まだまだ若そうな、その家の奥さんと思しき女性が、二人を出迎えた。

二人は促されるままに、用意されたスリッパを履き、応接間を目指して廊下を歩いていた。

「まあまあ、あなたがたセーラー服？ 憧れるわー、お婆さんは、中学高校ではずっとブレザーだったから」

「そうです、一応、セーラーではありますが……」

「友達の同級生が痴漢に遭って、たまに酷い目には遭いますけどもねー」

「あらまあ！ お婆さん、性犯罪は許しませんよ！」

「そうですねえ、その通りです」

「まあ、あいつはスカートが無駄に短く詰めすぎたとか、いろいろありまして……」

「あらあら。誰だかわかんないけど、随分アグレッシブな子ね……どうぞ、座って、座って。飲み物お持ちするわ」

「いやいやいや」

「飲み物だなんて、何卒お気遣いなく……」

お婆さんは、台所に行くと、なにやら、ペットボトルのミネラルウォーターを二人分持ってきた

。「はい、つまらないものですが、召し上がれ」
「あ、助かります、今日はオーディションでメッチャ汗かきましたし」
「いただきます」
「みやげ坂46を受けて来たのね、あなたがた。すごいわね！ よく頑張りました！」
「ありがとうございます」
「本当に突然押しかけて、どうも済みません」
「大丈夫よ、夫は成田から海外出張だし。ちなみに、娘はいま大学生で、都内で下宿中なんで、ちょーとおばさん寂しかったから、丁度いいわ」
「うわー！ わたし、東京に出て来ただけでも大冒険だったんですけども、ご亭主さんは海外ですか！」
「すごいですよね、吉田さん家！」
「まあね、でも、主婦になってみなさい。亭主元気で留守がいい、そういうものよ」
「はっとり、どうやらそういうことらしい」
「わたしも、東京は初だったから、海外だなんて想像もできないよー」
「ふふふ、二人ともかわいい！」

吉田さん家の冷蔵庫で、キンキンに冷やされた、五〇〇ミリリットルのミネラルウォーターがあまりに美味しかったので、二人とも感激していた。

「さあ、落ち着いたところで、そうね……娘の部屋が良さそうだから、そこのセミダブルベッドをお使いなさい」
「え！ それって、添い寝ってやつですか？」
「うわ、沙織と添い寝ですかー」
「いや？」
「いえいえいえ、いやだなんて、そんなー」
「泊めていただけるだけで、光栄です！」
「ふふふ、旦那の部屋ってタバコ臭いし、あなたがたに、そんなフレグランスがつくの、いやでしょう、だから」
「何から何まで、ありがとうございます」
「お気遣いいただきありがとうございます」
「さあさあ、おばさんについといで！ その重そうな荷物、部屋に置いてから、ゆっくり休んで」

……というなり、二人を手招きして、二階に沙織と美月を案内した。階段を上がりながら、先ほど、セミダブルベッドだと聞かされて、余りの恥ずかしさに、いろんな想像をしてしまい、思

わず顔から火が出そうな二人だった。

おばさんが『みーちゃんのお部屋』という札が下がった白いドアを開けると、そこは、吉田さんの娘さんの部屋だった。

「その辺に荷物を置いてちょうだい。どうぞリラックスして過ごしてね。何かあったら、下にいるおばさん呼んでね！」

「は、はい！」

「わかりました！」

「じゃあ、ごゆっくりと」

パタム、とドアが閉じられると、二人は荷物を置いて、そのセミダブルベッドなるものに腰かけた。

「はっとり！ どうしよう！ セミダブルベッドだなんて！」

「落ちつけ、沙織！ 30センチ離れて眠れば大丈夫だから、どうか落ち着いて！」

「それじゃあ、どちらかがベッドから落ちちゃうよ！」

「……じゃあ、よく考えよう。もしわたしが沙織とくっついて眠ったら？」

「くっついて眠ったら？」

「ね、眠れるわけないじゃんかよー！ お、女の子同士だよ！」

「じゃあ、はっとりは起きてるの？ 椅子で眠るの？ 風邪ひくよ！」

「うーむ、それもそうだね。じゃあ、この状況をどうするか……」

しばらく考えた後、美月がポツリとつぶやいた。

「ねえ、沙織、お風呂は別々に入ろう」

「そうだね、シャワーは別々に入りましょう」

「お食事いただいて、お風呂入ってから考えようか」

「そうだね」

◇ ◇ ◇

「じゃあ、お二人とも、旅の疲れを取って、ゆっくり休んで行ってね」

「はい」

「おやすみなさい」

どーん、という効果音が似合いそうな、セミダブルベッドを前にした二人。掛け布団は、当然の

ことながら、ひとつ。

「こ……ここで眠れというのか……」

「はっとり！ 湯冷めしちゃうよ！ 早く、早く！」

「は、早く……って言われても、き、きき、緊張するなあ……うわあ！」

沙織は、美月の腕をつかむと、半ば強引にベッドに引き入れた。美月はベッドサイドでバランスを崩して、沙織の方へと倒れこんだ。そのあまりの距離の近さに、二人とも思いがけない様子だった。

「ご、ごめん、はっとり……」

「い、いや、わたしは、まんざらでもない……ぞ」

「そ、そう、それならいいんだけど……」

「じゃ、じゃあ、灯り、消すか」

「うん」

「き、き、緊張するね」

「そ、そうだね、一緒のお布団、はじめてだもんね」

美月は、頬の辺りを指でポリポリと搔きながら、視線を上を逸らせた。沙織は、いつまでも美月の腕をつかんで離さなかった。

「美月、さん、あ、ありがとうね、付き添ってくれて」

「うん、遠慮なんかいらない、だって、友達だから」

「そだねー」

「って、いつまで私の腕をつかんでるつもり！？」

「はっ！ ご、ごめん！」

「冗談冗談、いいよ、ダンス、本当は不安だったんだろ？ わたしで良ければ、手、握っててもいいよ」

「うれしい。ありがとう、ね」

そのままの態勢で、向かい合わせで横になる二人。遮光カーテンの隙間から、漏れる月明かり。薄っすらと、照らし出される二人のシルエット。

「あー、今日は楽しかったなあー」

「ほんとうに、表参道でタピオカ飲んだし」

「あれ、本当はデブるんだよなー」

「え！ じゃ、じゃあ気をつけなきゃ」

「原材料は、お芋だっていうし」

「へええー、気を付けようっと」

「飲みすぎちゃダメだぞ、こいつう！」

美月は、沙織の鼻の頭を人差し指と親指でぺちっと弾いた。

「あ痛っ」

「ははっ、可愛い、可愛い、反応が可愛い」

「本当？」

「うん……ところで、さ、沙織、さん」

「なあに？ 改まって」

「なんだか冷えるね、夏場だっていうのにさ」

「それもそうだね」

「も、もう少し、近づいても、いいかな？」

「え、いいよ」

「沙織、少しだけ、目、つぶってても、いいかな」

「どうして？」

「どうしても」

美月は、沙織の髪をかき分けると、彼女の唇にキスをした。少し、驚いた様子で、つぶっていた瞳を開く沙織。瞳をつぶる美月。そうして、十数秒が経っただろうか。ようやく美月は唇を離れた。

「美月、さん？」

「いやー、前から思ってたんだよね、沙織の唇ってさ、ケアしている所為からかな、いっつもぷるぷるしてるんだよね」

「そ、そりゃあ、お手入れは欠かさないけど……」

「わたしの初キス、沙織に捧げました」

「た、確かに受け取りました……って、ずるいー！ わたしもー！」

頬を上気させた二人は、互いに見つめあい、沙織の両手が、美月の頬をそっとつつんだかと思うと、距離を縮め、美月の唇にそっとキスをした。そのままで、何秒経っただろうか。ようやく互いに満足した様子で、そっと唇を離れた。美月の長い黒髪が、そっと乱れた。

「わたしのはじめて、美月ちゃんに捧げました」

「うん、確かに受け取りました、ありがとう」

「美月ちゃんの髪の毛、すべすべ！ ちょっとは分けて欲しいものだよ」

「そ、そんなにいいものか？ わたしの髪が？」

「うん、前からそう思ってた」

「こいつう！」

「あはっ」

そう言うと、また美月は、沙織の鼻の頭を、親指と人差し指ではじくのだった。なんだか、笑顔が止まらない二人だった。

「美月さん、手、握ったままで眠ろう？」

「そうだね、沙織、さん」

「明日はもう飛行機の中だね」

「そうだね」

「飛行機の中でも、コッソリ、しよう」

「な、なにを？」

「キス」

「やーめーてー、恥ずかしい」

「ところでさ、お布団の中だと、暖かいね」

「そうだね、ずっと続くといいね、この状況」

「美月さんの胸元に顔をうずめてスースー眠りたい」

「そ、それだけは勘弁な！」

「あはっ」

神奈川県海老名市の夜は、こうして更けていくのだった。

行き道・帰り道

■行き道・帰り道

お客様へお知らせ

紅葉野電鉄本線 梁瀬駅～岩崎台駅間にて踏切事故が発生致しました。

架線に電気を送る影響で、紅電敷島駅～紅電室山駅間が運転休止になっております。

鋭意復旧工事中ですが、復旧の見通しは立っておりません。

なお、敷島駅～香枚井駅間で葱北本線と室山市電と紅電バスでの振替輸送が実施されています。

お急ぎのところ申し訳ございませんが、振替輸送をご利用ください。



おなじみ、ゆかいな香枚井登下校組の4人。

「あちゃー、振替輸送だってさ」

「じゃあ、帰りはこっちの敷島駅だねえ」

「なんか最近、事故とか振替輸送多くね？」

「言えてるー」

「なんか、うちらついてない」

「お祓いでも受けた方がいいんじゃない、私たち」

「うーむ」

紅電敷島駅と、葱北本線敷島駅は、左程距離が離れていない。歩いて1～2分のところにある。

香枚井方面、麦野原駅行きの快速電車が行き来する。

「杏子先生、また嘆いてたよ」

「おやまあ、どうして？」

「だってさ、紅電梁瀬駅までタクシーで帰らなきゃいけないってこと」

「なるほどね」

「明日は、片道5キロの坂道を自転車だってさ、大変だね」

「あいつは、日ごろお説教しすぎだよ！」

「まったくだ」

「うわっ！ なんじゃこの人ゴミ！」

「隅っこの方にいましょうね」

紺と白のツートンカラーの6両編成の電車は、普段より増発しているとはいえ、お客さんを捌ききれない様子だった。

「むぎゅうう！」

「つ、潰されるー」

「もうヤダ、室山駅で降りて、室山市電に乗るううう」

「その方がいいみたいだね、沙織ちゃん」

振替乗車証、というものを4人とも持参しているの、室山市電は無料だった。人もまばらな、葱北本線、室山駅前電停のベンチ。

「は一、やっと室山に帰って来たー」

「お疲れさま」

「は一、かき氷食いてえ、ソーダでもコーラでもいい」

「こら梨音！ 買い食いは禁止だぞ！」

「だって、だってさー」

「.....わたし、四方堂（よもどう）電停の純喫茶知ってるんだー」

「沙織、それ本当か？」

「うん、うちのお母さんの知り合い」

「じゃあ、今日だけ特別にそこへ寄って休憩するか」

「さすがは美月さま！」

「梨音、今日だけだかな！」

室山城が近くに見える、鍵掘が見える風光明媚な場所、四方堂電停に、純喫茶「ジュリアン」があった。

「ほんっとうに純喫茶、ってドアだなあ」

「はっとり、行こう！ 入ろう！ こんばんは一♪」

「あら、誰かしら。香枚井の高槻さん？ あなた、中学生以来！？」

「そうでーす、振替輸送の電車がメチャ混みで、疲れましたー」

「まあまあ。そんな事情が。おばさん、おしぼり持っていくから、好きなところ座って！」

お冷とおしぼりを出された4人組は、ボックスシートに収まって、言っちゃなんだけど、だらけていた。

「おばさんも、敷女OGなの。だから、事情は分かっているから、学校には内緒にしてあげます」
一同「ありがとうございます」

「はっとりは、何にする？」

「あー、わたしー？ 疲れたから、アイスコーヒー無糖で4人前」

「珍しい。わたしは、ミックスジュースでいいかな、はい、梨音ちゃん」

「わたしは、宇治金時！ はい、桃花、メニュー」

「そうだね、わたしは、プリンアラモードで」

「はいはい」

そう言い終わると、ジュリアンのおばさんは、ペタペタとスリッパの音を響かせながら、厨房に入ると、家政科卒のパフォーマンスを発揮して、年齢にそぐわない、見違えるような全速力でそれらを作り上げるのだった。

「あ、テレビでニュースやってる」

「本当だ」

「何をどうすれば電車があんなことになるのだろう……」

「乗り合わせてなくて良かったね」

「はい、先にドリンクメニューのお客さん、どうぞ」

沙織・美月「うわあ、ありがとうございます」

梨音「電車、すごいことになってますねえ」

おばさん「そうね、明日も来てくれてよくってよ」

梨音・桃花「いえいえいえいえ、さすがにそういうわけにも」

おばさん「そこのお二人さんは、もう少し待っててね」

そう言うと、またペタペタと厨房に入っていくのだった。お客さんは、いまのところ4人だけ。美月のところには、アイスコーヒー4人前。沙織のところには、ちまっとミックスジュース。

沙織「はっとり、なに、その量……」

美月「あー？ ヤケ飲み」

梨音「美月さんって、絶対に社会に出たら呑み助になるほうだよね」

桃花「そうだよね、なに、その量」

美月「はー、この悩みは、引率者以外には分からない悩みだったりする」

沙織「そういうもんですかねー、はっとり」

美月「ちゅー、ちゅーちゅー、ごっつ、ゴビゴビ、ごっくん、ぷっはー！ 美味しいね、沙織、ここのコーヒー」

沙織「でしょ？」

おばさん「はい、プリンアラモードと、宇治金時お待ちどう！」

梨音・桃花「はーい！」



「は一、食った、食った！」
「食べた、でしょ、梨音ちゃん！」
「もうすぐ5時半、うちに電話しよう……」
「それもそうだな、沙織、いいところに気が付いた！」

四者四様で、自宅に帰宅が遅くなる連絡を入れる、香枚井登下校組。ごめんなさい、とか頭を下げながらだから、親は、もしかすると、心配して少し怒っているのかも知れなかった。

「それでは、私たちそろそろ帰りまーす♪」
「高槻さんたち見てたら、何だかわたしまで若返りそう！ またいらっしゃい」
「お邪魔しましたー」

室山市電の四方堂電停に陣取る4人組。早速電車が来たようだ。ここから、紅電室山駅まで出て、紅電香枚井駅へと帰るコースだ。もう、あれほどの殺人的混雑は見受けられないようだった。

「おお、懐かしの紅電！」
「何を言う、梨音……」
「でも、確かに懐かしいかも」
「また、明日もこれが続くのかな？ 美月ちゃん」
「そうだな、復旧工事に時間がかかるらしいから……」
「ここから先は定期券、だねー」

夕焼け小焼けで日が暮れてゆく、紅電室山駅のホーム。どうやら、各駅停車しか動いていない様子だった。

『3番線の電車は、折り返し、各駅停車・楠葉行きです』

駅係員が、アナウンスをする。

「やっぱ各駅かあ。紅電運行アプリ通りだね！」
「この際だから、ゆっくり帰りましょう、梨音ちゃん」
「あー、アタマは最高に気持ちよくなったんだけど、今度は胃が……」
「はっとり、だから言わんこっちゃない」
「この調子じゃあ、バス酔いしそう」
「そうだね……って、あ！ 霜田さん！ すっかり忘れてた！」

「なんだなんだ沙織ちゃん、恋の悩みかー？ 里心でもついたのか、霜田さんだなんて……
げはっ！ ぐえっ！」

美月の肘鉄と、沙織の空手チョップが炸裂し、そして桃花が続ける。

「梨音ちゃんは一言余計」

「そうだぞ！ お前、今度こそは自重しろ！」

「で、わたしは拓也さんに電話をかけるとして、はっとりは？」

「え？ わたしは、あの変態おっぱい野郎の心配なんかしてない」

「……仰るとおりです」

prrrr... prrrr...

「あ、もしもし、沙織で一す。遅くなりましたー」

『ところで、いまどこ？』

「紅電室山駅を出たところですよー、喫茶店寄ってましたー」

『は一、弟が死ぬほど心配していたぞ。僕も心配した。代行輸送の最中だからな』

「ごめんなさい。ごめんなさい。ほんとうにごめんなさい」

『みんな無事かい？ 葱北本線はとても混んでいたらしいから』

「ええ、大混雑がイヤで、室山市電に乗り換えましたー」

『ともかく、無事でよかった。じゃあ、気を付けて帰ってくれよな！』

「は一い、んじゃねー……通話終了っと。さてさて、はっとり？」

「は？ だから何？」

「翔さんのほうがむしろ心配だったみたいで。死ぬほど心配していたって、拓也さんが言ったた」

「あー？ あのゴキブリ野郎に電話するー？ わたしがー？ まさかー」

「はっとり、そう来ると思った」

そうこうしているうちに、電車は紅電香枚井駅に着いた。駅係員たちは、残務整理で、それどころじゃない。霜田拓也も、例外ではなかった。

「なーんか、お客さんのクレーム対応というか、何というか……」

「そうだな、ここはリアルJKがいていい雰囲気じゃないな、沙織」

「怒れるサラリーマンたち！」

「しーっ！ こら！ 梨音ちゃん！ やめなさい、声大きい！ もし聞こえたらどうすんの！

」

「すまん、桃花」

室山34系統、紅電榛名天神駅行きのバスに陣取る、香枚井登下校組。

「梨音、明日どうするよ」

「うーん、明日の紅電運行情報次第だね」

「みんなに携帯でメッセージ回せよ！」

「ラジャー！ まかせとけ！」

「はっとり、バス酔いしそう？」

「いや、あの香枚井駅の人いきれで、身体中の水分が蒸発した」

「わたしも……」

「沙織ちゃん、疲れてない？」

「桃花ちゃんこそ、疲れてない？」

「疲れはしないけど、なんか、いろいろあったね」

「ほんとうに、ただ、学校に通学するというだけで……」

「はああ……」

いつものように、春名坂を、1台のバスが登っていく。



次の日――

「おはよー」

「おはようございます」

学級委員長の、私市（きさいち）かなえさんを、香枚井登下校組の4人がみつけて、呼び止めた。私市さんは、登下校時は、いつもひとりぼっちだ。高槻沙織が呼びかける。

「私市さんって、どこから来てるの？」

「えー、わたしは、紅電麦野原駅からだよ？ どうしたの？」

「え！ 麦野原！ 終点じゃん！ うちら、急行で香枚井からなんだけど、時間どうやって間に合わせてるの？」

「まあね、特急メイプルライナー3号で来ると、ちょうど紅電敷島駅に今頃つくの。この特急に乗りそびれると、アウトだね」

「たしかに」

「絶対に寝坊できないね」

「そう、1本逃すと、午前9時台の特急電車しかないから。後は、地道に早起きして、6時台の各駅で楠葉まで出て、そこから急行だね」

「もしかしたら、一緒の急行に乗り合わせているかもね」

「すげえ！ 私市さん、すげー！ わたしが一番びっくりした！」

「ははは、梨音ちゃんまで、ふふふ」

「有料特急に乗って通学する気持ちってどう？」

「ははは、ちょっとしたVIP気分。朝ごはんのお弁当とかサンドウィッチを買うかな、駅で、朝っぱらから」

「うわー、いいなあ、リゾート気分じゃなか、それ」

「ふふふ、でも、今日も代行輸送だから、紅電麦野高原まで1駅出て、そこから、葱北本線、麦野原駅からの特急『わかば1号』に乗ってきました」

「それもまた、リゾート気分！」

「差し支えなければ、どうやって定期券代確保したの？」

「まあね、作物作ってない土地を少しだけ売ったよ」

「農地を売る！」

「そうね、一軒だけ宅地分譲にしてね」

「儲かりまんなあー」

「すげえー、私市さん、ますます、すげえー」

「わたし、聞いてたよ、私市さんは、麦野原の地主のお嬢さん」

「ほほうー、帰り、缶ジュースでもおごってもらおうかな、4人分」

「あは、服部さんったら、照れちゃうね、朝っぱらから、ふふふ」

「お家は広いの？ 夏、私市さん家で冬合宿しようよ！ はっとり！」

「沙織、なんの合宿？」

「あー、なんとなく、無料で麦野原リゾート地を満喫したりなんかして、だ、なんちって」

「はああ、沙織はすぐこれだ」

「高槻さん、おかしい、ふふふ」

「ねえ、私市さん、帰り、一緒に帰ろ！」

「え、どうやって？」

「まず、あっちの敷島駅から電車に乗って、葱北本線・室山駅で降りて、振替乗車証で室山市電乗って、四方堂（よもどう）の、敷女OGがやっていて、秘密を守ってくれる喫茶店があって、そこで休憩して、紅電室山駅から特急で麦野原へGO！ どう？」

「うーん、そうだったらわたし、葱北本線の特急『わかば10号』の方が何かと楽だなあ……それよりも、買い食い？ 先生！ 先生！」

「うわあ！ 黙って！ 落ち着いて！ うちら決してやってないから！」

「もがっ、ぐむぐみゅ」沙織に口をふさがれている私市さん。

「おはようございます、先生、って言えよ」と、美月に耳打ちされる私市さん。

「作り笑い、作り笑いでやりすごしましょう」と、桃花に耳打ちされる私市さん。

「ばかっ、先生にチクってんじゃねえよ！」と、梨音に耳打ちされる私市さん。

全員「おはようございます、先生！」

校門の前の先生「はい、おはようございます皆さん」

香枚井登下校組「ふー」「はー」「なんとかごまかした」「焦ったー」

「良い子でいるのも大変だよ」

「服部さんって、見かけによらずアクティブね」

「そうかなあ。普通だよ。普通、あなたがお堅いだけ」

「かなえちゃんが良い子過ぎるんだよー」

「そうだそうだ」

「あはは、そうかなあ、良い子なの、あたし？」

予鈴が鳴る。これから一日のスタートだ。

■高槻洋菓堂・服部宝珠庵 業務提携！

放課後、いつもの愉快的な4人組、香枚井登下校組。紅電の下り急行電車に乗って、香枚井を目指していた。話題は、自営業の今後について、パティシエール・高槻洋菓堂、服部宝珠庵、たちばなデンキの主に3人での話になっていた。

「ねえねえ、うちのお母さんがね、はっとりのお母さんと一緒になって、業務提携をしましょう、って話になってるよ？ 知ってる？」

「あん？ 何か、お母さんが世間話していたあれかー。いいことじゃない？」

「そうだね、沙織ちゃん家の業務用ジュースサーバー、月崎冷機のジュースサーバーだし、三つ巴の協力体制だね」

「ねえねえ、わたしも手伝えないかしら？」

「そうだな、桃花。街のお菓子屋さんや電器屋さんは、頑張っているぞ、商店街で、というお話をしてくれと、ラジオ局のお父さんに伝えてね。よろしくね」

「イエッサー！ 美月ちゃんの頼みとあれば！ お父さんに伝えとくー」

「で、梨音、これはお説教じゃないんだが、うちも、グリーンティーとか、冷やしあめとか、緑茶とかの、そうだなあ、3種類ぐらい、表に透明にアクリル樹脂か何かでむき出しになっている、冷やせるジュースサーバーが欲しくてね、梨音、お安くしておくれよ！」

「がってんだ！ って美月、それって、誰のお願い？」

「うちのお父さん」

「ははっ、美月ってそればかりだなあ。うちのお父さん。随分仲いいんだな」

「違う！ 仕事の話はするよ。お父さんが、小振りの業務用ジュースサーバーを探してた」

「ふーむ。じゃあ、うちも親父に訊いてみようかな？ 実際に、クルマで、服部宝珠庵まで。今日行こうか？ 見積もりも出すよ！」

「お願いだ梨音、助けてくれ」

「よーし、美月さんの頼みとあれば、一肌脱ぐぜ！」

「いや、電車の中で脱ぐなよ、セーラー服。ち、乳首だけは見せん。インナー脱ぐなよ！ ヤバい格好すんなよ！」

「美月い、いくらあたしでも、実際、そんなことはしないよー」

一同「ははははは！ はーあ」

電車の車掌さんが、岩崎駅を出発してから「次は紅電室山、紅電室山です」とアナウンスし始めた。鉄橋を渡る音がし始めた。ロングシートに座っている4人組。静寂を破ったのは、沙織だった。

「ねえねえ、みんな、先日の純喫茶、ジュリアンってあったでしょう、四方堂の」

「あったあった」

「食った食った」

「食べた、でしょ、梨音ちゃん！」

「そこでね、うちの洋菓子扱ってくれることになったのよ！」

「マジか！」

「ねえねえ、沙織、服部宝珠庵の香枚井餅も置けないか？」

「うーん、それも話したみたいなんだけど、うちの親が。じゃあ、いちご大福ぐらいだったらいいわよ、みたいな話になってね」

「ほほう、ありがとう、沙織のお母さん！」

「はっとり、何でうちのお母さんだって分かったの？」

「だって、あんたとこのお父さんが、敷女OGの会話に入れると思う？」

「確かに」

『香枚井一 紅電香枚井で一す お降りの方は、ドアとホームの隙間に挟まれませんようご注意ください 間もなく、急行、楠葉行きが発車します、閉まるドアにご注意ください』

ぽつぽつと歩く、香枚井登下校組。

「あ、霜田さん！」

「やあ、沙織ちゃん！ みんな！ 久しぶり！ 元気だったか？」

一同「はい」

「そうか、それは良かった」

「なるほど、室山放送が、紅電グループと、紅電バスを巻き込めば……ぶつぶつ」

「桃花、なにぶつぶつ言ってるの？」

「いや、なんでもないよ梨音ちゃん。独り言」

霜田拓也「？」

霜田拓也を適当にやり過ごした後は、もちろん、室山三四系統のバスに乗車する一同だった。だが、今日の沙織は、様子が違っていた。香枚井3丁目になっても、バスを降りないのだ。美月が心配して声をかけた。

「おい、沙織、忘れたのか？ 香枚井3丁目、過ぎたよ？ 家に帰るんじゃないのか？」

「いや、今日は、うちのお母さんの代わりに、はっとりのお母さんに用があるから、終点まで乗る。そして、中間テストの自習をはっとりん家でやる」

「あ、そういや、そうだった」

「で、どんなおはなしするの、沙織ちゃん？」

「桃花ちゃん、実はね、うちのティールーム、イートインスペースに改装するの」

「マジで一！ほんとに！ステキね、そのアイデア！」

「紅茶でアフタヌーンティーが出来るようになるの！」

「すごいー、わたし、行ってみたい」

美月・梨音「おおー、すごええ！」

「うちの庵も、イートインスペースに改造出来るか、お母さんに訊いてみる」

「そうだね、はっとりん家も、そうなると大繁盛だね！」

「うん、うん。メモ、メモっと。じゃあ、わたし春名台団地で降りるね！」

沙織・美月・梨音「バイバーイ、また明日ね！」

美月「桃花一、なーにメモしてたんだ一？」

「え一、秘密一。じゃね一」

バスの扉が閉まった。春名坂小学校前で降りない梨音に、残り二人の耳目が集まった。

「梨音、なんでついてくるんだ？」

「え一、なんででしょうね一、強いて言えば、親父の手伝い」

「なにそれ」

「なんじゃそりゃ」

「へへーん、後は秘密だよーん」

「今日の桃花と言い、今日の梨音と言い、何か胡散臭い」

「おい、美月い、そりゃあんまりだぜ。わたしゃ、商談の手伝いだよ」

「あ一、なるほどね、了解しました」

「道理で梨音まで終点を目指すかと思った」

「まあね、二人に付き合っ、勉強もするけどね！」

「やめろ梨音！地震雷火事親父が起きる！やめとけ！天変地異が起きる！」

「おいおい、美月い、理系なら負けてないんだぜ、点数的に」

『ご乗車お疲れさまでした。間もなく、終点、紅電榛名天神駅前、紅電榛名天神駅前です。どなた様も、お忘れもの無きようにお仕度ください。このバスは、後ろ乗り前降りとなっております。ICカードをタッチしてください。ご乗車お疲れさまでした。』

「梨音ちゃん、行こう！はっとりん家！」

「イエッサー！」

「はははは、二人とも元気でいいなあ……お父さん！」

「あ、店の前に親父がいる！美月い、早速セッティングしているぞ！」

「本当だ……梨音、ありがとう！」

「お、お礼だなんて、きき、気持ち悪いなあ、美月い」

「ただいまー」

美月の父「おお、お帰り、美月とその友達！」

沙織・梨音「お邪魔しまーす」

美月の父「ドリンクバー、出来たぞ。うちの庵にもだ。2台、立花さん家から購入した。清水の舞台から飛び降りた！」

「お父さん、随分思い切ったわねえ……」

美月の父「グリーンティー、冷えてるぞ！ さあ、3人とも飲め！」

沙織「いただいて、いいんですか？」

梨音「いいんだよ、沙織ちゃん！ ドリンクサーバーの飲み始めだからね、テストだよ、テスト。ねー、親父！」

梨音の父は、脚立に乗って、まだ天井の配線と格闘していたようだったが、娘に相槌を打った。

美月の母「さあさあ皆さん、いらっしゃい。どうぞ遠慮なく召し上がれ！」

沙織・美月・梨音「いただきまーす」

3人は、ごきゅごきゅと喉を鳴らした。

「美月い、これ、電源入れたら、15分で冷え冷えになるんだぜ！」

「すごいな、梨音ん家……なんでもあるなあ」

「そりゃそうでしょ、なんせ、たちばなデンキだもんね」

「威張るな、梨音！」

「美味しい……ごちそうさまでした」

美月・梨音「ごちそうさまでした」

美月の母「はいはい、皆さん、お味はどうでしたか？」

梨音「冷え冷えで、美味しかったです」

沙織「私も、です」

美月「お母さん、メッセージ送ったの、昼休みでしょ？ いつ来られたの？ たちばなデンキさん」

美月の母「そうねえ、午後3時過ぎから始められたわねえ。亭主と二人で何か相談した後で。庵に行ってみなさい、美月。すごいことになってるわよ。皆さんもおいでなさい」

沙織・美月・梨音「はい」

■高槻洋菓堂・服部宝珠庵 業務提携！ 2

庵に招かれた、沙織・美月・梨音の3名。一応に「おおーっ」という感嘆を漏らした。次いで、美月が母親に声をかける。

「お母さん、畳がないんだけど……」

「あらあら、解体工事屋さんと、塗装工事さんが来て、あっという間に土間にしたわよ。靴のまま上がれるようになって！」

「そして、なぜか梨音んちのジュースサーバーと、あったかい抹茶サーバーが……いつの間に……」

「これも、梨音ちゃんのお父さんのお仕事ね」

「お仕事早い……」

「仕事が早いのが、たちばなデンキの良いところ！」

「威張るな、梨音！」

「それにしても、全然雰囲気違うじゃない？ なあに、梨音ちゃん、いつの間に連絡とったの？」

「あーね。昼休みに、美月と沙織ちゃんがその話してたから、親父にメッセージ送っといいた」

「こちらも、仕事が早い……」

「まったくだ」

「テーブルと椅子が置いてある……」

「お母さん、だれのアイデア？」

「ふふふ、わたし」

「は一あ、この親も……わたしの庵が……」

美月の母「この親、って何よ美月」

「でも、良かったじゃない、はっとり。お茶出来るじゃない、靴脱がなくても」

「そりゃそうだけど……じゃあ、香枚井餅でお茶でもするか！」

二人「賛成一！」

羽二重餅の訳アリ品が、茶色の塗りのお鉢に入れられて出された。

美月の母「お茶はね、ここからドリップできるの！」

「はっとりのお母さん、すごーい！」

「抹茶をドリップする時代になったか遂に……」

「はいはい、美月、嘆かない嘆かない。これも時代なのだ！」

「時代、って、何だよ梨音」

みんな、気を取り直したらしく、順番に並んで、お抹茶を、ドリップサーバーから器によそうのだった。ホカホカと、湯気が立っている。

「本当に、香りがいいですね、はっとりのお母さん」

「そうねえ、機械が点てたお茶だとは思えませんわ」

「お母さん、なんだか、時代だね」

「あら美月、どうして？」

「茶筌で点てない抹茶なんて……」

「これも時代の流れなのよ、ささ、どいてあげて、梨音ちゃんが注げないわ」

「あ、ごめんごめん、梨音！」

「いえいえ、まいどありー」

一斉に着席し、序でに、作業が終わった美月のお父さんと、梨音のお父さんも、隅っこの席に座って抹茶と羽二重餅をいただくのでした。

「服部さん、どうですか、うちの工事！」

「いやあ、大したものですなあ」

二人「がーっはっはっはっは！！」

それを見ていた、はっとりのお母さんチームの席では……淡々とお茶とお餅をご馳走になっていたのだった。

「なに、あれ……」

「美月、しょうがないでしょう？ ああいう会話が、男の人、というものよ」

「そんなもんですかねえ」

「あなたも、誰かの妻になれば理解できるわ」

「そんなもんですかねえ」

「美月い、どうだい、自動抹茶ベンダーの実力！」

「ううむ、侮れないな、この味。梨音というか、たちばなデンキ、腕持ってるわー」

「えっへん！」

「威張るな、梨音」

「ねえねえはっとり、お餅もう一個いいかな？」

「一個どころか……訳アリ品なんで、このお餅。形が変だから、売り物にならないんだよ、沙織」

「うちも、パンとか、サンドウィッチとか、訳アリ品とか出したら、売れるかなあ」

「大丈夫だよ沙織ちゃん！ 売れる売れる！ ところで……忘れてないか？ 美月のお母さんと

お話って何？」

「あ、忘れてました。服部さんのお母さん？」

「あら、高槻さん、改まって何かしら？」

「実は、わたしの実家も、ティールームを、イートインスペースに改造したんです、このあいだ」

「あら、そうなの高槻さん。今頃、複数税率で計算が大変ね！」

「はい、レジスター交換代金がかかるんだって、お父さんがぼやいていました」

「ふふふ、うちの主人と一緒にねえ」

「あ、はい」

「まあまあ、そう緊張なさらずに、あなたも、敷女1年生。随分垢抜けて来たわねえ、洗練されたというか何というか」

「おばさま、わたしにお世辞仰っても、何も出ませんよ！」

「あら、可愛い、ふふふ」

そのやり取りを少し遠くの隣の席で見ている、美月と梨音。

「おい、なんか楽しそうだぞ？」

「本当だ、なんか、雰囲気って遺伝するのかな？ 敷女OGと、現役敷女JKって」

「さああ、わたしも現役敷女JKだけど、全然わからない」

「わたしもだ、美月い」

二人「はああ……」

そんなこんなで楽しい(?) お茶会も終わりを告げ、美月の母が、沙織の母によろしくと伝えてください、ということになり……。

「さあさあ、あなた方、美月！ お勉強の時間じゃなくって？」

「あ、わたし、すっかり忘れて！ ごめん、お母さん、みんなで二階に上がる」

「そうだね、美月い、うちの親父たちの『ガハハハッ』聴いててもしょうがない」

「上に、上がらせてもらいましょう、梨音ちゃん！」

(2巻へ続く 続きはこちら→ <http://p.booklog.jp/book/112229>)

葱北本線・紅葉野電鉄線 路線案内図



紅葉野電鉄 駅名表示板設定

紅葉野電鉄（もみじのでんてつ、略称、紅電（べにでん））は、旧神崎海浜急行、旧室山電鉄、旧吾野電鉄の三社が対等合併して出来た、比較的新しい私鉄です。

■紅葉野電鉄 本線（南から北へ）

こうざき
神崎

海浜神崎

Kaihinkouzaki かいひんこうざき

かいひんこうざき
海浜神崎

紅電神崎

Kouzaki こうざき

こうざき
神崎

真垣

Magaki まがき

まがき
真垣

牡鹿沢

Ojikazawa おじかざわ

おじかざわ
牡鹿沢

敷島台

Shikisimadai しきしまだい

しきしまだい
敷島台

紅電敷島

Shikisima しきしま

しきしま
敷島

梁瀬

Yanase やなせ

やなせ
梁瀬

岩崎台

Iwasakidai いわさきだい

いわさきだい
岩崎台

紅電岩崎

Iwasaki いわさき

いわさき
岩崎

鍵堀台

Kagiboridai かぎぼりだい

しおせ
塩瀬

かきぼりだい 鍵堀台 むろやま 室山

塩瀬
Shiose しおせ

しおせ 塩瀬 とりごえ 烏越

紅電室山
Muroyama むろやま

むろやま 室山 さっかだい 咲花台

鳥越
Torigoe とりごえ

とりごえ 烏越 かりばねだい 刈羽台

咲花台
Sakkadai さっかだい

さっかだい 咲花台 かひらい 香枚井

刈羽台
Karibanedai かりばねだい

かりばねだい 刈羽台 はるなてんじん 榛名天神

紅電香枚井
Kahirai かひらい

かひらい 香枚井 しいのせだい 椎瀬台

榛名天神
Harunatenjin はるなてんじん

はるなてんじん 榛名天神 あがのほんじん 吾野本陣

椎瀬台
Shiinosedai しいのせだい

しいのせだい 椎瀬台 もみじの 紅葉野

吾野本陣
Aganohonjin あがのほんじん

あがのほんじん 吾野本陣 あがの 吾野

紅葉野
Momijino もみじの

もみじの 紅葉野 たちばなだい 橘花台

紅電吾野
Agano あがの

あがの 吾野 くすのはだい 楠葉台

橘花台
Tachibanadai たちばなだい

たちばなだい
橘花台
くすのは
楠葉
楠葉台
Kusunohadai くすのはだい

くすのはだい
楠葉台
にぶん
任分
紅電楠葉
Kusunoha くすのは

くすのは
楠葉
うりゅう
瓜生
任分
Nibun にぶん

にぶん
任分
あおだに
青谷
瓜生
Uryuu うりゅう

うりゅう
瓜生
からさきとうげ
唐崎峠
青谷
Aodani あおだに

あおだに
青谷
むぎのこうげん
麦野高原
唐崎峠
Karasakitouge からさきとうげ

からさきとうげ
唐崎峠
むぎのはら
麦野原
麦野高原
Muginokougen むぎのこうげん

むぎのこうげん
麦野高原
紅電麦野原
Muginohara むぎのはら

■紅電室山空港支線（北から南東へ）

むろやま
室山
しおせもとむら
塩瀬本村
南新町
Minamishinmachi みなみしんまち

みなみしんまち
南新町
しんがんじ
真願寺
塩瀬本村
Shiosemotomura しおせもとむら

しおせもとむら
塩瀬本村
むろやまくうこう
室山空港
真願寺
Shinganji しんがんじ

しんがんじ

真願寺

室山空港

Muroyama Airport むろやまくこう

葱北本線 駅名表示板設定

葱北本線（ぎほくほんせん）は、SLの昔から、山陽地方と山陰地方を結ぶ大動脈として、たいへん古い歴史を持っています。また、急曲線の葱州長坂～香枚井間を迂回する、元セメント貨物線の葱北新線も最近開通し、葱州長坂～新芝草間を普通電車が折り返し運転し、優等列車がバイパスしています。

■葱北本線（南から北へ）※秋津浜～葱州神崎間は、山陽本線と併走※

秋津浜

Akitsuhamama あきつはま

ゆみがはま
Yumigahama

弓ヶ浜

Yumigahama ゆみがはま

ぎしゅうこうざき あきつはま
Gisyu-Kouzaki Akitsuhamama

葱州神崎

Gisyu-Kouzaki ぎしゅうこうざき

ゆみがはま にしこうざき
Yumigahama Nishi-Kouzaki

西神崎

Nishi-Kouzaki にしこうざき

ぎしゅうこうざき しんむろやま
Gisyu-Kouzaki Shin-Muroyama

新室山

Shin-Muroyama しんむろやま

にしこうざき むこうだ
Nishi-Kouzaki Mukouda

向田

Mukouda むこうだ

しんむろやま しきしま
Shin-Muroyama Shikishima

敷島

Shikishima しきしま

むこうだ せきづ
Mukouda Sekizu

関津

Sekizu せきづ

しきしま いわさき
Shikishima Iwasaki

岩崎

Iwasaki いわさき

せきづ つつみ
Sekizu Tsutsumi

筒見

Tsutsumi つつみ

いわさき たかたき
Iwasaki Takataki

高 滝
Takataki たかたき

つつみ
Tsutsumi

むろやま
Muroyama

室 山
Muroyama むろやま

たかたき
Takataki

しがはら
Shigahara

志賀原
Shigahara しがはら

むろやま
Muroyama

ねごろ
Negoro

根 来
Negoro ねごろ

しがはら
Shigahara

ぎしゅうながさか
Gisyu-Nagasaka

葱州長坂
Gisyu-Nagasaka ぎしゅうながさか

ねごろ
Negoro

しんながさか
Shin-Nagasaka

新長坂
Shin-Nagasaka しんながさか

ぎしゅうながさか
Gisyu-Nagasaka

かひらい
Kahirai

香枚井
Kahirai かひらい

しんながさか
Shin-nagasaka

しいのせ
Shiinose

椎 瀬
Shiinose しいのせ

かひらい
Kahirai

ながなえ
Naganae

長 苗
Naganae ながなえ

しいのせ
Shiinose

しんしばぐさ
Shin-Shibagusa

新芝草
Shin-Shibagusa しんしばぐさ

ながなえ
Naganae

しばぐさ
Shibagusa

芝 草
Shibagusa しばぐさ

しんしばぐさ
Shin-Shibagusa

あがの
Agano

吾 野
Agano あがの

しばぐさ
Shibagusa

なつだち
Natsudachi

夏 橘
Natsudachi なつだち

あがの Agano いおりや Ioriya

庵 谷
Ioriya いおりや

なつだち Natsudachi くすのは Kusunoha

楠 葉
Kusunoha くすのは

いおりや Ioriya かしわくら Kashiwakura

柏 倉
Kashiwakura かしわくら

くすのは Kusunoha からさき Karasaki

唐 崎
Karasaki からさき

かしわくら Kashiwakura むぎのはら Muginohara

麦野原
Muginohara むぎのはら

からさき Karasaki さはし Sahashi

佐 橋
Sahashi さはし

むぎのはら Muginohara はいばら Haibara

榛 原
Haibara はいばら

さはし Sahashi かみのべ Kaminobe

上野辺
Kaminobe かみのべ

はいばら Haibara むこうやくし Mukouyakushi

向薬師
Mukouyakushi むこうやくし

かみのべ Kaminobe くしびの Kushibino

薬火野
Kushibino くしびの

むこうやくし Mukouyakushi さくらだ Sakurada

桜 田
Sakurada さくらだ

くしびの Kushibino にしおおまき Nishi-Oomaki

西大牧

Nishi-Oomaki にしおおまき

さくらだ
Sakurada

おおまき
Oomaki

大 牧

Oomaki おおまき

にしおおまき
Nishi-Oomaki

■ 葱北新線（葱州長坂～新芝草間）

背 楯

Senadate せなだて

ぎしゅうながさか
Gisyu-Nagasaka

ぎしゅうしらとり
Gisyu-Shiratori

葱州白鳥

Gisyu-Shiratori ぎしゅうしらとり

せなだて
Senadate

しんしばぐさ
Shin-Shibagusai

勝手に主題歌設定

(勝手に) 主題歌：初恋／さだまさし

<http://www.uta-net.com/song/96268/>

アルバム「夢ばかり見ていた」

(最近の勝手に主題歌) 主題歌：友達／yozuca*

<http://www.uta-net.com/song/226521/>

アルバム「15年目の女」

(2018年度の勝手に主題歌設定)

主題歌：Diamond Days ～ココロノツバサ～／上野優華

<https://www.uta-net.com/song/162881/>

(2019-2020年度の勝手に主題歌設定)

monologue／美和

<https://www.youtube.com/watch?v=l5SgWDdmjww>

お世話になった方々／参考文献

【お世話になった方々】

兵庫県尼崎市 市立北図書館・武庫公民館図書室
兵庫県伊丹市 市立図書館
アミーゴ書店 伊丹昆陽店
アマゾン（書籍）
JR西日本 お客様センター
ヨックモック お客様相談室
ネットの友人の皆様

【Special Thanks!!】

雛瀬 智美（校正担当・岡山県美作市・ボランティア）
瀬多 海人（アドバイス・神奈川県相模原市）

【参考文献】

成美堂出版 ライトノベルを書きたい人の本／榎本 秋
ベストセラーズ プロ作家養成塾 小説の書き方すべて教えます／若桜木 虔
講談社 文章作法小説の書き方／伊藤 桂一
彩流社 「懐かしドラマ」が教えてくれるシナリオの書き方／浅田 直亮・仲村みなみ
成美堂出版 小説を書きたい人の本／清原 康正
岩波ジュニア新書五四三 料理の仕事がしたい／辻 芳樹
西東社 ケーキとクッキー／小島 喜和
文化出版局 天板でしっとり焼き菓子／津田 陽子
講談社 買うより作ろう！ 人気の和菓子基本のキホン／金塚 晴子
世界文化社 お茶のおけいこ二十九 裏千家茶道 茶席に招かれたら／阿部 宗正
世界文化社 お茶のおけいこ二十八 裏千家茶道 炉の手前／阿部 宗正
世界文化社 お茶のおけいこ三十一 裏千家茶道 立礼と茶箱の手前／阿部 宗正
新紀元社／ライトノベル作家になる／榎本 秋
ダヴィッド社／新版 シナリオの基礎技術／新井 一
洋泉社／懸賞小説神髄／齋藤とみたか
映人社／シナリオ創作演習十二講／川邊一外
宝島社文庫／沖方丁の「アニメ&マンガ」ストーリー創作の極意／沖方 丁

【参考サイト】

レシピサイト「クックパッド」 <http://cookpad.com/>
東海道大名物 走り井餅本家 大津追分 <http://www.hashiriimochi.co.jp/>

室山県各市町村の詳細設定

紅葉野日記の街 架空都市「室山県」

紅葉野日記を書くにあたって、十年ぐらい温めていた架空都市構想。それは、岡山県を改造した「室山県」。伯備線を真っ直ぐにしたような感じで、岡山県がもう少し平地が多い街と想定して好きにデザインした。

室山県秋津浜（あきつはま）市

瀬戸内海に面した行楽地、漁村。漁港や、海水浴場が多い。島嶼部も秋津浜市に属する。秋津浜駅、弓ヶ浜駅を擁する。

室山県神崎（こうざき）市

瀬戸内海に面した港湾都市。埋立地の神崎アイランドからは、四国方面行き貨客船などが就航し、本四架橋がかかっている。山陽道（国道2号）と葱州街道（国道60号）の分岐点。また、山陽新幹線の新室山（旧牡鹿沢）駅がある。百貨店等もある賑わいの街。また、高速道路は、室山県神崎市～鳥取県鳥取市を結ぶ、葱州縦貫（ぎしゅうじゅうかん）自動車道があり、一般国道は、国道60号線（葱州街道）と、その旧道（榛名街道）がある。また、旧・神崎ハーバーハイウェイは、県道1号線として、国道2号線のバイパス道路になっている。

葱州神崎（ぎしゅうこうざき）駅、西神崎駅、新室山（旧牡鹿沢）駅、海浜神崎駅、紅電神崎駅、真垣駅、牡鹿沢（おじかざわ）駅を擁する。

室山県敷島（しきしま）市

美観地区に指定された観光都市。高級住宅街。室山県立敷島女子高等学校（敷女）があるのもこの街。映画館も多い。

向田駅、敷島駅、関津（せきづ）駅、紅電敷島駅、梁瀬（やなせ）駅、敷島台駅を擁する。

※2017/12/05追記 群馬県渋川市の上越線に、本当に「敷島駅」があることを、初めて知りました。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%95%B7%E5%B3%B6%E9%A7%85>

室山県岩崎（いわさき）市

農村が開発されて成長したニュータウンを擁する新興都市。庶民的な街で、岩崎競馬場、岩崎競艇などがあり、岩崎B級グルメフェスタが年1回開催される。

岩崎駅、筒見駅、岩崎台駅、紅電岩崎駅、鍵堀台駅を擁する。

室山県室山（むろやま）市

県庁所在地。室山城址前を路面電車が行き交う。旧塩瀬町は現在では室山空港に。旧春名町は北の玄関口香枚井に。旧長坂町のセメント掘削跡地には、葱北新線が通り、宅地開発が盛ん。室山城の南部には人工の堀「鍵堀」が江戸時代に建造され、葱州街道沿いの川を「鍵堀川（かぎぼりがわ）」と改めた。

高滝駅、室山駅、志賀原駅、根来駅、葱州長坂（ぎしゅうながさか）駅、新長坂駅、香枚井（かひらい）駅、

塩瀬駅、紅電室山駅、鳥越駅、咲花台（さっかだい）駅、刈羽台（かりばねだい）駅、紅電香枚井駅、榛名天神駅、

南新町駅、塩瀬本村（しおせもとむら）駅、真願寺駅、室山空港駅、および室山市電を擁する。

室山県吾野郡椎瀬（しいのせ）町

以前の葱北本線、椎瀬駅は無人駅だったが、近年開発著しい。市町合併で紅葉野市椎瀬になる予定。ベッドタウン。

椎瀬駅を擁する。

室山県吾野（あがの）市

吾野城址を擁する古都。旧榛名町町域には、紅電の駅名に「吾野本陣」という名残を残す。独自の文化圏を形成し、古くて新しい街。奇祭「榛名天神綱引祭」が行われ、室山市春名坂上と、吾野市大字榛名との境界線の旧葱州街道榛名峠（春名坂）で綱引きを行い、その年の勝者を決める。数年後、吾野郡市の全市町合併で、室山県紅葉野（もみじの）市になり、中核市に移行することが決まっている。

長苗（ながなえ）駅、新芝草駅、芝草（しばぐさ）駅、吾野駅、夏橘（なつだち）駅、（新線）背楯（せなだて）駅、（新線）葱州白鳥（ぎしゅうしらとり）駅、

椎瀬台駅、吾野本陣駅、紅葉野駅、紅電吾野駅、橘花台（たちばなだい）駅を擁する。

室山県楠葉（くすのは）市

吾野盆地の北端に位置する街。ここより北は山岳、または高原地帯となる。平地向けの馬力のない電車はここ楠葉駅で終着。

庵谷（いおりや）駅、楠葉駅、柏倉（かしわくら）駅、

楠葉台、紅電楠葉駅、任分（にぶん）駅を擁する。

室山県楠葉郡瓜生（うりゅう）町

山腹に出来た小さな街。

（紅電）瓜生駅を擁する。

室山県麦野原（むぎのはら）市

旧麦野郡市が合併して、県内最大面積の市、麦野原市が成立。麦野高原リゾートに代表されるような避暑地、別荘地。あるいは農山村。

（葱北本線）唐崎駅、麦野原駅、佐橋（さはし）駅、
（紅電）麦野高原駅、紅電麦野原駅（終点）を擁する。

室山県薬火野（くしびの）市

麦野高原を越えた先に広がる盆地にある市。寺町に代表されるように、寺社仏閣が立ち並ぶ宗教都市。中でも薬師如来を祀る薬火野寺は、病氣平癒を祈願することができる寺院。

榛原（はいばら）駅、上野辺（かみのべ）駅、向薬師（むこうやくし）駅、薬火野（くしびの）駅、桜田駅を擁する。

室山県大牧（おおまき）市

最も鳥取県寄りの最北端の街。梨やぶどうの栽培が盛ん。フルーツの街。また、牧畜が盛んな街でもある。

西大牧駅、大牧駅（終点、ここより山陰本線鳥取方面）を擁する。

ほぼほぼ、某神奈川県、フェリス女学院高校（横浜市泉区）の制服とあまり変わりがありませんが、リボンではなく、学年色違いのスカーフになっているということ、必ず胸元に校章を模した学科別の徽章を付ける（普通科がG、家政科がH、情報処理科がIという風に）ということが異なる点です。おへそが見えないように、インナーの着用を義務付けられています。あと、襟はラインが3本ではなく2本の赤いラインで、もう少しスカートは長めです（絶対領域が見えない程度に）白のハイソックスを推奨されています。靴は黒のローファーで。後は髪形などは、清楚に地味にしていれば、特に指定なし。スカーフの色は、赤→緑→青→赤→緑→青のローテーションで、学年を識別するために、入学年度毎に異なります。なお、本作ヒロイン、高槻沙織らは緑色です。設定し疲れた……。

（ご参考）NAVERまとめ／フェリス女学院高校制服 [リンクはこちら](#)

紅葉野日記 1

<http://p.booklog.jp/book/17553>

著者：田所稲造

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inazotaddy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/17553>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社